日本醫史學雜誌

第17巻 第3号

昭和 46 年 9 月 30 日発行

原	著										
	欧州にお	3ける.	人痘接	種法は	の歴史						
	とくに	トル	コ式接	種法の	の西欧	へのひ	ろがり・	•••••	古川	明…(1)
	奈良時代	に於り	ける催	侶のこ	才芸と	しての	医療	•••••	樋口誠	战太郎…(16	(
	「鷧斎遺科	高」に	つい	(≒).	•••••				大鳥蘭	夏三郎…(26	(
	明治前北	海道	疾病史	(⇒) ·	• • • • • • • • •		· · · · · · · · · · · ·	•••••	松木	明知…(42	(2)
	北海道に	おけん	る人体	解剖の	の事蹟・	一追補-		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	松木	明知…(49)
評	伝										
	伊東玄朴	の人の	と交友	•••••				•••••;	緒方	富雄…(52	()
資	料										
	堀内文書	の研究	完 (三)						片桐	一男…(69)
	高橋由一	筆川ス	本幸民	像						(83))
例	会記事…	•••••				•••••				(85))
雑	報・	• • • • • • • •				· · · · · · · · · · · · ·				(100))

通 巻 第 1385 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2~1~1 順天堂大学医学部医史学研究室内 振替口座·東京15250番電話 (813) 3111 内線 544 近時、抗炎症の作用機作の一つとして注目されている

生体膜安定化作用の 強力な

新発売



〈新〉鎮痛・抗炎症剤(古富研究所で研究・創製)



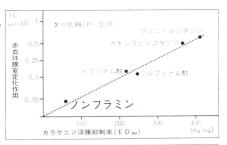
-般名=塩酸チノリジン

ノンフラミンの生体膜(ライソゾーム*膜、赤血球膜、血小板膜など)安定化作用は、抗炎症作用・鎮痛作用と相関関係のあることが、基礎実験で明らかにされています。

※ ライソゾームとは…

1955年に発見された生体の防衛機構にあずかる細胞内顆粒で 炎症もライソゾーム膜が不安定になりライソゾーム内の水解 酵素などが放出されて起こることが明らかになりました。

a)赤血球膜安定化作用(IC so)と カラゲニン浮腫抑制作用(ED so)との 相関性



b) 赤血球膜安定化作用(IC 50)と ベンゾキノン法での鎮痛作用(ED 50)との

本品には 製品識別コード を採用しています Y-NO50

包装

ノンフラミン カブセル(50mg) 100カフセル 500カフセル 1000カブセル





製造—吉富製薬株式会社 販売—武田薬品工業株式会社

欧州に於ける人痘接種法の歴史 とくにトルコ式接種法の西欧へのひろがり

古川明

じめに

は

文明諸国においても、その輸入が皆無ではないので、防疫対策として、当分種痘が続けられなくてはならない。 (1)(2)(3) 数は、一九六九年には、届出されたものだけでも、五三、六九六に達している。まだ完全なものではないが、一九七〇年 の撲滅運動では、伝染を永久にたち切ることを目標とし、かなりの成果をあげた。しかしながら、空路の発達した現在、 免疫性がだんだん衰えると、発生がくりかえされると考えられている。一九六七年からの、大規模な集団種痘によるWHO そう発生の周期的低下をみることが多かった。 の統計では、患者は二七、三六九名に減少し、過去二五年間の最低記録となった。今まで各国では、四一七年ごとに、痘(2) または開発途上の地方では、まだ本症の流行が絶えない。多ケ谷の調査によるWHOの統計では、 現今先進国では、痘そう(天然痘)が発生しないようになったが、アジア、アフリカ、 それは本症の流行に住民が驚いて、そのあと種痘の普及が続いた結果で、 南米の一部における、 全世界の痘そうの患者 未開発 1

したところ、これはジェンナーの牛痘接種法の発見以前に、広く欧米で行なわれていた人痘接種法が、トルコを中心にひ ない。わたくしは、 一九六七年にトルコ共和国から発行された種痘二五○年記念切手 (図1) を入手し、その意義を検討 ひるがえって、古くから多くの学者が苦心研究してきた痘そうの予防の歴史についても、われわれは無関心ではいられ



(1967)

て、わたくしは欧州における人痘接種法の歴史を調査したところ、成書の記 載は意外に少なく、 結果をここに報告しようと思う。 また各種の記載に一致を欠く点を見出したので、 調査の

ろがったことを、世界の国ぐにに周知させるためと知った。とれに関

トルコ式人痘接種法の西欧への伝わり

の宣伝によるものである。 行なわれていた。小川によれば、グルジア Georgia (Grusija) およびチルカッシァ Circassia 地方においては、女子の に伝わったのは、ギリシァ人医師ピラリノとチモニの医学的研究、ならびに、トルコ駐在の英国公使モンテーグ氏の夫人 アを指すのであろう。 によれば、この方法は東方の国ぐにより、北アフリカを経て、ギリシァのテッサリアに伝わり、ここからコンスタンチノ 容ぼう保護のために、早くから人痘接種法が利用され、この方法は痘そうの予防法として、ギリシァのテッサリア Thes ープルに入り、 痘そうの予防法として、古くから、インドをはじめ、シナ、ペルシアなど東方の国ぐにでは、人痘接種による予防法が を経て、一七世紀の末ごろ、コンスタンチノープルに伝わったという。ギリシァ人医師アリビサトス その地在住のギリシァ人の間にひろまったという。 これがいわゆるギリシァ式種痘法であり、トルコ式種痘法ともいわれる。 北アフリカとは、 その経路よりみて、 との方法が西ヨーロッパ アレキサンドリ Alivisatos 2

ピラリノとチモニの研究

ピラリノとチモニの人痘接種法のことに関 ヒルシュ Hirsch そのほか編の医師伝記辞典によって記載する。 (しては、アリビサトスが詳しく記しているので、主としてそれにより、(5)(6)

連し



こラリ

James

Pylarino (一六五九

1

七

八

は

ピラリニと書かれ

た書もあるが、

ギリ

ア

0

西

部

1

オニ

ア

群

島

0

ら経験的 12 行なわれていた非医者による人痘接種 がこのような業績をあげ た 0 は、 従来 法 か

167

元

読 N

語

17

もほ

訳

この

著書は

Nuper inven-

ımmunia

との本の

題

Transplanta

に任ぜられ

続

17

7

ス

七〇

魔法的雰囲気のうちに、 を軽べつせず、逆に利用したからであろう。 無造作に行なわれ、 一般に普及していた。ピラリノは、その操作や効果について、医学的 以前からテッサリア地方では、年配の婦人によって、この方法が、

あり、 開を要することがあり、 に休み、 刀を用いて数滴の膿を切開創の上に落し、 刀は鋭利なもので、 膿疱より採取する。 に詳しく検討してこれを改良し、つぎのような一応の基準を作りあげた。 特異体質」のあることを報告している。 免疫のことを考え、 の実施に最も適した季節は春で、冬を避けた方が良い。材料としての膿の選択が大切で、流行時に十分に化膿した 食餌に注意を要する。人によっては感染しないが、それは膿が不良なこともあるし、 従来は前額や頬に接種されたが、かれはむしろ、上肢と下肢を選んだ。数コの浅い切開を加え、その できるだけ清潔で冷たくないガラスの容器に材料を集め、なるべく速やかに接種する。 まれに強い全身的反応を起すこともある。 かなりこれを理解していたようである。 乾燥してから注意深く包帯をする。接種を受けた人は、数日間温 。また軽く感染する者もあるが、局所の反応が強く、 これはその人の体質によるもので、今日のいわゆる 体質的に感染しないことも 接種 い部屋で静か に用 いる

ノの接種した人で、のちに痘そうにかかって死亡した者は一例もなかった。かれは人痘接種法の著述をしてから、 一七一八年にパドアで亡くなり、 聖フランシス教会の墓地に埋葬され た

4

英国 かっ スミルナでピラリノと会っていたといわれるが、ピラリノは一六五九年に生まれているので、一七世紀末に生まれ = の方がピラリノより若かったようである。 チモニ 「のロイヤル・ソサイエティ(王立協会)の会員で、一七一三年に人痘接種法について、王立協会に報告し、これは一七 パドア大学を出て医師となり、オックスフォード大学にも学び、パドア大学の教授をしたことがある。 Emanuel Timoni は一七世紀の終りに、エーゲ海のキオス島 その免疫は長く続かず、のち一七四一年にその甲斐なく痘そうにかかって死んだといわれている。 チモニは一七一七年に、 自分の娘に人痘接種を施したが、 Khios に生まれたが、生死の年はよくわかって 再接種を行な チモ トルコ たチモ ニは な 0

(,)

四年に印刷され、この件についてのはじめての記載とされた。

の関係であろうか。(5)(6) にこの方法が普及したが、 モニの報告とは比較にならないほど立派なものだったからである。かれはこの書のなかで、ギリシァ人の家庭には速やか め、長い間のその豊富な資料は、一七一五年に著書として公にされ、もちろん英国でも読まれていたにちがいないし、チ とれを以てチモニが先取権をもったとは云えない。 なぜなら、 ピラリノはすでに一七○一年から研究をはじ トルコの人たちにこれを説得することはむづかしいだろうと記している。人種的、 宗教的など

アでは、ピラリノによって、おそらく早くから実施されていたと思われる。 かれらによって、この方法は早くから英国にも伝わったわけであるが、実施には至らなかったのであろう。 かくして、ピラリノとチモニによって開発された方法は、「ギリシァ式種痘法」として、 オスマン帝国にひろがった。 しかしベネチ

(5

モンテーグ夫人の宣伝

へ伝わった状況については、つぎのような三つの見方がある。 モンテーグ夫人 Lady Mary Wortley Montagu(一六八九-一七六二)によって、トルコ式人痘接種法が西ョーロッパ

- 台 夫人はアドリアノープルで、人痘接種法の実況をみて、これを故国の友人に手紙で報告した。トルコ共和国は、こ の一七一七年を、トルコ式種痘が西欧へ伝わった年とし、手紙の日付、四月一日をトルコの種痘記念日とした(一七一七
- (=) げとして、英国に帰った(一七一八年説)。 翌一七一八年三月に、コンスタンチノープルで、夫人の男児が接種を受け、また夫人は同年十月に、接種法をみや
- 帰国後、一七二一年に、夫人の女児が公開接種を受けた。日本その他の国では、この年を西欧への伝来の年とし、

前記(日はあまり考慮されていない(一七二一年説)。

うになった。 ンテーグ夫人伝と書簡集を中心に、(8) (9) 以上三つの見方について、 多くの文献は必ずしも記載が 各種の伝記辞典、百科辞典などにより、 ~一致し ていない。 つぎのように具体的に述べることができるよ わたくしは、 ル スバンド Halsband

夫人と男児を伴なって、ロンドンを出発した。途中オランダ、ドイツ、オーストリアに立寄り、 一十四日に、トルコのアドリアノープル Adrianople (現在のエディルネ Edirne) に着いた。 モンテーグ Edward Wortley Montagu, Senior せ、 一七一六年六月にトルコ駐在公使を命ぜられ、 安定だったので、 この旅行は苦労が多かっ 当時ヨーロ ンガリーを経て、 ッパは、 八月はじめに、 政状が不 たとい

われている。アドリアノープルはトルコとギリシのの予防法の実際をまのあたり見ること が で きぶ古代からの主要戦略地である。

ルコ服も着用し、図のようによく似合った(図3)。ここでモンテーグ夫人は、人痘接種による痘そた。その状況は、一七一七年四月一日付けで、夫人がノッティンガムの友人 Sarah Chiswell にあてた手紙に詳しく書かれている。夫人は美人で社であった。トルコ滞在中に、トルコ語を勉強し、トであった。トルコ滞在中に、トルコ語を勉強し、トであった。トルコ滞在中に、トルコ語を勉強し、トであった。トルコ滞在中に、トルコ語を勉強し、ト



図3 トルコ服のモンテーグ夫人 (Clendening より)

高山坦三博士は、その著「物語り医史」のなかに、モンテーグ夫人の手紙文を、(2) 博士の承諾を得たので、 訳文をそのまま引用させて頂くこととした。 クレンドニング Clendening

す。天然痘は、わたくしたちの国では非常に蔓延しておりますし、また大変危険な病気ですが、ことでは接種法―と命名 すぎて、秋になると一たいてい九月頃ですが一施術します。住民たちはおたがいに、だれの家庭に天然痘になるのではな されています一の発見によってほとんどまったく無害です。ここにはその施術をする一群の老婦人がおって、炎暑の候が は、 7 ありません!針の頭に乗るだけの量を静脈のなかにいれ、創口に小さな貝殻の破片をあてて包帯をします。とのようにし 人集りますーそして集合し終ると、老婆が優良種の痘苗をいれた小さな容器を持ってやってきて、どの静脈を 開き たい かと思われる人間がいるかどうかをたずねあい、いるときは施術するために集合をおとないます―通常全部で十五、 「「一ディステンパーのついでに、わたくしは、あなた自身ここに見に来たくなるようなことをお話しようと思 わたくしのかわいい子供にこれを実施しようと考えているほど、この施術の安全性を信じきっていることを、あなた 四、五カ所で静脈をひらくのです。中略。そのために死亡したという例はひとりもまだありません。 とたずねます。それによって、かの女はすぐに、だした静脈を大きな針で裂きひらき―普通のひつ掻きよりも痛くは 中略。わたくし いま

7

り戻した。モンテーグ夫人の人痘接種法にたいする貢献については、Halsband によって、詳しく記載され なかなかの重症で、美しいまつ毛が抜け、美ぼうを失なった。幸にも回復が早く、トルコに行くころは、また美しさを取 \$ し誇大のように思われる。もちろん当時、夫人はピラリノやチモニの業績を知っていなかった。夫人が人痘接種に関 この手紙でもわかるように、トルコ式接種法は従来から習慣的に非医者によって行なわれたものだが、夫人の記載も少 モンテーグ一家は、約三カ月間アドリアノープルに滞在したあと同地を去り、一七一七年五月末から翌一七一八年六月 たのは、 彼の女自身が、 一七一五年末に、痘そうにかかったからである。ロンドンの二人の名医の治療を受けたが、

帰りつい 陸した。 り モンテーグ夫人は、その年の二月中旬に、女児を分娩したので、一家は四名となった。かれらは同年七月に、 英国製の船プレストン号で、 た チュリン Turin (現在のトリノ Torino) を経てフランスを縦断し、 地中海を経由して帰路についた。 途中トロイアやカルタゴの遺跡を見学し、ゼノアに上 十月末に、 人痘接種をみやげとして、 同地 母国に

ったのである。 された。日本、 七二一年四月には、三才になったモンテーグの娘メリーも、 の英国では、 その他の国で、トルコの人痘接種法がヨーロッパに伝わったのは一七二一年とされているのは、 人痘接種法は各方面から、 もう烈な反対を受けたが、次第に一般より認められるようになり、 主治医メートランドによって接種を受け、 これは一般に公開 これ によ

トルコ共和国の種痘記念切手

わけである。 一日は前に記した通り、モンテーグ夫人が、母国の友人に手紙を書いた日で、トルコでは、この日を種痘記念日と決めた と国名が、 は、予定の日に間に合わず、おくれて九月三〇日になったという。切手の右側に、トルコ共和国 Türkiye Cumhuriyeti 一九六七年四月一日に、トルコ共和国は、 下には種痘 Çiçek Asişi と記され、一七一七一一九六七と、二五〇年の記念を示している。 トルコの種痘二五〇年の記念切手を発行した(図1)。 実際に発売され 一七一七年四月

見学したと記されている。ソコル Sokollu は Sokol (地名) で生まれたという意、メーメット Mehmet はマホメット、 アドリアノープル)の公衆浴場 なった。 者は、花や植木のつぎ木を本職とする年配の女子で、このような職業は現在はなく、もちろんその後、 hammam とよばれ、浴場の意である。すなわち、ソコル・メーメット・パシャ浴場という浴場の名称である。 で、むしぶろ、マッサージで休養をとり、柱廊、遊歩園、遊技室など、悦楽的設備も伴なっていた。切手のわくにあしら 公共浴場をえがいたもので、西欧人のいういわゆるトルコぶろである。当時の建物はローマ風 痘に用いられたものと解説されている。モンテーグ夫人の手紙に書かれているように、静脈を切開したというのは少し大 わかるようにえがかれている。 ってある多くの赤い花は、とくに意味はなく、 コ郵政省の解説書によれば、(5) モンテーグ夫人の書簡には、接種を接木 engrafting と記されている。切手の背景にえがかれ は官職で、 ケマル・パシャなどに用いられているのと同じであり、ハマニンダ Hamaninda はハンマーム Sokollu Mehmet Paşa Hamaninda を利用して集団接種され、 側方のランセットはこの接種に使用されたもので、反対側の小刀は、ジェンナー以後の種 トルコの人痘接種法 Inoculation, Variolation, Variolisation はエディルネ トルコのムードを出しているのだという。中央に人痘接種の状況が一目で の石造アーチ式の大建築 モンテーグ夫人はここで 接種は医師の業と たドームは、 (当時の この

印刷所 写真製版術で、金が塗られ光沢をつけてある。図案は Emeritus Süheyl Unver 教授の原図により、イスタンブールの (図1) は青・赤・黒・金の多色オフセット印刷である。 周囲のわくは額ぶちのようになっており、 特殊の浮彫り Sanatlar で製造され、トルコの雰囲気を良く表現した美しい切手だが、カラー印刷で図示できないのが

欧米における人痘接種法の歴史

正しく、どれが誤りとは断定できない。とれと同時に、モンテーグ夫人のはなやかな宣伝のかげにかくれて、あまり目立 たなかったギリシァ人医師ピラリノとチモニの研究報告も忘れることができない。 の年とし、また文献によっては、一七一八年をその年としているものもある。いずれも前記のように一理あって、どれが かくして、トルコでは一七一七年を、日本その他では、通常一七二一年を、トルコ式人痘接種法のヨーロッパへの伝来

たのは、一八世紀の後半になってからである。 ッパに伝わり、米国でも一七二一年に、ボイルストンが、ボストンで接種をはじめた。(16) 欧米では、一七―一八世紀ころ、痘そうがしばしば流行したので、トルコ式人痘接種法は、英国より間もなく全ヨ しかし実際に普及するようになっ 110

アリビサトスは、人痘接種法の歴史をつぎの通り三期に分けている。(5)(6)

及の時期である。 第一期(一七〇一―一七二〇)ピラリノによる人痘接種法の医学的研究と、ギリシァにおけるピラリノとチモニによる普

称えるべきであろう。 第二期(一七二〇—一七二八)接種法の西欧へ伝わった時期で、ピラリノとチモニの著述およびモンテーグ夫人の宣伝を

また、クレブス Klebs は、人痘接種法の歴史をつぎの通り四期に分けた。 第三期(一七二八―一七九八)接種法の進歩と他国へ紹介された時期で、ジェンナーの牛痘接種法の完成までをいう。

- 〇 導入期 Introductory period (|七|三-||)
- ()停滯期 Period of stagnation(一七二七—四六)
- 復活期 Second revival (一七四六一六四)
- (四) 科学的実験期 Scientific and experimental period(一七六四一九八)

トロンシァン、ディムスデール、インゲンフース、ボイルストンらをあげることができる。(fb) 一七二一一二七の間が欠けているが、導入期に含めてよいであろう。とくにこの方法の発展につくした学者としては、

パリでは、有名な文豪ヴォルテールやルッソの主治医であり、約二万例の人痘接種に成功した。 五六年に、シャルトル公 Chartres ならびにオルレアン公 Orléan の子供たちの接種のため、パリに招かれた。そして 年にスイスで、さらに一七五〇年にフランスで、はじめてこれを行なった。モリアック Mauriac によれば、かれは一七 四八年にアムステルダムで、自分の息子に人痘接種を施し、これがオランダにおける最初の接種となり、ついで一七四九 トロンシァン Théodore Tronchin(一七〇九一八一)はスイスのジュネーブの人で、ブルハーヴェの門人である。一七

(11)

種するので、副作用が少なかった。 (7)(6) (一七〇三一八八) の名を冠して、サットン法とよばれ、直接痘そう患者の痘疱から極く少量の膿汁を採取して、直ちに接 ディムスデール Thomas Dimsdale(一七一二—一八〇〇)は英国人で、一七六七年に人痘接種に関する著書を公にし 一七六八年に、ロシアのカザリン女帝に接種を施して名声を博したが、かれの方法は考案者サットン Robert Sutton

た。一七六〇年にウィーンに招かれ、二〇〇人の貧しい小児にディムスデール式接種を施して、安全なことを確かめたあ インゲンフース Jan Johannes Ingenhousz(一七三〇—九九)はオランダ人であるが、 英国の王立協会の会員であっ



1941)

を痘そうで失なっていた。インゲンフースの肖像切手は、母国オランダの文(マ)(ロ) と、女帝マリア・テレサの王子たちに接種した。女帝はそれより前に、二児 化社会事業基金の募金切手として、一九四一年に発行された (図 4)。

イルストン Zabdiel Boylston (一六七九—一七六六) はマサチュセット

が下火になるまでに二四四名に接種した。との実績によって、米国でもこの方法が普及するようになった。 (7)(18)(19) 二一年のボストンにおける痘そう流行のとき、 じめてとの方法を行なったが、実施には多くの医師の大反対を受け、一時は身の危険を感ずるほどだった。しかし、一七 Mather がヨーロッパから持ち帰った人痘接種法の報告をもとに、米国では 州ブルクリンに生まれ、ボストンで医師となった。 かれはメーサー かれは同年六月二六日に、自分の息子と二人の黒人奴れいに接種し、

法は人類に大きな貢献をした」と宣言した。ジェンナーの牛痘接種法完成ののち、約四〇年を経た一八四〇年に、英国で は法律によって、人痘接種法を禁止したというから、そのころまで、この方法が引続き実施されていたのであろう。(※) の危険を伴なうことがあった。 人痘接種法がはたした実績は、決して少なくなかったであろう。一七五四年に、ロンドンの王立医科大学は、 このようにして、人痘接種法が世界の各国で普及するにつれて、その副作用もだんだんと多く認められ、時として生命 しかし、ジェンナーの牛痘接種法が完成(一七九八)するまでの間、痘そうの予防として、 「人痘接種 (12)

日本における人痘接種法の歴史

だシナの (延享元)に、清の抗州の商人李仁山により長崎に伝来し、 かれが帰化するにおよんで漸く普及するようになった。 清の ルコ式人痘接種法がヨーロッパに伝来したころ、わが国は、江戸八代将軍徳川吉宗のはじめの時期、 人痘接種法が伝来していなかった。富士川、 小川、中野らによれば日本では、 人痘接種法はようやく一七四四年 享保年代で、ま

乾隆帝のときに完成した「医宗金鑑」(一七四九)のなかに「種痘心法要旨」として、その方法が掲載されている。医宗金 も伝わった。大鳥によれば、ケルレルは一七九○(寛政二)─九五(寛政七)に、オランダ商館の医長として在任していた。(ミキ) 版され、 0 があるが、いずれも西欧で、すでにジェンナーが牛痘接種法を発見したあと、一八一五年前後のことである。 またそのころ、長崎の蘭館医ケルレル Ambrosius Ludwig Bernard Keller によって、洋式人痘接種法(トルコ式) 古賀らは、洋式人痘接種法 緒方春朔らが、ケルレルよりこの方法を伝受した。人痘接種法を記載した蘭書よりの邦訳書には、 わが国には一七五二年(宝暦二)に輸入され、一七七八年(安永七)に、種痘編の抜すいが「種痘心法」と題して出 人痘接種法がひろく普及した。その当時は、 (トルコ式) の本邦への伝来について詳しく述べている。 前記クレブスのいう人痘接種法第四期、科学的実験期に相当する。 それらによれば、 つぎのようなも

(一八一四) および大槻玄沢訳の「接痘編」文化一三 (一八一六) がある。 ハイステル Lorenz Heister(一六八三—一七五八)原著 独 の蘭訳よりは、 桑田玄真訳の「種痘新編」文化

ハクサム John Huxham(一六九二—一七六八)原著 (英)の蘭訳よりは、吉田長淑訳の「泰西熱病論」文化一一(一

鎖国による西洋医学の伝来のおくれを証明するかのように思われる。

摘要

- 氏の夫人の宣伝によって、西欧に伝わった。 トルコ式人痘接種法は、ギリシァ人医師ピラリノとチモニの医学的研究、およびトルコ駐在の英国公使モンテーグ
- の成績を報告した。医史学書によれば、この方法が西欧に伝わったのは、モンテーグ夫人の娘が英国で、公開接種を受け ピラリノは一七一五年に、 人痘接種法に関する立派な著書を公にし、チモニは一七一三年に、英国王立協会にかれ 177

七一七)を種痘記念日とし、一九六七年に、二五〇年記念切手を発行した。 トルコ共和国では、モンテーグ夫人が人痘接種法の実際を書いて、母国の友人に送った手紙の日付、四月一日(一

178

- 人痘接種法の実施普及には、トロンシアン、ディムスデール、インゲンフース、ボイルストンらの功績が大きい。
- との方法が、ジェンナーの牛痘種痘完成までに、はたした実績は認められるべきであろう。

日本にシナの人痘接種法が紹介されたのは一七四四年であるが、洋式人痘接種法はずっとおくれて、一七九〇年ど

ついて教示頂いた友人トルコ人医師アフメット・アルテンパイ博士とトルコ共和国大使館の方がたに、深甚の謝意を表する。 (医学のあゆみ、六二巻二九ページ、昭四二)、著書よりの引用を承諾された高山坦三博士、ならびにトルコの国状、トルコ語などに 本稿は第七○回日本医史学会総会(昭四四・東京)で発表したものの一部である。この研究の端緒を開いて下さった緒方富雄博士

- 1 多ケ谷 勇:種痘、日本医師会雑誌六五、七二九―七三九、一九七一、
- 2 Medical Tribune-World Service: 天然痘発生率は急激に低下 Japan International Medical Tribune 4 (16), 18-19, 1971.
- 3 木村三生夫:種痘に関する問題点、慶応医学四四、一二三十三五、一九六七、
- 4 政修:西洋医学史、日新書院(東京)、一九四四、
- 5 Alivisatos, C. N.: The first immunologist, James Pylarino, and the introduction of variolation. Proc. Roy. Soc. Med.
- 6 Alivisatos, C. N.: Un grand initiateur hellêne de la vaccination au XVIIIme Siècle. Presse Méd. 38, 1780-1782, 1930.
- (r) Hirsch, August et al.: Biographisches Lexikon der hervorragenden Ärzte aller Zeiten und Völker. München-Berlin.

- (∞) Halsband, Robert: Life of Lady M. W. Montagu. Oxford, 1956.
- (5) Halsband, Robert: The complete letters of Lady M. W. Montagu. 3 vols. Oxford, 1965-1967.
- (음) Lee, Sidny (Editor): Dictionary of national biography. London, 1894.
- (三) Firmin Didot Frères: Nouvelle Biographie générale. Paris, 1968.
- (2) 高山 坦三:物語り医史、金剛社(東京)、一九六三、
- (역) Clendening, L.: The romance of medicine, behind the doctor. Garden City, New York. 1933.
- (크) Halsband, Robert: New light on Lady M. W. Montagu's contribution to smallpox inoculation. J. Hist. Med. VIII, 390-405, 1953.
- (E) Direction General of P. T. T., Section of stamp (Ankara, Turkey): Commemorative set honoring the 250th anniversary of the smallpox vaccination in Turkey. 1967.
- (2) Guarrison, F. H.: An introduction of the history of medicine. Philadelphia and London. 1968.
- (E) Klebs, A. C.: Die Variolation im 18ten Jahrhundert. Giessen. 1914. (Guarrison による)
- (🕿) Mauriac, P.: Libre histoire de la médecine française. Paris. 1956.
- (2) Major, R. H.: A history of medicine. Illinois. 1954.
- (S) Skinner, H. A.: The origin of medical terms. Baltimore. 1961.
- (3) 富士川 游:日本医学史網要、日本医史学会(東京)、一九六五、
- (3) 小川 鼎三:医学の歴史、中央公論社(東京)、一九六四、
- (3) 中野 操:皇国医事大年表、南江堂(東京)、一九四二、
- (3) 大鳥蘭三郎「蘭舘日誌」の医史学的研究 日本医史学雑誌、一〇、一一―一六、一九六二、
- (3) 藤井 尚久:明治前本邦疾病史、明治前日本医学史(一)、三〇八—三一一 日本学士院、日本科学史刊行会(東京)
- 一九六七、(3) 古賀十二郎:土耳古種痘法の英国伝来、牛痘接種法発明以前に於ける来舶紅毛人の種痘、長崎洋学史(中)二八〇―二九六、

(東京·篠原病院)

奈 良 時 代 に 於 け る

僧 侶 の 才 芸 بح しての 矢 療

樋 誠 太 郎

目 次

はじめに 僧侶の祈病

四 Ξ 僧侶の才芸としての医療

まとめ

は Ľ め に

に、 奈良時代に於ては、 いろいろと記されている。 僧侶の才芸が様々な面で発揮せられた事は、 日本書紀、 続日本紀、 日本霊異記等の当時の文献中

て鉛粉が化粧品として開発された事を示す記事で、僧侶の才芸が発揮された一例と見て良いであろう。 たとえば、日本書紀、持統天皇六年閏五月戊戌の条に「賜…沙門観成」 ・・。」とあり、 とれは和名抄の記事などと綜合して考察するに、 それ迄米の粉を化粧に用いていたが沙門観成によっ 絁十五匹、 綿卅屯、 布五十端、美山其所、造 鉛粉

僧医」の名称を付して、その業蹟をとりあげている。 きものは、 また、との様な技術面での僧侶の才芸の発揮もあったが、当時、 僧侶の医療行為であろう。 富士川游氏から石原明氏に至る日本医史学関係の文献は、此の様な僧侶達に対して もっとも広く、 また歴史的な視点からも特記されるべ

持者に対する除病行為として存在したと考えた。 彼等の医療行為は、現在の時点での医療の用語とは大分意味が異なると思うが、私は次の様な三つの区分が当時の疾病保

- 1 呪術的なもの、「優婆塞」などにより行なわれた「祈病」による除病行為。
- 2、薬物を与え疾病保持者に治療、看病などの医療行為をなすこと。
- 3 前に掲げた1と2の両方「祈病」と「医療」の双方を併用した除病行為。

て奈良時代の僧侶による除病行為の概要にふれて見たい。 この様に分類しても、 当時の文献、史料等から正確にその実情を見る事は不可能なものもあるが、前述の史料を引用し

二、僧侶の祈病

術性と言う特色を有していたこと(特に病気を祈祷によってなおす「祈病」と言う点からは)において、共通の性格を有してい 互いに、 がある。 どと言われた私度僧があり、 「行基」に見られる様な田園に遊行し罪福の因果を説き、或る時は、土木工事を民衆の利益のためにおとしたりした人々 奈良時代の僧侶は、律令官制のもとに、正式の「得度」を受けた官僧とも言うべき僧侶と、民間に在って「優婆塞」な その異なった身分上の差異から対立したものではなく、両者は常に交流があった様で、当時の仏教が密教性、 これ等「官僧」とも言うべきものと「民間僧」と仮称すべき二つの大きな区分が僧侶に存在したが、この両者は 彼等の中には「役小角」に代表される様な、 山林に持経、持呪し不思議をあらわした者や、 呪

仏教を無視できず常に密接な関連を保っていた。またとの様に呪力に験ある山林の「優婆塞」は貴族達にも、 制度ができあがった後でも「優婆塞貢進」と言う形で僧尼は「優婆塞」の中から供給されて、官僧達もこの様な山林 郎氏は 「我国民間信仰史の研究」 宗教編の中で、 律令体制下の最初の官寺仏教は、「優婆塞」を駆り集めて形成さ 民衆にも、

その呪力のゆえに、深い尊崇を得ていた。と概略述べておられる。

の例は、大阪府南河内郡埴生村野中寺の弥勒菩薩像台座に刻まれた銘文の中に顕著なものがある。

鈴文

|丙寅年四月大旧八日癸卯開記、橘寺知識之等詣、中宮天皇大御身労坐之時、誓願之奉弥勒御像也。友等人数百十八**、** 是依六道四生人等此教可相之也。

日)に、仲間で集まって中宮天皇(天智天皇)の病気の御平癒を祈願したと言うことである。 とあり、 丙寅の年、 即ち天智天皇五年(六六六)大の月の四月旧八日癸卯開 (開は暦の用語で舎宅を造ったり、

また日本書紀・天武天皇九年十一月癸未の記事には次の様な事が記されている。

とあり、この時代の造寺の理由に祈病の性格が在った事が理解されるであろう。

(18)

現世利益の追求に重点がおかれ、その主たる目的は現世に於ける「除病得富」であったと言えよう。 奈良時代の仏教信仰の目的は、 国家的視点からは、「鎮護国家」の大原則が存した様であるが、一般大衆にとっては、

には、 が正確な当時の史料であると言うわけではなく伝記的に語り伝えられた「優婆塞」の徳行としての祈病行為とはどんなも のであっ に在った「優婆塞」たちの徳行を記述した唯一の文献とも言われる「日本霊異記」にその実態を求めて見たい。 この様な事は官僧に限らず民間に在った私度の僧侶にも自然求められた。むしろ「優婆塞」と言われた、これらの人々 より以上に、 その概略を知る手懸りとして整理して見たものである。 との「除病得富」のための呪術的行為が求められたと言って良いであろう。 とれについて、 当時民間

史料

名

称

典

(
行者	御手代
忠	東
仙	人

2

禅師の祈病記事

li-d	
干手陀羅尼を	呪法の形態

原文なり	首にでき	る よってな
原文(頸に癭肉疽を生じ大瓜のなおってしまう。	きものができた女が	なおし妻にむかえる

原文(頸に寒肉疽を生じ大平なおってしまう。)	よってなおし妻にむかえる 従三位栗田朝臣の女の病を咒に	霊
にた寒肉疽を生じ大瓜の如し)	かえる	験
	吉野山	修行場
下	上巻	出

31

34

A RECOGNISION OF A SECRET OF THE PARTY.			LINE .
永興禅師	多師常	(義禅師とあり)	名称
病をなおす	海行 勤修	芳広経に依る。	呪法の形態
神寺の住む処、紀伊国牟婁郡 時はすぐなおる。	院病記事―看病を第一とす 更に生きかえる。 のぬべき人、験を蒙りて	では、 を経の伴造義通を全快させる、 病状記事 両の耳並びに聾ひ、 悪しき瘡身に 遍く	霊験
二十八十四年 一十四年 一十一年 一十十九年 一二十五年 一二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	看病とは 病者を仏法に おって治療す		備考
下 1~2	上 26	上 巻 8	出典

詳	不	•
を読む	香をたいて 陀羅尼	手の上に 火を置き
を乞ひ、病差みて起ち居き。病状記事、ここに食はでる病者、飯	口ばしる。後病がなおる。	病人が 託言して 病の原因を
36	下	

としての看病であるかどうか確識は存在しない。 である事が判る。看病と言うのは一例しか見られず、しかも、これが果してわれわれが現時点で考察し得る様な医療行為 この史料⊖に見られる如く、民間に在っての「優婆塞」や「禅師」の除病行為のほとんどが呪術をほどこす「祈病」中心

三、 僧侶の才芸としての医療

に記されている。 して、 その才芸を間接的医療のために発揮した例としては、 日本書紀持統天皇七年(六九三)十一月已亥の記事に次の様 鼻別√之、一無┐錯誤↑以下略ス」とあり、富士川游氏は日本医学史綱要の中にこの史料を引用されている。また、僧侶と 僧鑑真についての、元亨釈書巻一、伝智一、唐国鑑真の項には、「前ヲ略スし又諸薬物此方不」知ハ真偽ၢ救」真弁」之、真以」 病僧であり、道鏡(?――宝亀三(七七二))は、葛木山で修行をし看病、湯薬の法にくわしかったと記されている。また唐 うではない。 では、奈良時代の僧侶による除病行為が全く医療的な面をもたず、呪術性を帯びた「祈病」中心であつたかと言うとそ 服部敏良氏は「奈良時代医学の研究」と言う著書の中で 良弁(持統三(六八九)——宝亀四 (七七三)) は看

遣川沙門法員、善往、真義等」誠 飲川 近江国益須 郡 醴 泉」・・

とあり、更に八年三月已亥条には

詔 日粤以||七年歳次癸巳||醴 泉涌||於近江国益須郡都賀山| 諸 疾病 「停山宿益須寺| 而療差衆故・ (やまいびと)(やどりて) (おいゆるもの) ・・以下略ス。

等に此の様な才芸が在ったものと言えよう。八年三月の記事は、この湧泉に多くの疾病保持者が集まり益須寺に宿し療養 と、その結果を記している。即ち湧泉を沙門法員、善往、真義等に試飲、確認させている事が判るが、当然の事として彼

奈良時代の僧侶の医療行為は令義解に在る「僧尼令」中の療病に関する規制の項目と対比して考えると、僧としての職

史料 二 僧尼会

務以外の才芸として認められていた事になりそうである。

している事を記している。

九僧尼卜;;相吉凶;(謂灼」亀日卜視」地日」相、占筮亦同"也)及小道(謂厭符之類也)巫術(謂巫者之方術、既是淫耶多」端不」可言 理而已始行者皆処;還俗;也)療」病者皆還俗・・、其依;仏法・持」児教」疾不」在禁限っていませる。

うことを禁じたものであるが、しかし、仏法に依って、呪法を行なうものは、規制の範囲外であるとしている。 たものと思うが、彼等がとの勅の内容に見られるが如く「書符を封印」する(予言めいたことを述べたり)、薬物をつくる また天平元年夏四月癸亥(七二九)の勅に「内外文武」百官及天下、百姓有下、学ョ習、異端,蓄π積"幻術,厭魅呪咀、害ュ傷百 これは当時の律令体制下に在っては、僧尼令の規程をとおして、僧尼が吉凶を卜相したり巫術で療病する様な呪術を行 (21)

事が、かなり多く存在したと見て良いであろう。

学… 耳目口歯1各専… 其業1」と記され、医師の養成とその専門分野の分化の比率まで示しているが、果たして、これ がどの程度まで具体的に実現したか疑問である。 習条には、「医生既 読…諸経」乃 分」業 教習 、率」廿 以:十二人:学:: 体療・、三人 学:: 創腫・三人 学:: 少小二人 律令体制の下では、制度上では医疾令と言うものが存在し、この中に医師を養成する制度が存在した。その中の医生教

もし仮に順調に進められたとしても、富士川游氏が「日本疾病史」に引用されておられるが、奈良時代(和銅三年(七一

な医師養成の制度ではなかったと考えられる。 ○)▼延暦三年(七八四))の間の続日本紀の疫病の記事を見ると二十項目以上あり、この様な疫病の盛行に対応し得る適切

沉:|幽憂|久 廃+ 人事||自」||誕:||天皇||未:||曽||相見| | 法師一|| 看、恵然 | 開晤||至||是||適与||天皇||相見| | 天下莫」||不・ このため、 律令の条文の上では、 はっきりとしない、 僧侶の医療、 除病行為は現実ではかなり広く行なわれた様であ

看病の意味であり、新帝誕生後御病気であられた皇太夫人が玄昉の看病を受けて治ったと言う事であると、佐藤誠実氏の(宮子) ・・以下略ス。」とあり、辻善之助氏は日本仏教史第一巻上世編(一五八頁)の中で「法師一看恵然開晤」の一看の看は、

たと言う事例のある事が判る。 これを見るに、律令国家の頂点に位置する天皇の近辺においてすら、医師ではなく、玄昉と言う僧侶の看病で病が治っ 見解を引用し説明されている。

また、具体的な治療行為をした様に見られる記録も存在する。

続日本紀、天平勝宝八年四月二九日条

遣11医師、禅師、官人各一人於左右京四幾内1救11寮疹疾之徒1・・以下略ス

同 天平勝宝八年五月二三日条

禅師法栄、之性、清潔持戒第一甚能看病由」此請」於辺地」令」侍,「医薬」・・以下略ス

同 宝亀三年三月六日条

終11 其身1当時称為11十禅師1其後有5闕、択11清行者1補5之。 禅師秀南、広達、延秀、延恵、首勇、清浄、法義、尊敬、永興、光信、或持戒足、称、或看病著、声 詔 宛』供養,並

右の記事を見るに、当時官僧的存在であった禅師が流行病とか、その他の疾病の治療に医薬を用いてあたっていた事が

(22)

とに のであるので、僧尼令の規定の後半、すなわち、「仏法に依り呪を持し疾を救う」の部類に入ったのであろう。 り、 病行為をなす、 呪法を行なう事を禁じたが、この対称としたのは「優婆塞」の様に陀羅尼を誦持して呪験力を身につけ、それによって除 この様に、 個人の願望達成のための呪術的行為を「優婆塞」と同じ様なことをしていても、禅師の場合は正式の得度の受けたも 僧医 史料を検討してみると、奈良時代の医療及び除病行為の多くが僧侶の才芸に依存していた様に思われる。 の呼称が出て来る根拠が存在するとも言えよう。僧尼令では、僧尼が吉凶を卜相したり巫術で療病する様な マジシャン的存在の人々であったであろう。 それ故に民間に在って、 呪験力をもって「祈病」行為をした ح

然の事とも言えるであろう。 判然としていない事は明白である。 しかし「日本霊異記」から私が引用した史料一「優婆塞、禅師の祈病記事」を見れば、仏法にもとずくか否かの区別が これは前に述べた如く奈良時代の仏教そのものが呪術性の多いものであった事から当 23

(

最後の部分に「以前、安置堂内、 薬物の名称を付して、その量を記している。ことに仏法にもとづく医療には、 の点では仏教医学の存在も重視せねばならない。天平勝宝八年六月廿一日付の東大寺献物帳の「奉…盧舎那仏種々薬」」の 祈病」中心の「優婆塞」の除病行為との差異がことに在ったとも言えよう。 しかし「続日本紀」の記事の中に、 諸悪断却、 自非業道長無天折遂使命終之後往生花蔵世界面奉盧舎仏必欲証得遍法界位。」とあり六十種の 供養盧舎那仏、若有縁病苦可用者、並知僧綱後聴充用、 仏法にもとづく除病行為の中に医薬を用い看病している事を記したものもあり、 この種の薬物が用いられた事が判るし、 伏願服此薬者 万病悉除、 干苦皆 此

僧尼令で規制したのは、単に彼等が当時公認されていた「南都仏教」の異端者とみなしたためのみか、問題になる点であ ろう。当時の国家体制の視点から考察するに、彼等が税負担の対象外の存在として無視できなかったのではないかと私は また律令体制をしいた当時の政府が、「優婆塞」 が一般人の宗教的要求にこたえうる存在であることが明白であるのを

国家的視点からどうあろうと民衆の中にあって呪術に基いた除病行為を行なった彼等の存在は、大きか

188

四、まとめ

優婆塞が在った事は前に記した通りである。

奈良時代の僧侶が国家にその存在を公認された官僧と、 民衆の中に在って「マジシャン」的呪術行為を行なった私度

ポイントの位置を占めるものであろう。 の根幹をなしたととも言えるし、その意味では、奈良時代の僧侶の医療行為は、仏教医学の我国におけるスターティング 奈良時代に於ける僧侶の医療行為、仏教医学等は、時代の健康に伴い多少の質的相違はあるが、近世に至るまで日本医学 これに関しては、此処で結論を出すほど問題点を出しつくしているとは思わないが、一応のまとめの意味で述べるならば、 とつと見て良いと考える。 たと言う視点からである。また医史学研究の視点に立った場合とれをどう把握すべきかと言う事が問題であると考えた、 しかし僧侶であれば全てが医療とか除病行為を行なったのではなく、それぞれに才芸があり、医療、看病などもそのひ 本稿の主題を、「僧侶の才芸」としたのも、 あくまでも、 僧侶の本分は仏につかえる事であっ

綜合的研究が必要であると考える。 と思うが、此処では僧侶 なお本稿では当時の人々の疾病観と言うものにふれなかったが、僧侶の (治療行為を行なう者) の立場からのみ論旨を展開したのでふれなかったが、今後両者を併せた、 「祈病」行為が成立する背景として重要である

見せていただいた、巻末で失礼ではあるが此処に記し、 本稿を作成するに当って順天堂大学医史学研究室小川鼎三先生に種々の御教示をいただき、また同研究室所蔵の文献を 感謝の意を表らわしたい。

なお本稿作成に使用した参考文献は次の通りである。

「日本書紀」「続日本記」改訂国史大系本

「寧楽遺文」中巻 宗教編「日本仏教史」第一巻上世編

「奈良時代医学の研究」 中公新書

「日本疾病史」

「仏教芸術」 第八十一号「田本の医学」 日本歴史新書

日本科学史刊行会

緒方 富雄氏編

每日新聞社

石原

明氏著

日本の山岳宗教

富士川 游氏著 歌岛氏著

善之助氏著

和歌森太郎氏

(国学院大学 大学院 日本史学専攻 博士課程)

189

「鷧斎遺稿」について①

大鳥蘭三郎

題画 (49)

湖上秋風起。湖中鱸自肥。欲山釣得」作、鱠。綯」絲立山石磯。

『日録』 の寛政二年一月十二日の項にある。 『日録』所載の第 句中の 江 は 『起』。

(26)

送加令助之1作州1 (50)

春満東都十万家。煙霞深処競,1繁華。故人何事報,1離別。忽句天涯旧里花。

『日録』 の同年二月十七日の項にある。『日録』 所載の第二句の『春』は『繁』。 令助については未考。

又 (51)

業成才子作州帰。花散千山映11落暉?折得一枝持贈意。行前応、見作、雲飛。

『日録』 の同年三月四日の項に見える。 『日録』 所載の題欠字は『又』、 第三句中の欠字は『枝』。

奉、陪!|世子|遊!|海享| 52

仙郎 「乗暇躍n驊騮°並」轡城東好此遊。 日暖曠原春寂々。波平滄海水悠々。 舟船隠見砂村樹。 鴻雁帰飛房総州。 空濶欲

窺千里目。追陪暫上酒家楼。

『日録』の同年三月六日の項に見える。『日録』所載の第五句の『沙』は『砂』、七句目の『望』は『目』。

聞峰紫溟先生遊川来福寺1観4花賦贈 53

香台柢樹映"煙霞。乗」與同過長者車。多少黄金春自満。布余持贈一枝花。

『日録』の同年同月十一日の項にある。紫明先生は未考。

奉二問世子臥病 (54)

仙郎臥、病墨河浜。会客高堂囲、碁親。豪気樽前猶自若。笑談不、減割臂人。

『日録』の同年同月廿一日の項に見える。

遊;1墨水製此園1旧問題詩賀;1丹太夫七十1 55

紅顔臨」宴一仙児。払」絹軽々代ニ寿辞。好是依」君得」真訣。更移ニ墨水」作ニ瑤池。

『日録』の同年同月卅日の項に見える。

竹如意 (56)

堅節虚心。隱顕随地。縱」之横」之。無」不」如」意。

『日録』の同年四月十九日の項に見える。

犂尾払 (57)

尾犁兮竹栖。其質兮其天。青眼談,,玄理,白眼払,,俗塵,

右に同じ。『日録』所載の第二句の欠字は『兮』、『夫』は 『天』、 第四句の『拝』は 『払」。

九竜楊 (58)

鳴吁竹根榻。形如山九子竜。斯伏且斯潜。無」效葛陂笻。

はいる。第四句の三ケ所の欠字は『葛』、『陂』、『筇』である。 右に同じ。『日録』所載の第一句の欠字は『吁』、 第二句の『九』 のつぎには『子』がはいり、 第三句の終りに 『潜』

が

天柱几 (59)

維左維有直。与、爾遇1,其黨9其崩五石自補。不、俟女媧天柱永固。

この句は『日録』にはない。

60

田変。登、楼更見大禹功。 誰道布囊難、塞、江。千里長江半作、矼。 速。一朝湯々水上、陸。多少田園忽為、荒。蒼生一欲、帰,魚腹。君不見四海今日起。仁風。蜃気消尽風。 雙蛺蝶。同悪波上独鴛鴦。荔枝盛来青玉案。葡萄傾出黄金觴。炊√玉饌√金興無√尽。謂是如√許人世常。 高向11江目1捲。 蘭窻迫臨江流開。 含、情暁送遊冶郎。 抜扈将軍專権日。 含」態宵迎紅粉姙。紅粉遊冶情何一。清影一曲声自長。 精衛功成唱:1無雙; 江天争起玉楼台。千楼万台望嵯魄。 色雄。一望総似桑 何側水伯古悪 俱憐樹間 珠簾

十二句の 『日録』同年六月七日の項にある。『日録』には『登楼有感』の題記がある。『日録』 『歌』は『影』、 第十九句の『測』は『側』、『太』は『古』、第二十句の『蕩』は『湯』、 所載の第八句の『近』 最終句の『使』は『見』、 は 『迫』、第 (28)

『感』は『大』である。

歳暮書懐(61)

老来無一事。 寂寞坐,,寒陰。岸幘憐,霜深。孤燈照,,夜深。空伝三世術 。長棄四方心。 白駒看将」過。 凄然思不」禁。

『日録』の同年十二月十六日の項にある。

同陪1公盛1 (62)

朱門歳掛故沈々。迎」客時開翰墨林。 春近盤餐催1淑気。風来屏障隔11寒陰。論、文暫廃青雲座。 乗」與争歌白雪音。 此夕

陪從忘n世事。悠然同浴主恩深。

『日録』の同年十二月廿八日の項にある。『日録』所載の第六句の『角』は『争』、終りの字は『音』。

立春日

(63)

若問…心中事」偶然逢…立春。日憐寒色退。

座成百花新。

『日録』の寛政三年一月三日の項に見える。

偶作 (64)

生来総無事。 其奈日月空。 偶照明鏡見。 似」対二新知翁。

『日録』の同年一月廿五日の項に見える。『日録』所載第一句の『無』は『総』、『一』は『無』、第三句の『把』は

『照』は『見』。

題…桃源図 (65)

已繁;|扁舟去。踌躇迷、路人。花開不、知、落。長対;|武陵春;

『日録』の同年二月十四日の項に見える。

送山林哲帰」郷 (66)

玄都三歳煉,,金丹。々熟携帰鳥海于。正識天涯披、囊処。親朋拭、目一驚看。

日録』の同年四月十九日の項に見える。 林哲は堀内忠明で、 堀内忠寛(素堂) の父に当り、杉田玄白に師事した。文

化八年閏二月二十八日没。『日録』所載の第二句の『端』は『于』。

慰川糟子梁悼」男 (67)

憐君深座対1黃昏。何処将」招冥漠魂。排上明珠光已失。腰間匕首今猶存。衰顔聊慰清秋色。雙鬢新看白雪繁遮莫当今

無」子日。不」如縱」酒学川東門。

『日録』には記載されてない。

29) (

秋日陪11山荘宴1 (68)

Ŧi. |馬乗:1秋色。園林未、降、霜。 同年八月卅日の項に見える。『日録』にある題記の『夜口……』は『秋日……』。 行攀楓葉緑。 座対桂花麦。山静蝉声響。 径廻人語長。 幽情堪、勲、酒。陪侍酔川飛觴。 その他『日録』 の記載には誤

賀西京成斎先生九十 (69)

りが多い。

天寵鴻儒」借以」年。 逢迎矍鑠対二群生? 高堂旧盛風流会。佳宴新開日月辺。 黄髪授、経長不、改。 朱顔作」頌酔陶然。 時

依二千里京城隔。遥呈南山称寿篇。

じめが『黄』、つぎが『髪』、そのつぎが『長』、 『日録』同年九月一日の項に見える。『日録』所載の第三句中の△印の所には『盛』がはいり、同じく第五句の欠字はは 四番目が『不』。 成斎先生は未考。

寛政三、九月三日海笑大至因賦 70

何事東方海若蹻。長風吹動大洋潮。即今天地望難」辨。更上言層楼,一渺漂。

(30)

となる。『武江年表』によれば九月三日、 『日録』の同年九月四日の項に見える。 『日録』 四日両日にこのことが記されている。 所載の第一句中の欠字は『方』、 最終句の第四字目以下は 『楼 渺漂』

九月十三日夜侍」宴作 (71)

九秋陪宴処。重賞月明光。承恩無言先後。陶然酔言玉觴。

『日録』同年九月十三日の項に見える。『日録』所載の第一句の欠字は『九』、 第三句の『寵』は『恩』。

品海眺望 (72)

海天東望二総開。 万頃烟波万里来。 臨」岸児童何所」待。老翁応川是打」魚回。

『日録」の同年九月廿五日の項に見える。『日録』所載の第一句の欠字ははじめが『東』、 つぎが『望』、 第二句の蠹字は

『万頃烟』、欠字は『万』、『呈』は『里』、第三句の『隔』は『臨』、第四句の欠字ははじめは『応』、つぎは『是』、 蠹字は

魚回』である。

照鏡作 (73)

曾思燕市飲。悪見白頭翁。今我照」鏡視。衰老自相同。

をとる。 句と第二句にまたがる。 日録』の同年十月廿九日の項に見える。 第二句は『翁』で切れ、第三句中の『明』字をとり、『鏡』のつぎに『視』を加える。『同』以下 『日録』所載の第 一句中の欠字は『燕』、蠹の箇所は『飲。 悪見白頭』で第一

0

早春雪陪宴 (74)

日暮新開白玉宮。先」花雨雪舞,春風。園林多少望難」辨。 授簡相如賦難」工。

亀戸舟行 (75)

万里長江上ii碧天î烟波雪後望査然。 興来此地乗」春早。 人道山陰王子船。

右の二句は共に寛政四年一月に作ったものと思われるが、『日録』には記されていない。

除夜侍」宴 (76)

沈痾与」年除。恩賜酒有」余。相遇迎」春処。張」燈昼不」如。

『日録』の寛政四年一月十二日の項に見える。

題二月下梅花園1 77

月前梅樹望蕭条。風送1清香1影動揺。自似羅浮夢中趣。素顔終夜向1人嬌。

『日録』には見えないが、前後の関係から同年一月中旬から二月にかけて作られたと考えられる。

題三画山水 (78)

愧将,,医十隱,未,遂幽情深。試振,,霜毫,去。置,躬松樹林。

将医十隠。未遂幽』の八字が相当する。終りの蠹の所には『山水』が入る。 の同年閏二月七日の項に見える。『日録』所載のはじめの蠹とある所は第一句全部と第二句の上半分である『愧

同二諸子,奉、陪二梓島世子」遊二北郊1 (79)

此地」幽情愜。共浴,」恩光」暫避」嘩。 北郊尋」芳世子車。従陪行問有花家。 疎籬隔、路迎斜日。 烟竈当、隣映,晚霞。草樹春深鳴,野雉。溝流水暖出,田蛙。到,来

七句中の蠹の箇所には 晩霞』となり、なお第五句中の『草』に相当す。第五句は『野鶏』で終り、第六句の『氷』は『水』、『田蛙』で終る。第 『日録』の同年同月廿九日の項に見える。『日録』 第二句は『従陪行間有花家』となり、第三句は『疎籬』に始まり、『斜日』に終る。 『幽情愜』 が入り、それ以下は『共浴恩光暫避嘩』の第八句が入る。 所載の第一句中の『導茅』は『尋芳』、 蠹とある箇所には 第四句中の蠹の箇所は 『世子車』 (32)

同遊牛門荘 (80)

前移、楊開川詞場。花下賜、宴興一長。 風流世子欲、揲、芳。乗、暇会賢牛門荘。 今日此地春将、央。 至処無"総不;,春光;千樹万樹花争香。紅花白花媚;翠楊;花 者気揚々。高歌清談恰如」狂。 醉来擊筑步心地博。林中黄鳥驚人翻 此時飛花落川羽觴。傷飛処酒無」量。 好是風塵那得」妨。罄」歓上下礼相忘。

二日に作られたのではあるまいかと想像される。 この詩句は『日録』には載っていない。従ってこれが作られた時は未詳であるが、おそらくはこの年の三月朔日か、

同

侍」公家三日宴1 (81)

三月三日桃花時。高楼高宴好相随。詩成縱似,永和興。金谷三杯耶得」辞

『那』は 日録』の同年三月三日の項に見える。『日録』所載の第一句中の欠字は『桃』、第二句中の欠字は『好相』、 『耶』である。 第四句中の

道恕宅集 (82)

迎、医忘言名利。近接紅塵好避、喧 卜築新開黄橘園。 縮来設」宴一乾坤。 薬畦春暖燕遶屋。 丹竈煙軽蝶舞、軒。 並下南昌徐嬬楊。 頻傾北海孔融樽。 為之君

坤。 そのつぎの欠字は『迎』で、つぎの蠹は 第五句は『榻』で終る。第六句中の『似』は『北』、欠字は『海孔』と『樽』、第七句は欠字で始まり、 『日録』 薬』となり、 の同年三月十四日の項に見える。 第三句は『薬』より始まる。その中の欠字は『燕』である。第五句中の蠧の箇所は『並下南昌徐嬬』で、 『名利。近接紅』となり、 『日録』 所載の第一句中の『橋』は 第八句にかかり、『喧』で終る。 『橘』、 第二句中の蠧 の箇所は それは『為』で、 『設宴一乾

(33)

哭:桐生長生1 (83)

は蠹とあって全文すべて記されていない。 同じく『日録』の同年三月十四日の項に見える。『哭桐生長生』とある桐生とは桐山正哲のことと思われる。『日録』 人生雖」有」涯。 死別故堪」悲。曾多離,旧友,又忽失,前知。浮雲無,定処。逝水転関」思。何事余衰老。 相看加淚数垂。 K

閉庭聞」蟲 84

閉庭薄暮対二清秋? 初月光微望却幽。 幽情非」関川絲与」竹。 寒蛩唧々使二人愁。忽夢当時緑鬢年。 紅楼歌舞酔周旋。

情緒長無」尽。多少寒蛩鳴…枕辺。

月落閑庭霜色深。 憐蟋蟀声猶切。 不識閑庭夜已残。 寒蛩鳴、砌暁沈々。 老夫夢断、眠難、熟。 愁聴:清音:思不禁。曉雨初悠爽気至。秋雲散尽曙光寒。

可レ

『曙光寒』、第十五句の『寒』 ·録』の同年八月十四日の項に見える。『日録』所載の第二句中の欠字ははじめが『却』、つぎが『幽』。 『孫』 は 『絲』、 は削除、 △印は 「与」。 欠字は『切』、第十六句の欠字ははじめが『不』、 第十句の欠字は『暁』、 第十三句の 『収』は つぎが『已』。 『悠』。 第十四句の 第三句中の欠 『冬曙光』 は

中秋侍」宴 (85)

侯家高興白雲秋。 潮満11長江1月満」楼。 請見今宵陪」宴客。 詩成無川一不山風

三五夜中墨水阿。金樽傾尽瀉1金波。主恩深処人乗,醉。不勝秋天月色多。

月色如、霜水殿寒。承恩同倚玉欄干。樽前天転銀河出。座上騒人酔裹看。

『日録』の八月廿六日の項に見える。 題書の『流』は『侍』、 第三句の『清』は 『請』、 『流』 は 『侍』、 第六句の『潟』

は 第九句の欠字は『如』、第十一句の欠字ははじめは『銀』、つぎが『河』。

同飲友人宅 (86)

墨河秋色月中寒。無、限金波千里来。烏鵲驚飛星不、見。登楼同説坡公才。

34

園林雨歇月霜」如。 桂樹花開露自香。 今夜樽前須二酔尽。 人生幾度值言清光。

日日 同年同月同日の項に見える。第一句中の『開』は 『寒』、第六句中の欠字は

聞)雁 (87)

秋風揺落気悲哉。日落江城鳥雁来。此夕凄然誰好聴。三年孤客不」堪」衰。

郷関何処白雲秋。過雁窻前声自愁。遊子従来多;;所思;蕭然落日独登,楼。

第六句の欠字ははじめは『過雁窓』、 1録 同 年 一同月同 日の項に見える。『日録』 つぎは『愁』、 所載の第二句の欠字は『鳥』、 第七句の欠字ははじめは『遊子』、 第四句 の欠字は つぎは『多所思』、 『衰』。 第五句の欠字は 第八句の 元 白

陪"樟峯世子遊;森氏荘」 (88)

名園車馬過。 陪侍此遨遊。 日傍長松落。 水廻…奇石,流。 投」竿窺:「潜鯉°移」席聴、鳴鳩°暫解、「衣冠」去。 杯樽幾度傾。

『日録』 の同年八月卅日の項に見える。 第二句中の『邀』は『遨』、 第三句の欠字は『落』。 第六句の『酔』 は 『傾』。

送片樋道泉従川津軽侯1之4国 89

荒天万里望悠々。 從」駕辺疆幾日休。 海接11毛夷1多11異俗?地通11羽塞1早知1秋。 樽前惜」別難」分」手。席上論」心暫解」

念。却憶陪┐遊臨合浦。明珠揲得向√誰投。

『日録』には見えない。同年九月十日か同十一日に作られたものか。

陪"君侯遊;本行寺1 90

太守乗、暇上;一梵台。蒼々暮靄入、望来。 対」園祗樹嫌秋色。 陪侍無二誰酒 一杯。

『日録』 の同年九月十二日の項に第三句と第四句が見える。 第一句と第二句はつぎの如くである。『太子乗暇上梵台。 蒼 35)

々暮靄入望来』。

秋日感懐 (91)

晩秋無事坐;1堂隅?閑見長松枝上蛛。南北縣¸絲工且密。自然理得愧;1微軀?

日録』の同年九月十八日の項に見える。 『日録』所載の題記に 『秋日書懐』とあるのは『秋日感懐』、 第三句と第四句

は『南北懸絲工且密。自然理得愧徴軀』。

過友人宅 (92)

同登屋後山。 海天万里夕陽殷。 與闌時向1.園林1去。更愛黃花映酔顔。

『日録』の同年十月二日の項に見える。 『月録』所載の第二句の欠字は『殷』、 第三句の欠字は 『興闌時』。

陪11船越公1遊1鎌

十可,,斯年?翁是今年加,,一年,即今潦倒君莫,笑。明年花前詎期,然。 遊必携文雅士。 城南風暖春三月。 彩筆翻々詩相酬。但見氷魂神仙姿。美人淡妣屹不」移。 鎌田之村梅先発。鳴」鞭躍、馬幾探」芳。官道綿連直如、髪。如、蘭明公本風流。年々愛」花事:野 相従相対欲」属」酒。 酌来頻傾金屈巵。 旧道六

『可』、第十四句の欠字は『是』、第十五句の欠字は『君莫』、第十六句の欠字は『詎期』。 七句中の欠字は『毎遊』、第八句の欠字は『彩筆翩々』、第十句の『談粧』は『淡姫』。第十三句の欠字は『道』、 『日録』の寛政五年二月十七日の項に見える。『日録』所載の第四句中の『綿速』は 『綿連』、 第五句の欠字は 『五』は 第

花前賜」宴 (94)

高堂賜」宴対11庭梅?含」露清香坐上来。酔後何須夢来去。淡粧素服美人来。

終る。第三句の欠字は『須』、『梵』は『夢』、『去』で終る。第四句の欠字は『服』。 目より第一句に入り、その欠字は『高』、『日録』所載の第一句中の欠字は『対』。第二句は『含ュ露』で始まり、『来』で 『日録』 の同年二月廿日の項に見える。 但し『日録』に所載のものには誤りが多い。 題記にある『詩□堂賜宴』は二字

0

奉賀儲君新婚 (95)

予喜螽斯宜爾日。 婚成江上賽,高謀。二月桃花映」閣 重将11新曲 開。日暖睢鳩繞、洲集。 風軽荇菜逐、流来。好垂川錦帳」歌川連理。受向川鏡台,粧川落梅?

古別離(96

四十年前傷」別一離。 幾人為折垂楊枝。垂楊依」旧人誰在。 此夕帰来独自悲。

謾成 (97)

新詩久不」成。 求」句此時情。 夜雨当、窻過。先聞金石声。

(98)

心虚節疎。 如斯爾寿。 日夜相従。為1,方外友?

(99)

市朝年己暮。陪¸此厭;;浮沈。未¸遂逃;;虚境。先休出¸世心。 官情甘;,寸録。老来惜;;分陰。明日春光至。 応尋梅樹深。

早春作 (100)

茅屋青春至。 聊休衰老悲。 纔懸垂楊色。 先対早梅枝。嬾唱新声曲。 惟憐旧作詩。時逢黄鳥出。 深嘆旧相知。

雙松篇寿!!船越老公六十1 (101)

者知是誰。月池老公神仙姿。其花釀」酒其実炊。餐来万年寿見」眉。不」須今日獻,寿巵。 有松々在,,水涯。雙幹古兮千条垂。清操厳兮歳寒時。仙会栖兮今雄与,雌。聯翩翔兮対,舞移。日和鳴兮不,,相離。対之愛 事云、 寛政乙卯三月丙辰 長坂君以,,親軍,從焉、因賜,,庭頭一箇、君曰賜,,呆於君前、其有、核者懷,,其核、是重,,君贈,也、 大君蒐,千金原、殺獲甚夥、既而頒,賜所、獲於從士、每隊一頭、有,司宰,而均分、 乃產三頭骨於後 蓋享保以来盛

大蒐為」農。先王遺風。恩賚之栄。示言之無窮。

有感

園、立二石其上、欲上使二孫子」識二其処十分言翼為二之銘、二日。

簋政五年二月二十日より後、寛政七年七月廿九日より前の間に作られたものであることは確かであるように考えられる。 に挙げたりの句から回句までは『日録』に記されていない。 (102) 従ってそれ等が作られた年月日は正確には判明しないが、

凄然何事夢難」成。徒対11残燈1減且明。 同社故人又帰」土。暁来屈指転堪」驚。

『日録』の寛政七年七月廿九日の項に見える。『日録』所載の第二句中の『滅』は 『減」。

歳 暮 (103)

家々歳暮欲、迎、春。至、此分明富与、貧。富似、智多、貧似、魯。人間万事因、銭神。

『日録』の寛政七年十二月廿九日の項に見える。

C

金亀篇贈:橘園主人 (104)

迎伝。 君家霊亀何処得。蛇頭竜頚黄金亀。方円全象地与天。広肩大腰耳通」息。不」知従来経,幾年,大小変化真已然。 蟄巣,,芳蓮,。張,口含,気起,,煤烟,免仰悠々伴,,神仙,橘園主人本神仙。 何用解侭換い酒銭。。寧与、骨留楚王前。不、如曳、尾寿、此延。笑説天下有、生宗。有、麟有、鳳又有、竜、 十朋集会日周旋。 借問何意深自憐。 甲蟲三百有六 無、羨左顧鋳 盆中臓 38)

『日録』の寛政八年六月廿五日の項に見える。『日録』所載の題記中の欠字は不要、十四句の (佩平) はトル。 十五句の

『白』は『与』、十八句の『麟』は『麟』。

0

早春作 (105)

今是咋非是亦非。是非送尽值;春帰;園中梅柳催;黃鳥;門外烟霞含;翠微;

『日録』の寛政九年一月三日の項に見える。

贈」蘭花井子盈1詩以見」謝重寄 (106)

翮々錦字映:|秋陰。|憐汝交情一自深。説道畹蘭風靡後。其馨偏似二人心。

『日録』 の同年八月廿一日の項に見える。『日録』所載の第一句中の欠字は

災後謾成 (107)

灰塵遠接海東雲。 街陌縱横路不」分。天定人間春色近。携」尊将」問野梅薫。

『日録』の同年十二月二日の項に見える。『日録』所載の題中の『漫』は『謾』、第三句中の『運』は『定』、欠字は『間』、

第四句中の『樽』は『尊』。

日本堤遇」雪 (108)

『日録』の同年十二月卅日の項に見える。 暮闌春色至。千樹著」花開。顧望長堤路。北風吹」雪来。命」駕風雪裡。翮々経川墨河。此行人若問。 『日録』所載の第一句中の欠字は『暮闌』。 第六句の欠字は『河』、第八句の 為道乗」電来。

(39)

「鶴」は『鶴』。

0

暮春与11津井二子1遊11墨水1兼訊11俳人白猿閉居1 (109)

『日録』の寛政十年三月廿一日の項に見える。『日録』所載の題記中にある『興』は『与』、第一句中の『無』はその二 華。清歌妙舞人称」嘩。 厚。 節物過。 君不」見人生無百歳之人。百歳之人百歳人半風塵。去年花発風雨多。 明年花発亦如何。 即今処々風光美。好不!|歓娱| 傾、樽伝、杯発,,世情。談、玄論、心忘,,老朽。酔後更探長堤花。 邀」客将」遊墨水流。乗」興直棹一扁舟。 観者聞者常如¸麻。一朝逃来耽ī烟霞º荷¸鋤田園伴ī磨慶º我徒対¸之長嘆嗟。不¸知西山落日斜。 々中座客俱白頭。 長堤花落似山白砂。移、歩尋、芳野人家。 如」此風光幾同遊。 此時為載春醸酒。 野人元是事一繁 此日交情真自

れ 第二句のはじめに『百歳之人』をいれる。第十二句中の『只』は『真』、第十三句中の『盃』は『杯』、『廃』

204]

は『発』。第十四句中の『意』は『玄』、第十六句中の『沙』は『砂』。

送林甫俊帰信州 (110)

江城花尽子規啼。有客将帰欝翠西。到日天涯若相望。浅間烟霧使人迷。

十句は「刀圭新報」に収載されていない。 『日録』の同年四月八日の項に見える。林甫俊については未考。なおとの詩句から 『老陰』と題する詩句まで合わせて

図芙蓉餞高玄勝 (111)

都門送別難成詩。空対離筵恥才拙。開絹漫払芙蓉峰。白頭翻似絶頂雪。

送覚瑞帰米沢 (112)

帰鞍東玄白河関。関外郷雲一解顔。拭目親朋迎汝処。交情応似不忘山。

右の二句とも同年同月同日の項に見える。『日録』所載の第百十二句の第二句の『今』は『関』、『別』は『外』。

故友陸続上鬼籍有感 (113)

得寿長愁一病夫。近来何事意殊孤。世間風俗年年々変。多少親朋次第無

『日録』の同年九月十四日の項に見える。

漫成 (114)

寓居過半歳。 容膝一無情。不見黄花発。惟聞白雁声。粉々嗟拙業。 黙々厭時名。曷卜幽凄地。清秋対月明。

『日録』の同年九月廿日の項に見える。『日録』所載の第四句の欠字は『黙』。第七句の『棲』は

送井秀輔帰郷 (115)

仙子三年從鶡冠。黄金常煉竈中丹。業成雲外帰郷日。拭目親朋迎拝翰。

『日録』の同年九月廿二日の項に見える。『日録』所載の第四句の『羽』は『拝』。井秀輔については未考。

送荻立章従高鍋侯還日州 (116)

『日録』の寛政十一年五月廿日の項に見える。『日録』所載の題記中の欠字は『侯』。第四字の『限』は『陰』。 使君向封域。才子好追陪。近带青雲色。遥帰紫海陰。金丹從日熱。彩筆畳年開。襴衣趨庭去。豈唯勝老萊。

仮山銘 (117)

青山不動。白雲去来。二物移得。天地別開。

『日録』の同年六月十三日の項に見える。 小 崑 崙 (118)

崑崙九畳。縮之在旃。維石巖々。宜棲神仙。

右に同じ。

老陰

この句は『日録』にも見えない。 老来神物有誰憐。 (119) 夜々金闔対燭眠。 破却巫山当日夢。鴛鴦衾裡長凄然。

明 治 前 北 海 道 疾 病 史 (二)

はじめに

引用書目

I I

明治前北海道疾病史年表

松

木

明

知

III

1 Ľ め

は に

ある。 本編は北海道における明治前の疫癘流行や疾病の記載を諸史料から抄出したもので明治前北海道疾病史の基礎資料でも 42)

存である。 北海道の疫史に関する史料は十分発掘されたと言えず遺漏が少くないと思われるが、 今後鋭意探索し、 補充していく所

II 引 用 書 目

蝦夷雑書 箱館御収納廉分帳 北海道庁図書館蔵

1

- 2 金曽木 太田南畝 日本随筆大成 第三巻 吉川弘文館 昭和二年
- 3 仙北屋履歴 原始謾筆風土年表 北海道庁図書館蔵 村林源助 みちのく双書知出 青森県文化財保護協会 昭和三十五・六年

5

宗谷詰合山崎半蔵日記

山崎半蔵

市立函館図書館蔵

206

東蝦夷夜話 大内余庵 桜井小膳墓表銘 北海道松前町 文苑閣 文久二年 専念寺境内

天明八年巡見使応答控 高倉新一郎『アイヌ政策史』日本評論社 昭和十七年所収

8 7 6

津軽歴代記類 津軽藩 みちのく双書の 青森県文化財保護協会 昭和三十四年

道史 新撰北海道史 第二巻 北海道庁、昭和十二年

函館区史 河野常吉編 藩士大沢家永代記録 新撰北海道史 函館区役所 明治四十四年 第二巻 所収

12 11 10

13 福島村史 河野広道編 「維新前北海道変災年表」蝦夷往来双書口 尚古堂 昭和七年 より引用

北夷談 松田伝十郎 北門双書国 北光書房 昭和十九年

福山秘府 新撰北海道史 第五巻 北海道庁 昭和十二年 所収

16 15 14

松前旧事記 天保十五年 福山旧記 淡斎如水編 市立函館図書館蔵 市立函館図書館蔵

19 18 17 疱瘡一件 高倉新一郎「アイヌと痘瘡」北海道帝国大学新聞 文政六年改蝦夷地運上金 関場不二彦「中川五郎治が種痘事蹟」北海医報

20 第一五三号 昭和十年十一月五日 第六十五号、大正十四年十二月

村垣淡路守公務日記 村垣範正 市立函館図書館蔵

松前家記 松浦武四郎 新田義恭 西蝦夷日誌 市立函館図書館蔵 時事新書 時事通信社

昭和三十七年

III 明治前北海道疾病史年表

〇応仁二年(一四七〇)

松前年代記日、是戈春夏、大風飢饉、 福山秘府 人死者甚多矣

〇文明三年 (一四七二)

死之者多矣(福山秘府) 松前年代記日、是戈夷乱、 疫疾、

風災、

飢饉、

人夷

〇元和二年 (二六一六)

冬鷹疫行、鷹尽死 (福山秘府

〇寛永元年 (一六二四)

夏疱瘡流行人夷多死 (福山秘府)

〇慶安二年 (一六四九)

冬鷹疫行、鷹鶻悉死 (福山秘府

〇万治元年 (一六五八)

春夏疱瘡行、人死者多矣(福山秘府)

〇元禄十一年(二六九八)

松前年々記日、是戈疱瘡流行夷死者多矣 (福山秘府)

○享保十八年(一七三三)

按是戈天下風疫行

(福山秘府)

〇宝暦三年 (一七五三)

秋麻疹流行死者多 (福山秘府)

〇元禄十一年 (一六九七)

同年十一月西蝦夷地疱瘡時行夷多く死(松前旧事記) 秋麻疹流行死者多 (福山秘府

〇安永五年 (一七七六)

是戈麻疹流行(福山秘府

〇安永六年(一七七七)

疱瘡伝染、蝦夷人山深く遁入、漁業に能す、饑饉と 唱へり(原始謾筆風土年表)

〇安永八年 (一七七九)

是夏疱瘡流行(福山秘府)

〇安永九年(一七八〇)

是夏疱瘡行。夷人死者六百四拾七人(福山秘府

〇天明八年 (一七八八)

絶之候(天明八年巡見使応答控) 田沢、乙部などの蝦夷多くは疱瘡麻疹にて死し大分

〇寛政十年(一七九八)

十一月痘瘡流行至翌年(福山秘府)

〇寛政十二年(一八〇〇)

す。此家は三人暮にていずれも老人なり。然る所ヲ 二月上旬此地(有珠)疱瘡流行して場所場所騒動す。 シャマンベより召連れたる夷人疱瘡を煩ひ家内のも 其起は松前家足軽一人膃肭臍デバ舟の事には、ヲシ のよし。中略。ウス場所人別男女二百五十人余の内、 ンべえさし戻し、両三日過其家のもの一時に右病症 の騒立二名ども訴へ出るゆへ、病人を早々ヲシヤマ ヤマンベより夷一人召連れ、ウスに来り夷家に止宿

〇寛政十二年(一八〇〇)

場所に疱瘡流行のよし訴出夷人騒立、

同所人別男女

五百人余にて大場所なり(北夷談

四十人余死之に及べたり。中略。二月中旬にアブタ

仁三郎一人にて持場中流行の風邪又は外病にて臥居 るものなれば、疱瘡と心得騒立てる年故、其家へ参

宗谷詰合山崎半蔵日

汰もなく穏に成りたり。(北夷談 込ず、容易に与えがたく、三月中旬にして右病の沙 持場中往返甚湊ひ、医師にあらずして病歴を察し、 ウスより呼に差越し、ウスに来ればモロランより迎 ブタに来ればエトモより呼に参り、 り病症を推察して乙名どもに申諭し、騒ぐを鎮め に参り、モロランに行けばホロベツより呼に参り、 々申諭すのみにて夷人請能。尤丸薬等所持すれど 御手入れ初年の事にて、いまだ私人の風儀も吞 エトモに行けば

〇寛政十二年(一八〇〇)

〇文化二年(一八〇五 下夷地疱瘡時行夷人山奥へ逃去(福山旧記)

四月閏八月に弥り西部宗谷、登恵内、天塩、那恵幌、 、松前家記 恵由別の地方熱病流行、 夷人死する者五百九人

〇文化三年(二八〇六)

行き西廻りして来り候赤人の船中疱瘡を持来りノツ 者なり。彼話は此辺古より疱瘡、麻疹なし。二十年 人十に七八利尻も病めり、此辺に絶えたる村あり サフの懸り薪水をとりしかば彼より伝染し始めて死 以前当所の者石狩辺に居合、 夷人シュラニ何として来る。老年にして重立つ分の 其他覚えなし。 然るに一昨年東廻りして長崎 疱瘡煩ひ来り遂に死 世

〇文化五年(一八〇八)

病 云ふも気の毒に補意なく思ひ、国方には決してなき リヤコクタン同断の体困り入り候、御人権の相伴と 必煩ひ参る事なり(宗谷詰合山崎半蔵日記 軽きも粗々片輪に至るもの多し。其上皮癬と申す病 松前には瘡と云ふ病あり、此辺の若者ども繁華を見 す様、御人数の咄なれば、適々ある病気の由、 村の者申し居ると笑い乍ら面白からぬ御相伴なりと 当村九軒あり、内男夷一人女夷四人此頃病死、今十 扨又此度、古より無き事なるに腫病此近村とも多し。 んと稀れに江差へ行くもの大抵持来り重きは死し、 人大病最早今明と見え候。尚上下の隣村シルシ、 必
意
馴
れ
ぬ
風
土
に
越
年
せ
る
よ
り
と
語
れ
ば
、

文化五年 (一八〇八)

十人、仙台六十人、津軽六十人、南部三十人も殁せ 小桑と言る獼猴棑なとをも用となり、されど会津五 留しへ、蝦夷の方言志蹴礼倍奇奈と唱ふる芣苢の如 は紅紫の寸点を顕し死に至らんとす。斯色付しには き草根を浸し置めれハ、薄酒様の味出るをも用ひ、 分巾にも巻剪に五七尺も剪下し乳汁の滴を器物 三尖針にて汚血を除き癒るもあり或は乳蔓の皮を五 辺塞に心気労煩せるや或は浮腫に悩めるありて多く

る也。 南部家臣去年詰は五月三日の当着帰府(原始

謾筆風 土年表)

〇文化五年 (一八〇八)

展示月二十三日、蝦夷地へ被差度候役人之内、大勢 型被遺候様、此上越年致候者共は、小屋等与得場所 当被遺候様、此上越年致候者共は、小屋等与得場所 を撰き、竹木等茂ハ湿気深き地杯、伐払ひ又は他所 を撰き、竹木等茂ハ湿気深き地杯、伐払ひ又は他所 を撰き、竹木等茂ハ湿気深き地杯、伐払ひ又は他所 を撰き、松前奉行へも御手当之義、被成御達候旨、 無遠慮被仰立候様、牧野備前守様より御書付を以被 無遠慮被仰立候様、牧野備前守様より御書付を以被 成御達候(津軽歴代記類)

〇文化六年 (一八〇九)

内尾札部に疱瘡流行(道史)

〇文化六年(一八〇九)

疱瘡流行ノ節夷人七八分通りも死失(箱館御収納廉分

帳

〇文化六年(一八〇九

をいへども、先はじめ外部に昌さるる如く、寒熱あ多し、今其大略を記す。此病軽重によりて見症不同り。我国地方になき病故、病人も医師も心得ぬものり。我国地方になき病故、病人も医師も心得ぬものり。我国地方になき病故、病人も医師も心得ぬものといへども、先はじめ外部に昌さるる如く、寒熱あり、其名を青腿牙疳といふ。毎年奥蝦夷地に異病あり、其名を青腿牙疳といふ。毎年

りて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚にりて脚膝微腫、骨節病み、此時にはや牙齦腫、脚に

であるの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。
であるもの多し。

其効を得べし、怠りゆるがせにすべからず(金曽木)痛足に紫斑を発せばいよいよ多く此解毒丹を服して寒邪を発散し、速に此解毒丹を用ゆべし。牙齦腫脚痛口中不和心下痞等の症あらば、先奇効剤を用い脚痛のもざし有りて或は寒熱或は

〇文化七年 (一八一〇)

司季を考え、同所詰御人数一同取寄宜敷所へ引取、 辺境にて風土も不宜寒風難凌、病人死人之者多く、 辺境にて風土も不宜寒風難凌、病人死人之者多く、 と司季見斗ひ、先ソウヤ迄引上揚、異国船渡来無之 上旬季見斗ひ、先ソウヤ迄引上揚、異国船渡来無之

子相知れ次第可被仰達旨、牧野備前守様より被成御 談候様、且又当年ハ不及越年、去年為試越年の者様 越年致候様、場所場所其外之儀ハ、松前奉行 候(津軽歴代記類 へ被仰

〇文化十四年(一八一七)

〇文化十四年(一八一七) 石狩地方に疱瘡流行して蝦夷多く死す(道史)

〇文政元年 (一八一八) 大いに困りし由(文政六年改蝦夷地運上金)

去丑年(文化十四年)寅年(文政元年)疱瘡流行蝦夷

〇文政元年 (二八一八)

疱瘡流行す(道史)

七月江指 (江差―筆者) にて狗犬の人を害する事三人 に及びしが、市中山野四百疋を狩殺(原始謾筆風土年

〇文政二年 (二八一九) 疱瘡流行す(道史)

〇天保九年(一八三八 〇天保五年 (一八三四) 疱瘡流行(道史)

月二十日而卒、下略(桜井小膳墓表銘 前略—天保九年戊戌夏、巡使至松前、自松前 君皆従焉、是年疫大行、途中遇病、 帰七日以六

蝦夷人江申渡ケ条

之義は文政五午年御引継、以来場所割にて順年は為い おりて疱瘡疫病流行に付い差登」不申候(蝦夷雑書乾) 差登1来候得共、天保十五辰年より以来松前表在々に 一、三ケ場所夷人共五ケ年目に一度松前表為ハ遺登

〇天保年間

夷地に裳瘡は行はるけれども、麻疹のことはいまだ 半亡びたりとぞ(東蝦夷夜話 天保の度裳瘡大に流行して剰へ湾中海潚の為上人過 聞かず、アッケシは東蝦夷にての一大部落なりしか、

〇弘化二年 (一八四五)

五月中旬から七月まで日高三石から静内にかけて痘 瘡流行アイヌ二十四名罹患し十七名病殁す (

〇安政二年 (一八五五)

六十背負を以って度々之を差登せ介抱す(仙北屋履歴 で米百二俵比合八十七石八斗五合と早割練雑魚乾物 引上り既に餓死の場に至る。仁左衛門憫然の情に耐 保二年)の病苦を恐愕し、 安政二癸卯年冬再び該病(痘瘡)流行、土人先年(天 ず土人救助に従事し、当日霜月より翌三年四月ま 男女五十六人後志山谷に

〇安政二年 (一八五五)

土人(文政改四十六軒、二百九人、安政改十五軒五十四人)土人(文政改四十六軒、二百九人、安政改十五軒五十四人)

〇安政四年 (一八五七)

談し置(村垣淡路守公務日記) 立不:|相成:|候趣に付、荷物遠用之分引分、良輔準助立不:|相成:|候趣に付、荷物遠用之分引分、良輔準助 三月十日、ヲシャマンベ土人疱瘡にて山入致し、継

〇文久二年(一八六二)
五月以降犬疫流行(函館区史)

〇文久元年(一八六一)

大沢家永代記録) 工月より諸国一円はしか大流行に相成、男女多く死五月より諸国一円はしか大流行に相成、男女多く死

正月より八月まで悪疫流行犬多く死す(福島村史)

〇文久二年 (二八六二)

北海道における人体解剖の事蹟 ―追補―

松 木 明 知

1

示を戴いた。ここに記して同氏に深謝すると共に、前稿の追補としたい。 研究家越崎宗一氏より、エルドリッチ以前にロシアの医師アルブレヒトによって人体解剖が行われたという一史料の御教 北海道の医学史の一部として筆者は本誌に「北海道における人体解剖の事蹟」を発表したが、これに関して北海道史の(1)(2)

2

ン・ホヂソン(C. Pemberton Hodgson)は「一八五九—一八六〇年長崎箱館滞在記」なる一書を公にしている。 たという左の記載がある。 ルブレヒトが、放火犯が刑に処せられると箱館奉行所に懇願してその屍体を貰い受け、地元の医師に解剖を供覧して見せ 安政六年(一八五九)十月から翌年八月まで約一年間、初代箱館英領事 本書は彼が箱館滞在中に見聞したことを主として記したものであるが、その二二五頁に、当時露国領事館所属の医師ア (仏領事兼任)として箱館に滞在したペンバート(3)

man attached to the Consulate, begged the Governor to give him the body. When the poor man was "asphyxied at Hakodate for the incendiarism, Dr. Albrecht, a Russian gentle-It was sent to him, and be-

instructed fore all the learned doctors of the place, the dissection took place. Japanese history and habits, but the students were all highly and, I trust, painfully interested and This was a change in the annals of

3

翌年にかけて医術を目的とした人体解剖が箱館において施行されたことは否定出来ない事実であり、これはこれまで明か にされた北海道で最も古い人体解剖の記録でもある。 右の記載だけではアルブレヒトが何体の解剖を行ったかまたどこで行ったかは不詳であるが、少くとも一八五九年から

開設当時の医師ではないかと推察される。しかし函館ハリストス正教の会厨川勇神父の直話では、開設当時の領事館 の医師はゼレンスキーであるという。アルブレヒトやゼレンスキーについては更に探索し、稿を改めて論及したい。 シアの医師アルブレヒトについて詳細は不明であるが、 箱館のロシア領事館は一八五九年から開設されたのであるか (50)

4

て地元の医師に供覧したことが、 シア領事館 の医師アルブレヒトは一八五九年から翌年にかけて刑死体を箱館奉行所より貰い受け、 初代箱館英領事ペンバートン・ホヂソンの著書によって明らかにされた。

文

- 1 松木明知:北海道における人体解剖の事蹟、 日本医史学雑誌 十六巻二号、昭和四五年二月
- 3 $\widehat{2}$ 越崎宗一:初代箱館英領事の蝦夷物産論、 北海道における人体解剖の事蹟―補遺-北海道地方史の研究、八〇号、昭和四六年二月 —日本医史学雑誌 十六巻四号、昭和四五年十二月

4 Richard Bentley, 1861 Hodgson, C. Penberton: A Residense at Nagasaki and Hakodate in 1859-1860 with an Account of Japan Generally Lndon, (弘前大学医学部 麻酔科

抄録

Discovery of the Pulmonary Circulation by an Arab in the Thirteenth Century.

Anesthesia and Analgesia, 47:587, 1968 これまでの医学史で肺循環の発見者を誤って Michael Servetus (1509-1533) と Realdus Columbus (1510-1599) に帰せしめているのは残念であり、真の発見者は Alaa el Deen Ibnul Nafiess (1208-1288) である。 これらはエジブトの Muhyi al-Din al-Tatawi や Max Meyerhof らの研究によって証明されている。 Ibnul Nafiess はカイロとダマスカスに住み、ダマスカスで一二 Innul Nafiess はカイロとダマスカスに住み、ダマスカスで一二 イルに時であった。彼の原著はカイロの National Library に保存されており、次のように記されている。

ある。 riosa から出て肺へ行くことを示しているが Nafiess の記載と驚 た中世における最大の生理学者にして看過されてはならぬ人物で Nafiess によるものであり、William Harvey の先駆者としてま くほど類似している。いずれにせよ、 Columbus は一書を出版した。この書で彼は 血液が Vena arte-ない。右心室の血液は Vena arteriosa (pulmonary artery) を 目に見える孔もない。またガレンの考えている目に見えぬ孔も Ibnul Nafiess の歿後三〇〇年にして 一五五七年に Realdus arterio venosa (pulmonary vein) を通って左心室に到る。 通って肺に到達するに違いない。そこで拡散し空気と混じ 者の間に直接の連絡はない。心中隔は厚くて穿孔しておらず、 "右心室からの血液は左心室に到達するに違いない。しかし両 肺循環の発見は 松木明知 51) (

伊

玄 朴 の 人と 交 友

年記念講演にもとづき、引用を多くし、全面的に補筆したもの 手もとの資料をまじえた。 である。引用の大部分は「伊東玄朴伝」からであるが、ほかに 昭和四十六年二月二十日東京朝日講堂における伊東玄朴歿後百

十日)佐賀のまずしい農家にうまれ、のち士分に昇格し、江戸に った。 出てついに官医として最高の地位である奥医師で法印にまでのぼ 伊東玄朴は寛政十二年二月二十八日 (新暦の一八〇〇年一月二

る。 玄朴は、諱を淵、号を沖斎といった。法印の院号は長春院であ

満足できないと、とことんまで議論をするので、先生をおこらせ 朴のころは、おちぶれた農家となっていた。玄朴は重助の長男で、 おさないとき勘造といった。玄朴に二人の姉と一人の弟があつた。 重助である。もとはこの地の櫛田神社の宮司の家であったが、玄 玄朴がうまれたととろは、肥前国神崎郡仁比山村で、父は執行 玄朴は、才があり、気が強くて、わかいとき先生のいうことに

方 雄

緒

あったかが察せられる。 ここまでの若い玄朴の活動を見ても、どんなにたくましい人間で 年(一八二二)二十二歳で佐賀の蘭方医島本龍嘯の学僕になった。 く、さらに田畑を買って、家督とともに弟玄端にゆずり、文政五 とき父重助がなくなったので、家に帰って漢方で開業した。たい てしまったという。十六歳のとき、医者になる決心をして、とな り村の、名声の高い漢方医古川左庵に学んだ。ところが十九歳の へん評判がよく、よくはたらいて父の借金をかえしたばかりでな

十四歳で長崎へいって、和蘭通詞猪俣伝次右衛門の家にすみこん 学を学ぶことをすすめた。それで玄朴は文政六年(一八二三)二 ら蘭方にかわった。龍嘯は玄朴の才を見ぬいて、長崎へいって蘭 執行姓から滝野姓にかわった。 で学僕となり、本格的な蘭語の勉強をはじめた。このころ玄朴は 龍嘯ははじめ漢方の医者であったが、長崎で勉強し、帰ってか

ーボルトが鳴滝塾を開いたとき、通学生の一人となった。シーボ がて玄朴もシーボルトについて学び、翌文政七年(一八二四) ちょうどその年の八月シーボルトが長崎出島へやってきた。 P

ろつちかわれたのであろう。十八歳のころまでいたのであるから、医師としての学識はこのこれ、の塾での玄朴の行動はよくわかっていない。二十四歳から二

であった。この年猪俣伝次右衛門の娘照と結婚した。戸に出て、本所番場町で開業し、蘭学を教えはじめた。二十九歳玄朴は、文政十一年(一八二八)秋、シーボルトをはなれて江

玄朴に托したてがみである。てがみのあてさきは江戸堀留神崎屋ボルトのもとにいる高野長英(一八○四−五○)が、江戸へいくことに重要な資料がある。それはこの文政十一年の秋に、シュー一八三三)に五両を借りたということである。

ら、長英と玄朴とが心底をうちあけあう間柄であったことがわか であるといい、「何事も玄朴舌動にあり」と書いているところか 朴を「親友」とよんでいることや、長英の心底を知るものは玄朴 中にいることを物語る、不気味なものである。 このてがみは、長英が、この年に発生したシーボルト事件の渦 み相知申候。御承知可被下候。何事も玄朴舌動にあり。以上」 数多の和船破損し、委細世評に詳也。其後も又大風。彼此皆以 小生出立延引の原因か。外に小生心底あり。これはただ此人の 八月九日夜 当地出立可仕之処、 「此度親友滝野玄朴帰府に付、途中相認め申候。小生も当早秋 是れには色々子細有之候。最早当暮か来早春と奉存候。 (注 陽暦九月十七日) 大風にて蘭漢之商船は勿論 シーボルト引離し不申、段々失本意候。 同時に、長英が玄 当年 併

る。ちなみに玄朴は長英より約四歳年長である。

このてがみは、当時の江戸の蘭学者の動静を報じて、品評したもをいらようやく玄朴の評判がたちはじめたようであるが、翌十三年三月(一八三○)火事で焼けてしまった。三十歳であった。ちょうどとの年の十一月十日付で、蘭方医坪井信道(一七九九一一八四○)(三十二歳)が、大阪で開業した岡研介(一七九九一一八四○)(三十二歳)にあてたてがみがある。研介はシーボルトの高弟で、信道より四歳年下であるが、大いに尊敬していた。このてがみは、当時の江戸の蘭学者の動静を報じて、品評したもとのてがみは、文政十二年(一八二九)下谷長者町に移った。このころからようやく玄朴は、文政十二年(一八二九)下谷長者町に移った。このころからようやく玄朴は、文政十二年(一八二九)下谷長者町に移った。このころからようであるが、大いに尊敬している。

必ず千載の俗習を一洗して実学を一定せんこと疑なし。「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる「江戸洋学家無数御座候へども、多分山師俗子のみ、一もとる

二陳 昨夜玄朴宅にて高野長英に面会致候。放蕩を絶ち書生 二陳 昨夜玄朴宅にて高野長英に面会致候。 「一八三八没」、 滝野 とのてがみに出てくる人物のうち、 湊長安(一八三八没)、 滝野 とる。信道のてがみは当時の江戸の蘭学医の社会の沈滞を如実にある。信道のてがみは当時の江戸の蘭学医の社会の沈滞を如実にある。信道のてがみは当時の江戸の蘭学医の社会の沈滞を如実にある。信道のてがみは当時の江戸の蘭学医の社会の沈滞を絶ち書生

鍋島直正がはじめて江戸に出たとき「一代士」に召し出された。二年十二月十五日(太陽暦では一八三二年一月)玄朴は佐賀藩主すなわちこのてがみが書かれてから、ちょうど一年たった天保

伊東仁兵衛弟

別で、一つが目立て寸で、伊東 女

持被下置一代士に被召出旨被仰出候其方儀蘭学医術抜群上達,向,以,御用にも可相立に付七人御扶

とれは玄朴の人生にとって、重要な意義を持つことになった。 これは玄朴が士分になる予備手段であったという説がある。 これは玄朴が士分になる予備手段であったとである。この改姓は、これよりが滝野姓から伊東姓となったことである。この改姓は、これよりが竜野姓から伊東姓となったことである。この改姓は、これよりが東京は立ちが大きなり、祐珍(仁兵衛)の弟となった。これは玄朴が士分になる予備手段であったという説がある。

芸保四年(一八三三)玄朴は、下谷御徒町に大きな邸宅を新築した。これが象先堂である。構えは間口二十四間、奥行三十間というから、七百余坪の土地である。高塀をめぐらし、土蔵二棟。いうから、七百余坪の土地である。高塀をめぐらし、土蔵二棟。な調屋、奥座敷など、一棟数十室あつたという。二、三年前にはる部屋、奥座敷など、一棟数十室あつたという。二、三年前にはる部屋、奥座敷など、一棟数十室あつたという。二、三年前にはる部屋、奥座敷など、一棟数十室あつたという。二、三年前にはる部屋、東座敷をである。

これ以後の玄朴の医業と塾の隆盛は「伊東玄朴伝」にくわしい

れておきたい。 がおろそかになっていたようにおもわれているので、その点に触から、引用を略す。ただ玄朴の場合、医事がいそがしくて、学事

安政五年春(一八五八)の完結まで約十八年かかつている。を訳したもので、その出版は天保六年冬(一八三五)にはじまり、ツ語の原書 Grundsätze der praktischen Medizin (1823)の蘭訳ツ語の原書 Grundsätze der praktischen Medizin (1823)の蘭訳ン語の原書 Grundsätze der praktischen Medizin (1823)の蘭訳ン語の代表作は「医療正始」の出版である。ビショッフのドイ

参考のため各篇の出版年次をかかげる。

(一八五八) (第六篇と同時か)、計八篇二十四冊。 (三冊) 天保六年十二月(一八三五、正確には一八三六)、第七篇(三冊) 弘化四年(一八四七)、第八篇(三冊) 安政五年立春第六篇(三冊) 弘化三年初秋(一八四六)(前後している)、第七第六篇(三冊) 弘化三年初秋(一八四六)(前後している)、第七第六篇(三冊) 弘化三年初秋(一八四六)(前後している)、第七年四月(一八五八)(第六篇と同時か)、計八篇二十四冊。

この翻訳は箕作阮甫の手になったものといううわさがあるが、この翻訳は箕作阮甫の手になったるとなどでうらずけられが読んだ蘭書の内容について触れていることなどでうらずけられが読んだ蘭書の内容について触れていることなどでうらずけられが読んだ蘭書の内容について触れていることなどでうらずけられる。

すくなくない。病気の本態の推定、治療の論理にもそれがうかが見ても、自分が読んだ蘭語医書を反映しているとおもわれる文がまた、病人の治療などについて同僚の蘭学医にあてたてがみを

らぶもののない流行医にしたのであろう。

玄朴の交友の範囲はきわめてひろく、同学の蘭学者たちだけで玄朴の交友の範囲はきわめてひろく、同学の面をあらわしその長たる地位にいたことは、玄朴の性格の一つの面をあらわしているとも地位にいたことは、玄朴の性格の一つの面をあらわしているとおもわれる。

から、医学館は、 が医学館の検閲をうけることになれば、医学館で蘭学医学の翻訳 ける。そしてここで許可が出れば出版していいことになる。医書 医学以外の翻訳書は天文方へ、医書は医学館へまわして審査をう は、すべての出版物(訳書とかぎらず)の検閲許可制をしいた。 が、天保十三年(一八四二)でろからはじめた翻訳書、ことに翻 も医学館と関係なく、天文方の検閲でよいことになった。 は弘化二年(一八四五)七月になってゆるめられ、医学の翻訳 大いに憤慨し、医学館の暴力を非難しているのがある。との制 全く出版されなくなった。このころの蘭学医たちの文通のなかで、 の出版を、権力をもって圧迫できることになる。実際とうなって 寄をへて町奉行に出す。町奉行では、儒書と一般書は学問所へ、 本を出版したいものは、原稿(伺本)に出版許可願をそえ、 訳医書の出版の圧迫のときによくあらわれている。この年、 って出版の許可もないというありさまで、一時は医書の翻訳書は その一端は、医学館の多紀元堅(楽真院)のさしがねで、幕府 蘭学者の翻訳医書の検閲を全然しない。したが しかし、

は、奥医師で法印で執匙という、奥医師最高の地位にあった。させた(嘉永二年三月十五日、一八四九)。そのころ多紀楽真院医師など)が、外科と眼科をのぞき、蘭方をおこなうことを禁じ医師など)が、外科と眼科をのぞき、蘭方をおこなうととを禁じ多紀氏は、蘭方医圧迫の手をゆるめず、こんどは幕府の医官(奥

| 坪井翁もいられず(信道は前年十一月八日没)、私一人老人株にて」| 坪井翁もいられず(信道は前年十一月八日没)、私一人老人株にて」| ちょうどこの年の七月、玄朴が洪庵にあてたてがみで「当年は

「(略)此節は西洋宗色々故障等出来掛り居候処。 御役人等御「(略)此節は西洋宗色々故障等出来掛り居候処。 御役人等御「(略)此節は西洋宗色々故障等出来掛り居候処。 御役人等御「(略)此節は西洋宗色々故障等出来掛り居候処。 御役人等御

よく表現しているとおもわれる。 はく表現しているとおもわれる。 はく表現している。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人と述べている。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人と述べている。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人と述べている。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人と述べている。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人と述べている。当時信道がなくなったあと玄朴の年齢にちかい人

東及諸子交々相集り、摂生を厳重に申上候ニ付、(略) 伊東も陰 地でとき、川本幸民が九月二十九日付で洪庵にあてたてがみに「伊 ち嘉永元年九月(一八四八)信道が保養先の熱海から江戸へ帰っ 首が没するときの病気の場合にも、よくあらわれている。すなわ ち嘉永元年九月(一八四八)信道が保養先の熱海から江戸へ帰っ されいとおいとおもわれるが、玄朴の長老格としての役は、上述の信 されが 「老人株」というのは、いわゆる「長老格」のことと解

る。なにかにつけて玄朴が中心になっていることがわかる。にては坪井之病気、此度ハ不治と申居候由に御座候」と書いてい

てがみがある。それは、信道と玄朴と洪庵との関係を物語る興味ある まな朴が養子玄敬を大阪の洪庵に入門させることを思いたち、たま玄朴が養子玄敬を大阪の洪庵に入門させることを思いたち、たま玄朴が養子玄敬を大阪の洪庵に入門させることを思いたち、たま書かせたものである。八月二十四日夜付である。玄敬は、玄朴の書かせたものである。八月二十四日夜付である。玄敬は、玄朴の書かせたものである。八月二十四日夜付である。玄敬は、玄朴の書かせたものである。(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。 っまれ、天保七年五月(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。 うまれ、天保七年五月(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。 うまれ、天保七年五月(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。 うまれ、天保七年五月(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。 うまれ、天保七年五月(一八三六)八歳で玄朴の養子となった。

り御承知被下候。(

八月廿四日夜

坪井信

緒方洪庵様

机下

このでがみは第一に、玄朴の教育方針を信道が代弁しているばれいなく、信道の意見をふくんでいるので興味が深い。また、とれでれも洪庵が玄朴の子を特別扱いしないようにといっての門下とれが玄朴の意を伝えるためとはいえ、信道自身がかっての門下とれが玄朴の意を伝えるためとはいえ、信道自身がかっての門下とれが玄朴の意を伝えるためとはいえ、信道自身がかっての門下とれが玄朴の意を伝えるためとはいえ、信道自身がかっての門下とれたれる。玄朴がこのでがみを信道に書かせたのは、信道がが察せられる。玄朴がこのでがみを信道に書かせたのは、信道がが察せられる。玄朴がこのでがみを信道に書かせたのは、信道がが察せられる。玄朴がどんなに特別扱いされていたかの一端のは、逆にいえば、玄朴が送んなに特別扱いされているの一端を対応である。とによるとおもわれるが、玄朴が洪庵を知らなかったわけではない。なぜなら、玄朴は、天保十四年のころ、洪庵がおくってきた、扶氏治療書の翻訳(のちの「扶氏経験遺訓」として出版されたものの前身)に目をとおし、これを堀内素堂にも見せて、杉田成卿の「済生三方」の訳書との優劣をたずねているからである。

無御遠慮被仰下、且右草稿御返却可被下候(略)」上如何可有之哉。杉田済生三方とは甲乙優秀如何被思召候や、「(略)過日緒方洪庵扶氏治療書訳稿入御覧候。右は御一覧之

(天保十四年閏九月十二日 (一八四三) 付)

また玄朴は洪庵の才に目をつけていたことを示すものであろう。これは、洪庵が玄朴の学識を知って草稿の校閲をたのんだこと、

藩伊東玄敬名邵」とある。
藩伊東玄敬名邵」とある。
藩伊東玄敬名邵」とある。
帝の翻訳のできばえを、かねて評判の成卿の翻訳と比較するほどの関心を示しているのである。これは玄朴が後進にたいする思いやりでもあるのであろう。それから三年、玄朴は洪庵をわる思いやりでもあるのであろう。それから三年、玄朴は洪庵をわるとを決心したその翌日、もう実行にうつすという敏捷さは、やることを決心したその翌日、もう実行にうつすという敬捷と比較するほどの関心を示しているのである。

・特及したこと以外はなかった。 は苦して、日本の小児に善感し、全国に普及することになったころみられたが、ただ一度ロシアから由来の苗が、ある程度ひろころみられたが、ただ一度ロシアから由来の苗が、ある程度ひろころみられたが、ただ一度ロシアから由来の苗が、ある程度ひろころから、日本の小児に善感し、全国に普及することになった。

牛痘の全国普及の歴史にはふれないが、ここでも玄朴は重要な

役割をはたらいた。

の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年(一八五七)八月に種痘所設立まず痘痂が渡来した年の嘉永二年十一月、佐賀藩邸にいる小児たちに接戸の玄朴のととろへとどき、玄朴は佐賀藩邸にいる小児たちに接産人につとめた。しかし、江戸では、たとえば大阪のような組織立った種痘活動がなかなかおこらなかった。それが実現したのは、立った種痘活動がなかなかおこらなかった。それが実現したのは、立った種痘活動がなかなかおこらなかった。それが実現したのは、立った種痘活動がなかなかおこの何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の何書を出し、この年安政五年一月十五日許可となり、五月七日の「本社」といる。

の設立のために拠金した。がその取締役になった。このとき江戸在住の蘭方医八十余名がこがその取締役になった。このとき江戸在住の蘭方医八十余名がこの設立のために拠金した。

なる。

てれができたことが、非常に大きな歴史的意義を持つことにが、これができたことが、非常に大きな歴史的意義を持つことにが、これができたことが、非常に大きな歴史的意義を持つことにある。

そこで主役を演ずるのが、ほかならぬ伊東玄朴である。

お玉ケ池種痘所が活動しはじめた安政五年(一八五八)の七月、 お玉ケ池種痘所が活動しはじめた安政五年(一八五八)の七月、 の事情について記録がない。

れは全く形式的のもので、玄朴はこれと関係なく直接につれてい玄朴の場合は、その書付は江戸の鍋島藩邸にとどきはしたが、そ留守居が本人をつれて城内に出かけなければならないのであるが、った。普通には、本人登用のことが江戸の藩侯の屋敷に知らされ、このような玄朴の奥医師登用の手続はまことに異例のものであ

正公譜)
正公譜)
正公譜)
正公譜)

このように、異例な手続による登用をしなければならなかったのは、将軍の病に容易なものでないという気持からであろう。この名声の高い玄朴に直接たよりたいという気持からであろう。このころには玄朴の地位はそれほど重要なものであったことがわかる。玄朴等の奥医師任命にあたって、幕府はいまひとつ異例なことをした。すなわちこの日付で、さきに嘉永二年三月十五日に出した、「奥医師は外科、眼科のほかは蘭方をおこなってはならぬ」という禁制を廃してしまったのである。

て不苦廃事長たる所を御採用被遊折柄に付、奥医師中も和蘭医術兼学致候長たる所を御採用被遊折柄に付、奥医師中も和蘭医術兼学致候長れる所を御採用被遊析を開いています。

安政五年七月三日 久世大和守」

後にすじをとおした可能性がある。とれは全く手前勝手な理屈であるが、こうしないと、玄朴、静との二人の蘭方医を奥医師に採用することができないはずである。海の二人の蘭方医を奥医師に採用することができないはずである。

奥医師任命もまた異例である。 貫斎の四名が奥医師に登用された。 たので、七月七日付でさらに竹内玄同、坪井信良、林洞海、 い。玄朴等はもっと蘭方医をふやして万全を期したいとねがい出 蘭方医二名の奥医師登用にかかわらず、家定の病気は好転しな このような短時日のあいだの 伊東

を発したのは八月八日)。 定は三十五歳で没した。あるいは七月六日に没したともいう(喪 四名のあたらしい蘭方の奥医師が任命された七月七日、将軍家

えて、 ない。このうわさは八月のはじめごろには大阪にもとどいたとみ ている。このできごとが、蘭方医をよろこばせたのはいうまでも 果となった。これは伊東玄朴の敏捷さをよく示すものと考えられ 名の蘭方の奥医師になり、漢方の奥医師のなかにはいりこんだ結 (八月十日付) この将軍の死によって、七月三日と七日という数日のうちに六 緒方洪庵は、江戸の以前の門人箕作秋坪にあてたてがみ のなかで、 このことを書いている。

候へ共、未だ慥なる事相分り不申。当地にては伊東、 被仰付方等委敷御為聞可被下候。 に相分りかね候故、未だいづれへも祝書も遺し不申、 のみともいひ、又は竹内と貫斎とも被召出とも承り、 伊東、戸塚、竹内等抜擢のよし、是も当地にて風評在之 未だ明白 戸塚両人 何卒重便

九月一日には

とよろこんでいる。そして十日ごろには伊東、竹内、戸塚に歓状 可喜之至奉存候。是にて吾道辺も日夜相闢可申と被存候。(略)」 伊東両家、竹内、戸塚抜擢之事誠に道の為国家の為め可祝

を出している。

けた。 くたすけることができた。玄朴の象先堂へも多くの患者がおしか 不十分な知識ながら、なんとかこれに対処して、軽症のものはよ 漢方医はなにもほどこすことができなかったのに対し、蘭方医は、 安政五年は、六月ごろからコレラが全国に大流行した年である。

あるから、全文を玄朴伝から引用する。 長文であるが、玄朴の敏捷と整然たる理路とを知るによい資料で たのち、機を逸せず、幕府に対し、蘭方の官医の増員を建言した。 三日にはかなりの重態におちいつたようである。玄朴は、回復し ところが玄朴も、九月九日にコレラにかかり、十一、十二、十

申候。夫に付此節公儀に而西洋医法御用被下難有奉存候。此度之 の夥敷有之候。夫に者薬製・看病等手抜有之候而者、 之所感に心付、苦悩之極急成ル処を防止候得者、一命を助ケ候も 而は、未壱人も死亡無之候。左候得者、 夫々手当仕候処、看病其外行届候御先柄に而は、私大病後に至候 引請申候而も、六七十人宛は治療仕候。私事床中に而差図仕り、 不快中伜壱人に而は迚も左様には届兼候間、 之所に而相考候に、私方之頼来候病人も、数日に百人以上。 骨仕り、御奉公申上候心得に御座候。(故)此流行病も、此四五 場合に相成候処、天助を以蘇生仕り、難有仕合奉存候。此上者粉 図流行病に感じ十一日二日三日之処に而者、実に万死一生も無之 候而は不相叶儀は勿論、徹骨髄罷在候処、折悪敷本月九日より不 「乍恐奉申上候。私儀今般不奉存寄、結構蒙仰、日夜精勤不仕 此病も一旦自分相煩病根 無余儀御先柄斗り御 中々行届不 日 (

候由に候得ば、今日より引入可申、然る時には静海・貫斎両人限 私壱人引込候得ば、三人に相成、竹内玄同も内実は昨日妻死去仕 間唯四人限に而、 流行病之如キハ、旧来仕来之漢法丁附環中湯に灸治位之事に而は、 迚も救非命候事は六ケ敷、西洋法に限り候事と奉存候。殊に共仲 何事ぞ有之候節は、実に行届不申奉恐入候。私共え調 御製薬等に取掛り候人も無之、殊に四人に而者、

用馴候者無之候而者、 依之乍恐従来之御医師之内兼而西洋心掛弐人段々委敷取調候処, 成、誠に恐入候事に御座候。公辺に而も第一御製薬所に蘭書読 変症逝去に相成候由。 蘭法療治に相成、一旦余程快く御座候処、十六日に大下血。急に 無勢不相叶。無拠漢医之手に掛り、色々誤治相重り、十三日より 人残し被置候処に、七月八日より之大病。 琉球大島其外領内島々より産物調とに遣し、坪井芳洲と申蘭医一 に而、大病杯之懸念も無之、右之蘭医の内、能出来候者共一人は、 万端原書に而調子巨細に差図仕り、 右等之事も全く手薄之所より右之振合に相 治療之根元相立不申。 蘭医一人に而は多勢に 下働之者両三輩蘭法 執七之医者困入申候。

此節も六人西洋医国許に御供仕居候得共、君侯兼而者壮健之性質

七月十六日国許死去之趣、其節之療用方昨日初而委敷書附致内見

如期御手薄之御事に而は悲心配仕候。松平薩摩守も内実は

全く手延之事而已。其訳は薩州は十年来西洋法而已被用、

間に合居申候。公辺に而蘭法を折角御用被下置、

難有仕合に奉存

合所に而も薬製其外門人拾四五人は日夜取掛り居候事故、可成り

寄合御医師御広敷廻り

高五百石弐拾人扶持

も有之、至而正直成る人物に而、 此人者弐拾年来蘭法信用に而、私共三日罷出、本人も蘭法而已被 蘭法御制禁後無拠相止め候人に御座候。高取り之人に 収庵

致居候処、

寄合御医師御広敷廻り

高百俵御口科

松本

良甫

願候。 何卒本道に転業被仰付、奥詰御医師、 顺 被召出候。広敷廻り相勤居申候。此人は浪人中始終蘭法本道家に 此人は実父御口科に而、仔細有之、改易に相成、十年斗前、 流行家に御座候。当時も相応に流行仕候。此人御口科之事故、 旧製薬所掛り被仰付候様奉

蘭法御薬製御相立申候 奥医師見習、 而は恐入候間、 候様無之候而者、不相叶候。其場合之所新規に被召出候と申上候 になり一ト先御法相立申候。但し両人共原書読み不被申候間、 右両人奧詰御医師旧製薬所掛被仰付被下置候得者、以御蔭御薬製 人蘭書之読め申候蘭医一人頭取に被仰付、 御薬所頭取と被仰付候得は、 私俗玄主 (玄敬) 儀被召出、 新規に御扶持等に不拘 玄朴家督人に被仰付 其者より万端差図仕

伊東玄朴倅

松平肥前守家来

得ば、主人方に而も何共申上候様無之候。私より少しに而も申出 右者松平肥前守家来に付、 留守居同道御呼出に而被仰付被下置 伊東 玄圭

 $\overline{\mathbb{H}}$

何卒御賢慮被成下、宜敷御取捨被下置候程、偏に奉歎願候。以上」り、色々御薬製等之事談じ遺候得共、竹内も右様之訳に而、又々り、色々御薬製等之事談じ遺候得共、竹内も右様之訳に而、又々引入、静海・貫斎両人切に相成候而は、誠に心配に不堪、不奉顧思召、差逼り候老婆心より右之通御内々奉入御聴候。 併し御聞済も被に不相叶候半ば、御聴捨に被成下置候様奉願候。 併し御聞済も被に不相叶候半ば、御聴捨に被成下置候様奉願候。 併し御聞済も被に不相叶候半ば、御聴捨に被成下置候様奉願候。 併し御聞済も被以入中、玄圭儀肥前守方留守居御呼出に而被仰付被下置候得者、私不快不可解申上候儀共心付申問敷、殊之外都合も宜敷御座候間、私より内願申上候儀共心付申問敷、殊之外都合も宜敷御座候間、私より内願申上候儀共心付申問敷、殊之外都合も宜敷御候。以上」

勤罷在候類例に御座候。

めとった。また玄圭は万延元年五月三十二歳で没した。 伊東貫斎ははじめ織田氏で、玄朴の長女まちの夫として養子にな ても、しかたなさそうである。ちなみに、さきに奥医師になった ところは、あまりに小細工が勝ちすぎて、玄朴の私欲を批判され いっているが、養子玄敬の召出しの方法をこまかく指示している り欲が深いように思われるかもしれないが、決して他意はないと 仕とし、両人が蘭書が読めないので、蘭書の読める玄朴の養子玄 せて、蘭方の医師であることをはっきりさせ、手薄の御製薬所出 ったが、のち文久元年九月まちが没したので、吉田収庵の女浅を 三人を希望通りの地位につけてもらった。玄朴は、これではあま 有利な前例などを引いて、ぬきさしならぬところまでおいつめて、 は三十歳である。このように、玄朴はすこしのすきもない論理と、 敬がさきに緒方洪庵の塾で修業したことは上述した。この年玄敬 圭(玄敬)をその頭取にして統轄させたいという上書である。 要するに、寄合医師吉田収庵と松本良甫とを奥詰医師に昇格さ 玄

には蘭方医で最初法印に叙せられ、長春院と称した。百し出された安政五年の十一月二十三日には法橋に叙せられ、さらに同日法眼に叙せられた。そして文久元年十二月(一八六一)はじめ幕府の主要な人物の診療にあたるようになった。そして、はじめ幕府の医師のなかで、すみやかにその力を増し、将軍を玄朴は幕府の医師のなかで、すみやかにその力を増し、将軍を

月(一八六一)に西洋医学所となった。玄朴はあくる年文久二年なり、大槻俊斎が頭取となった。これはさらにあくる文久元年十幕府の所管に移り、これまでの私立の種痘所から官立の種痘所に一方種痘所は着実に発展し、万延元年十月(一八六〇)には、

三月三日その取締となった。林洞海はその手伝となった。 時々見廻り可申候得共、逐々修行人も相増候間、取締之儀相心 得候様可被致候。林洞海儀も手伝候様申候間、諸事大槻俊斎申 西洋医学所の儀、再而相達置候趣も有之候間、蘭科奥医師申合、 可被取斗候事。

伊東長春院え

していいのかもしれない。 おれたからである。こうして、蘭方 方(漢科)の奥医師の背後に多紀氏の医学館があったことと対比 痘所、西洋医学所首脳として関係するかたちとなった。これは漢 玄朴が取締を命ぜられたのは、そのころ頭取大槻俊斎が病にた (蘭科) の奥医師が公式に種

政四年二月没)、漢方医にかわって、蘭方医の時代となり、玄朴 ど蘭方医をくるしめた医学館の多紀楽真院元堅もすでになく(安 最高位につき、一方西洋医学所も最重要な地位にあった。あれほ は名実ともにその最高峰に立っていたということができる。 とのころには、玄朴は蘭科奥医師ばかりでなく、奥医師全体の

出た。そして、時を移さず、まず奥医師に叙せられ、ついで西洋 ついに玄朴に服し、世にいう有難迷惑といいながら、八月江戸に には、この際受諾しなければ身のためにならぬとまでいわれて、 を去ることはしのびなかったので、しきりと辞退したが、しまい であり、ひさしくすみなれた大阪をはなれ、自分のそだてた適塾 つけ、林洞海とともに、しきりに交渉した。洪庵は元来病弱の身 文久二年四月九日(一八六二)西洋医学所頭取大槻俊斎が没し 五十六歳であった。玄朴はその後任に大阪の緒方洪庵に目を

> がよく陰に陽に気をつけてくれた。またしばらく洪庵を自分の屋 にまで世話をし、奥医師に召出のときの城内での礼式には、 医学所頭取になった。玄朴は洪庵が江戸へ来たとき、なにからな

先生が、わたくしにつぎのようなはなしをされた(大正十四年十 なぜ洪庵をわざわざ大阪から召出したかについては、大槻如電

抜いてくることになったのである。 にこの席をあたえたくなかった。それでとうとう大阪から洪庵を ど明かだったが、玄朴は良順と大変なかがわるかったので、良順 いて新しい学問をしている松本良順が後任となることは、ほとん 選にこまっていた。その時の形勢からいって、長崎でポンペにつ 「大槻俊斎が死んで後任がきまらない。上に立つ伊東玄朴は人

の玄朴のやつが」と顔をしかめるのが常だった。」 してしまった。これは良順から直接きいたはなしで、良順は かたなく良順にあとをつがせた。良順が来てからすぐ玄朴を排除 いやがる洪庵が江戸に来て、一年足らずでなくなったので、 L

文を現代文になおして、大要を紹介する。 晩年ただ順とあらため、 て、頭取助ケになった。玄朴と良順との反目ははげしく、良順が 「蘭疇」のなかでも、このことをあからさまにのべている。 良順は、洪庵が医学所頭取になったとき、長崎から江戸に帰っ 蘭疇と号したころに語った自伝風の回

ちがっていて、ただ営利に汲々としているだけである。わたし 伊東玄朴は、そのなすところが、わたしの思うところと大変

ころの数倍もあった」
た変多く、わたしの思うとうりにならないことは、長崎にいた大変多く、わたしの思うとうりにならないことは、長崎にいたもうことをやることができないばかりか、妨害をうけたこともは地位あり、名望あり、勢力ありという人だから、わたしのおはとの人を石田三成だといったが、過言ではない。しかし玄朴

つぎの記事は、文久二年十一月(一八六二)のできごとである。 てやった。 をなじるので、 さがった。このとき玄朴がいて、わたしが玄朴を中傷したこと 考えようということであった。わたしはただちに宿直室にひき 許せないと考え、すぐに内閣に持っていって、玄朴に私心の多 のである。わたしは、なんとずるい、にくむべきやつだ、もう 本はさきに林洞海、竹内玄同その他に命じて分担翻訳させたも がないのを憂えて、麻疹の治療をくわしく書いて、これを幕府 そこで偶然玄朴の本箱をさがすと、玄朴の子方成(伊東方成) いことを語った。すると春岳も監物も大そうおどろいて、よく ねがった願書案をつくり、その麻疹の本にはさんである。この に献上し、官版として、ひろく一般の医家に与えられるように がオランダにいて、わが国に麻疹が流行するが、適当な翻訳書 ところがある日、わたしは宿直で、ひとり幕府の宿直室にいた。 手がかりがないので、しばらくそのまま様子をうかがっていた。 (大老)、水野監物(老中)などの臣下の医者にしらべさせたが、 「このころ伊東玄朴はわたしをしりぞけたくて、この時を機と わたしを 中傷しておとしいれようと 努力し、 松平春岳 わたしはいちいち(証拠をあげて)とれに答え

川院法印に叙せられた。
竹内玄同がこれにかわり、渭れ、執七拝診をやめさせられた。竹内玄同がこれにかわり、渭閣老は翌日、このことを建白されたのか、玄朴は登営を止めら

をあたえた。(略)」
をあたえた。(略)」

「蘭疇」の談話は、前後、主客の関係がはっきりしないところが「蘭疇」の談話は、前後、主客の関係がは、音にしないっすが、良順が玄朴の私物をあばいて、不正を見つけたというすじみちは、合点しにくい。良順が「不正」と摘発したのは、さきじみちは、合点しにくい。良順が「不正」と摘発したのは、さきじみちは、合点しにくい。良順が「不正」と摘発したのは、さきじみちは、合点しにくい。良順が「不正」と摘発したのは、さきじみちは、合点したいう原書を玄朴が書いていたという点のようにおもわれる。このような小細工は、洞海等が生きているのようにおもわれる。このようにおものという方ととになる。

から見てあきらかである。ともかく、この発覚が玄朴追放の導火線になったことは、結果

記」のなかで、かなり具体的にしるしている。ちようどこの事件のころのことを奥医師緒方洪庵は「勤仕向日

伊東長春院

思召有之 御匙御免被仰付差扣被仰付候

これによると、この日玄朴は、稲葉兵部少輔宅へ出頭するようにという達しをうけとらず、なにも知らずに出勤してきたようである。それであらかじめ打合せてあったように、「不快」ということにしてすぐに帰宅させ、兵部少輔の宅へ出むいて申渡をうけた。とにしてすぐに帰宅させ、兵部少輔の宅へ出むいて申渡をうけた。でれによると、奥医師の最高位である「御匙」を免ぜられ、謹慎とれたのである。そして二十五日、竹内玄同が玄朴にかわって「御匙」を仰付けられた。義父玄朴の処分があったので、おなじく奥医師貫斎は謹慎すべきかどうかをうかがったところ、そなじく奥医師貫斎は謹慎すべきかどうかをうかがったところ、そなじく奥医師貫斎は謹慎すべきかどうかをうかがったところ、そなじく奥医師貫斎は謹慎すべきかどうかをうかがったところ、そなじく鬼と師貫斎は謹慎すべきかどうかをうかがったところ、それによると、この目玄朴は、稲葉兵部少輔宅へ出頭するように

二十日のところに
ところが、玄朴の謹慎(差扣)は、十二月十二日に免ぜられた。

一当番

同人出勤に付、今日より番入」

られ、小普請入を命ぜられ、謹慎させられた。ところが、あけて文久三年一月二十五日、玄朴は奥医師も免ぜとあって、玄朴がもとどおりの役に復したことが知られる。

伊東長春院

思召在之 奥医師御免小普請入差扣被仰付

なった。 とれで安政五年七月三日(一八五八)以来蘭科奥医師になり、 とれで安政五年七月三日(一八五八)以来蘭科奥医師になり、

あてたてがみに、つぎのように書いている。ところで、文久二年十一月二十三日、玄朴が「御匙」を免ぜらところで、文久二年十一月二十三日、玄朴が「御匙」を免ぜら

大に困り入申候。御察し可被下候。」気のどく千万之事。拙者杯は万事同人に托し居候処、右之次第。にても一向不審に存候へ共、頓と相知れ不申候。此節慎中扨々にても一向不審に存候へ共、頓と相知れ不申候。此節慎中扨々

みによくあらわれている。がわからずに事件の推移をながめていた洪庵の心境は、このてががわからずに事件の推移をながめていた洪庵の心境は、このてが

方拙斎にてがみを書いて、そのなかで、まれはそのつぎの六月十一日に大阪の留守をまもっていた緒た。玄朴はそのつぎの六月十一日に大阪の留守をまもっていた緒

遣。何事も因縁と御諦め可被下候。」

遺。何事も因縁と御諦め可被下候。」

過、御心配被成間敷候。三百日は御病中之姿にて矢張奥医之御間、御心配被成間敷候。三百日は御病中之姿にて矢張奥医之御間、御配被成間敷候。三百日は御病中之姿にて矢張奥医之御間、御諸武之儀は拙老罷在候間、少も御心配無之様取計候

しこのとき、玄朴はもう奥医師ではなかった。だ玄朴である。洪庵は死後の面倒も見る心構を示している。しかだ玄朴である。洪庵は死後の面倒も見る心構を示している。しかと書いている。五十四歳であった。洪庵をムリヤリに江戸へよん

「玄朴伝」によると、玄朴は、その翌年元治元年十二月二十八日(一八六四)寄合医師を命ぜられ、医学所取締になっている。良順がさきに玄朴と「医学校顧問の名をあたえた」といっている。

玄朴は明治四年正月二日、すなわち陽暦の一八○○年二月二十 玄朴は明治四年正月二日、すなわち陽暦の一八○○年二月二十 し、栄光の頂上から転落していた。

裏づけられた強さがあったことは見のがせない。

なおして引用し、それをむすびのことばとしたい。 績とをよく表現しているので、その要点を口語体にちかい文体に看思忠悳が「伊東玄朴伝」によせた序のなかで、玄朴の人と功

およそ人というものは一方に盛名があれば、他の功績はこれにおよそ人というものは一方に盛名があれば、他の功績はこれに表されて、世に知られないものが多い。伊東玄朴先生の如きもまったばかりでなく、当時蘭学すなわち西洋の日新の学に志すものは、医学はもちろん兵学、数学、理学、化学、みなつねにその学塾に出入し、伊東玄朴の名は全国にひびいた。ついでその生国学塾に出入し、伊東玄朴の名は全国にひびいた。ついでその生国学塾に出入し、伊東玄朴の名は全国にひびいた。ついでその生国学塾に出入し、伊東玄朴の名は全国にひびいた。ついに徳川幕府に微されて、将軍の侍医となり、法眼に叙され、法印に昇進した。これは実に在野の蘭方医師が幕府の侍医に登用された最初であって、先生の名声いよいよ高くなり、多くの人が集まった。しかし蘭書を講じ門生を育てたものには大阪に緒方があり、江戸に坪井、蘭書を講じ門生を育てたものには大阪に緒方があり、江戸に坪井、竹田(成卿)があって、ともに伊東より上である。

高野長英、渡辺崋山という人たちはみなこの学のために殉じたのる。そもそも当時学を好むものはもっぱら漢学を主とし、西洋の母がの学を知らない。ただこれをしらないばかりでなく、これを日新の学を知らない。ただこれをしらないばかりでなく、これをおれたみ、甚だしきにいたっては、それを学ぶものをおとしいれた。

また、伊東玄伯、林研海をオランダに留学させたなど、多くは先 クトル・ポンペ氏をオランダから招き、学校、病院を長崎に創設 学所とし、緒方洪庵をすすめて学長とし、また政府に建議してド 広く種痘を施して日新医学の功を知らせ、これを拡張して官立医 この時にあたり、先生はまず、この難関を破り、官医となり、ま である。一時蘭方内科は、命令をもって禁止させられたのである。 し、時の俊才松本良順をすすめて、その医学伝習の任に当らせた。 た同学数人をすすめて侍医にし、同志を糾合して種痘所を設け、

> 明、手腕の敏は、実に他人のおよぶところではない。また先生が きるのである。ところが、先生の治術のことがあまりよく知られ で、伊東、林はわが国の医学留学生の最初である。先生の先見の 生の経営するところである。医学所は今の東京大学医学部の前身 におもうのである。(後略)」(大正四年十一月) たため、世人はこれの方の功績を知るものが稀であることは遺憾 この事業をするに当り、辛酸苦慮、容易でなかったことは推察で

東京大学名誉教授・蘭学資料研究会会長

矢数道明氏著「続・続漢方治療百話」を読む

大 塚 恭 男

方面にわたる活動を集約したものである。 五年刊)、「続漢方百話」(昭和四十年刊)につぐ自選第三集であ た。題名からも推察されるように、本書は「漢方百話」(昭和三 の臨床生活四十年にあたって「続・続漢方治療百話」を出版され 漢方医学の巨匠であり、また本学会の理事でもある著者が、そ 昭和四〇年七月より、 同四五年一二月の間における著者の多

の読者の便宜のために、同篇でとりあげた処方を一括して載せて 巻末に、この期間の業績総目録と全著書目録をあげ、なお治療篇 全巻をわかって、治療篇、 論説篇、 随筆篇、 叢談篇の四部とし、

ある。

ない臨床の指針であり、著者の深い臨床経験からにじみでた一話 話にまことに千金の重みを持つ。 「治療篇」は漢方の臨床に従事しているものにとって、この上

を研究する者にとって見落すことのできない論文となろう。 べき資料をもとにして克明に記載したものであり、今後この領域 医学史上、きわめて重要な意義をもつ脚気病院の顚末を、信頼す 期漢洋脚気病院設立の裏面史とその治療成績について」は、明治 学者にとっても興味深い論文がのせられている。例えば「明治初 「論説篇」には漢方治療に関する綜説的な論文が多いが、医史

員されたのである。ブーゲンビル島での生活記録 ゲンビル島などに転戦し、 に召集され、フィリッピンを皮切りに、最激戦のラバウルやブー 南方転戦中の思い出を綴った作品が多い。著者は昭和一六年八月 随筆篇」では、著者の筆はいよいよ軽妙に動くが、ここには 九死に一生を得て、昭和二一年三月復 「南海雑記(1)~

ことにもよるであろうが、著者の温厚かつ悠容迫らぬ大人的人柄 せず、却って一種ほのぼのとした空気が全篇に快くただよってい 0 何 (6)の反映でもあろう。 るのは、 著者があざやかに描かれている。戦争の悲惨さを毫末も感じさ か利用できるものをと求めて神農さながらの活躍をする若い 」は本篇での圧巻であり、食物にも薬物にも困窮した現地で、 著者がその当時より二十年以上を経過したのちであった 日

集の紹介等々である。 鹿洲翁について」、「『三帰廻翁医書』 いる。「『脈無し病』 叢談篇」には、医史学者にとって特に興味深い論文が並んで 記載の漢方医書『橘黄医談』とその著者山本 についてー 田代三喜著作

…」と述べておられ、すでに第四集のための五 記して会友諸兄姉への紹介の言葉とする。 集ぐらいまで刊行することができれば幸いこの上も 進行しておられるようである。ここに第三集読後の 本書の序で、著者は 矢数道明著 四十年続・続漢方治療百話 「引続き五年ごとに第四集、 ケ年計画が着 定価三六〇〇円 感想を二、 さらには第五 あ 3 ま なと

横須賀市追浜本町

四五

医道の日本社刊

*日本医学史名著シリーズ! 好評発売中

全七巻 五五、〇〇〇円 五五、〇〇〇円 鞆 著

資料でもある。 されている。しかし又、人蔘ばかりでなく、広く東洋文化史の研究量攷篇の全七巻の大著で、凡そ人蔘に関する資料は悉くこ、に集積 来た人蔘は、人々の生活と密接なつながりを保持してきた。古くから鹿葺と共に「蔘葺」と並称されて、最も代表的漢薬と 本書は編年記、思想篇・政治篇・経済篇・栽培篇・医学篇・雑記篇・ 夢名

甫 A 5 総 頁 四 Ξ

定価五、五〇〇円(〒三〇〇円)

頁

(最新刊) 書のみならず地理・歴史の類書を翻訳している。 らの多くは又西洋医学も学んでいる。箕作阮甫もその一人であるが 本書はその阮甫の伝記であり、呉博士の名著の一つである。 彼はオランダ書を訳述して医学書を出版し、更にその他の自然科学 日本の近代文明の発展に蘭学を修めた人々が大きく貢献したが、

刊 華岡 杏 稿本 B 日 本 青洲先生及其外科 林 本 産 叢 眼 科 科 書 叢 学 全二巻 **史** 定 A 小 書 定A具 定A呉 定A富 5 5 5 5 価 価 . 著・宗田 $\pm i$ Ó = Ti. 三〇〇円 000円 000E 一補訂 他

文

京都市下京区中堂寺西寺町 4

頁編

既

東

洞

全

集

定A吳

七

秀三·富士川游 選集校定

五〇〇円

思

頁著

振替京都8487. 電801-2375(代表)

最も代表的漢薬とされて

呉

氏

医

堂

叢

定A具

九

Ξ 五〇〇円

価

五〇〇円

〈日本医事新報別刷集シリーズ〉

4 カララス 皮膚疾患100例

B 5 判 112頁 カラー写真 100葉 **定 価 1,809円** 送 料 共

千葉大学名誉教授 竹內 勝著

日常頻繁にみられる代表的な皮膚疾患約 100例を大判カラー写真によって紹介し、疾患毎に症状、治療法、鑑別のポイントを解説するとともに局所療法を加えたもの。

5月月月 外来における簡易検査

B 5 判 64頁 カラー写真 126葉 **定 価 1,200円** 送 料 70円 順天堂大学教授 小酒井 望・同助教授 林 康之 共著 病態の把握に、正しい治療方針の決定に、臨床検査は 今や日常診療上欠くことのできない情報源。外来におい て最も頻繁に行なわれる尿、血液、便の簡易定性検査を 簡潔に要領よく、美麗なカラー写真126葉をもって構成・ 解説した本書は、他に類をみない"絵でみる臨床検査" の決定版です。実地医家、医学生各位の座右において診 療内容の向上、知識の整理にお役立て下さい。

⑥ アトラュス 直腸鏡のみかた

東邦大学教授 小平 正著

B 5 判 28頁 カラー写真 85葉 **定 価 500円** 送 料 45円 直腸疾患の増加が注目されています。この時に当り外来診察の実際、器具の操作など直腸鏡使用法の基本からポリープ、ポリポージス、潰瘍性大腸炎、直腸癌など直腸主要病変所見を、病理組織像、摘出標本と対比しながら鮮明カラー写真85葉を中心に解説した本書は、内科、外科、産婦人科臨床医家の必携書と確信します。

日本医事新報社 〒101-91 東京都千代田区神田駿河台 2-9 電話 (292) 1551 (大代表) · 振替東京 25171

232

堀内文書の研究三

片桐一男

}: ᡮ

第五〇号文書

司馬江漢書状

堀内林哲宛

人二八遣不」申候、尤売物二八不」致候事二て候、近々出来仕 候、小人製之輿地之図、此節出来ニて、白川執政君へも、 御病死之よし、扨々残念之至奉」存候、御悔申入候、 拝仕候、愈御安全之至、奉、賀候、小家も如」素、只多用のミ(繭カ) をまたせ御返事仕候、夫故勿々申上候、恐惶謹言 来仕候積ニて、下書出来仕、近刻出来之上相贈可」申候、使 り申候、然共大槻も序文ヲ入候事ニて、又々地図略説壱冊出 ニ不」満円図なり、然処、大槻氏ハ地理ニ闇き人ニて、 ニ出来仕、又其上ニ序文を入、地名之闕タルを補、亙壱二尺 候上ニて、立岩氏へ相届可」申候、尤銅版ニて、心を用、 々相伺候て、小子御懇意之諸侯方へ差上候事ニて、其以下ノ て承候、 こて相過申候、御安念可」被」下候、且仰御聞候ニハ、大人君 二月十五日御認之御書翰、御晦日ニ至来仕、 中藩居様へ御付被」成候よし、 御出精之程相見へ申 御委細御事、 只困

二月卅日

尚々何分ニも近年ニハ松嶌辺東方探』勝景」申度、貴館へ参上

堀内林哲様 可1仕候

注

の自筆書翰として疑う余地はない。
の自筆書翰として疑う余地はない。
が、第五一号文書の筆蹟と
・本書状は差出人の名を欠いているが、第五一号文書の筆蹟と

年二月三十日の書状なること明白なり。二十一日に病歿したことを指す。したがつて、本状は寛政五大人君御病死之よし=堀内林哲の実父、易庵が寛政四年八月

大槻氏=大槻玄沢。

中藩居様=上杉治憲を指す。

・小人製之興地之図=江漢作、銅版「地球全図」を指す。

· 白川執政君 = 松平定信。

・参照=片桐一男「司馬江漢の新書翰――銅版「地球全図」の知四十五年八月)。 片桐一男「銅版「地球全図」の製作事情を報ずる司馬」(『蘭学資料研究会研究報告』第二三七号、昭和四十五年六製作事情を語る――」(『古美術』第三〇号、昭和四十五年八月)。

第五一号文書 司馬江漢書状 堀内林哲宛

賀候、然は地図壱部相贈申候、是は、内々白川様へ相伺候て先達ハ御書翰被」下、辱奉」存候、春暖之比、弥御安念之至奉」

度、御訪申上度候、今日も取込多候、恐惶謹言 有」之、失念仕候、万々調法仕候、且近年之中、東方遊歷在 候、一先達、紫蘇一丁駕等被」下、辱奉」存候、其節取込之事 事相成かたく、只貴人のミ、又不」論」価候事也、御内々貴公 製申候、夫ニ付、常之人ニ難」遺候事ニて、尤書林ニて弘候 より御隠居様へ御差出候積ニ控置候間、左様ニ思召可」被」下

三月十日

司馬江漢

堀内林哲様

地図一部=江漢作、 銅版「地球全図」。

- 白川様=松平定信。
- 御隠居様=上杉治憲。
- 本状も第五〇号文書と同様、寛政五年三月十日付書状である。 前掲片桐論文参照。

第五二号文書 森島中良書状 堀内林哲宛

(端裏)

堀内林哲様

御取次申候儀、大槻はしめ何方江も御沙汰被」下ましく候、 二入、匆々別為」持上候、当時甚御制禁二御座候、 昨日者得1,拝面1致1大慶1候、扨者其節御頼之品々昨日漸手 私お蛮薬

森嶋中良

ソツヒルマート

代金壱両

ルサモコパイハ

三双替

代金弐両

但シ硝子懸目三匁五分 正味五匁入弐ツ

中可」被」下候、以上 右之通二御座候、代金此者二御渡可」被」下候、尤此手紙御火

二月廿六日

節句ニ相払度御座候、以上 尚々、去年御世話申候卦紙代壱匁八分御序二被」遣可」被」下候、

- 森島中良=一七五六─一八○八頃。柱川甫周の弟。名は虞臣、 語笺』などの著書あり。 字は甫粲、甫斎または桂林と号し、森羅万象・二世風来山人 ・天竺浪人などの別号も用いた。『紅毛雑話』『万国新話』『蕃
- ・ソツピルマート = Sublimaat 昇汞。
- バルサムコパイハ=Balsem koppig 松脂油に豊む液状樹脂を 蒸留したもの。淋疾の膿をとる良薬としていた。

五双かへ 三匁

234

第七八号文書 中林書状 堀内忠意宛

(端裏

「忠意様

貴答

中林

候間、 緬茄之義御尋御座候ニ付申上候、 王氏彙苑ト申書ニ有」之候 土地より出来候間、名ケ候事と被」思候、外ニ功能主治之事 ハ無」之者と覚ひ候、頓首 此書中眼を拭ひ候説御座候、 委曲之事ハ存知不」申候、 緬茄之緬之字義ハ緬甸与申 小生于」今此書を一覧不」致

後の名月

緬茄=ナスの一種。 緬茄実の功用は治眼眶火毒、 目綴音章。

緬甸=ビルマ。

註

第七九号文書 中林書状 堀内忠意宛

(端裏

中林

米沢山中ニ沢山有」之ものニ御座候、乍」去、本艸ニも金剛根 剛刺之義被1仰越1候、此ハ菝葜和名サルトリイバラト申ニ而、 如二尊論一春寒御家内様益御多福被」成候入」奉」賀候、 然は金

> 何書二相見得候哉可」被小仰下,候、尚又相考可」申候、何分多 ト釈名ニ相見得候得とも、全剛刺と申者ハテン今見当不」申候、 忙御座候間、先ハ荒々草復

二月涅槃

註

- 裁契= 和名サルトリイバラ。 リュ 1 7 チの痛みどめ。
- ・本艸=本艸綱目か。
- •涅槃=十五日。

一一一号文書 坪井芳洲書状 堀内忠亮宛

(端裏)

堀内忠亮様

坪井芳洲

返上申候、余八近日拝顔之上委曲申上候、草々頓首 候得共、近日中篤ト拝見仕候事ニ候、ヤツハン文典、先日申 し候処、処々御相談申上度処も有」之候、野拙事も何分多用 可」申候、莨菪頂戴之節、 上候コストニ而承知ニ御座候て、先方ニ其儘申通し金子請取 処少々拝見仕候、御文章精錬感読仕候得共、原書ニー応校正 貴書拝読仕候、尔来御遠ニ致罷過申候、年頭御尋被」下難」有 留主申失敬仕候、幼々精義旧冬御廻し之分、初之 ブリッキ入物拝借、乍」延引一今日

・坪井芳洲=坪井為春。まえの大木忠益。第一五〇号文書の註

・幼々精義 = 堀内素堂の訳本、七巻、天保十年冬稿了。 行した意義は多大。 年(一八四五)秋出版。本邦に西洋小児科学書をはじめて刊 弘化二

ブリツキ=Blik ブリキ。 原書=『幼々精義』の原書は Erfahrung, Berlin, 1836 の小児病の部を訳したものである。 ただし、素堂の用いた原書はサクセの蘭訳本(一八〇二年刊)。 medizinishen Praxis, Vermächtniss einer funfzigjährigen (1762-1836): Enchiridiom medicum oder Anleitung zur Christoph Wilhem Hufeland

第一一四号文書 杉田成卿書状 斎・高松譲庵・堀内忠亮宛 竹内玄同・箕作阮甫・宇田川興

紙弾二改正紙相貼差出候間、下河面倒一各位君子御糊貼被上下 仰下、尚又奉」願候、右誤之処は已ニ差上候上は無三致方、即 も益以二不安心」之至ニ御座候間、諸賢御心付之処、 之賜にて、速々誤相分り候段は大幸之至ニ候得共、其他之処 以一一廻状一得一貴意一候、不旬之時気御座候処、各位倍御清健被」 謬誤有」之、扨々粗鹵之至、恐悚不慮奉」存候、全坪井信良君 成「御座」奉」賀候、然は過日は拙訳本拝呈仕候処、右之内大 遂件被

> 度奉」願候、右申上度、 話一御序次第御逓達被」下度奉」願候、 作」畧以11廻状1得11貴意1候、 頓首 乍一御世

四月十一日

杉田成卿

箕作阮甫様 竹内玄同様

高松譲庵様 宇田川興斎様

堀内忠亮様

以以第不同一御免可」被上下候

正誤 巻下廿九葉表覆盆子舎利別ノ下各廿四銭ハ各四銭

註

杉田成卿=文化十四年十一月十一日生れ。名は信、 戒』『済生三方』『済生備考』『治痘真訣』らがある。 書調所教授。安政六年二月十九日歿。四十三歳。医書には『医 ぶ。天保十一年、天文台訳員に補せられ、安政三年二月、蕃 梅里と号す。小浜藩医。立卿の子。玄白の孫、坪井信道に学 字は成卿、

- 竹内玄同 = 一八三号文書の註参照。
- ・箕作阮甫=津山藩医。天保十年、天文台訳員。安政二年、 書調所教授。文久三年六月十七日歿。六十五歳
- 宇田川興斎=名は瀛。仙嶼と号す。大垣藩飯沼慾斎の第三子。 る。天文台訳員。『軍用火箭考』『日本風俗備考』『万宝新書』 坪井信道に師事。また宇田川榕庵にも学ぶ。榕庵の養子とな

高松譲庵=岡部内膳正家来。天文方出役御用 等の訳著あり。明治二十年五月歿、六十七歳。

一一六号文書 杉田成卿書状 堀内忠亮(素堂)

其節万緒可11申上1候、先八御暇乞于11草々1如」此御座候、頓首 之事幸静ニ相成候ハハ、又々可」得1再会期1も可」有1御座1、 聊御餞別之印迄拝呈仕候、御麾留被1成下1度奉\存候、遑海 付、乍」畧以;言中;御暇乞申上候、哩詞一首並支那人書二幀、 参上も仕度候得共、此節御用向甚繁劇ニ而、難」得1寸隙1候 程も難!御計|趣、扨々久別離断腸之至奉」存候、右ニ付御暇乞 奉」存候、御退隠之御宿志も被」成」御座」候付、此後御出都之 過日は忠廸様御出被」下、殊ニ何寄之御国産御恵投被」下難」有 成」、御座」奉」、敬賀」候、然は今般御長病ニ付、御帰郷被」成候付、 以11手紙1啓上仕候、漸秋気相催凌能相成候処、愈御康宇被1

註

• 忠廸 = 堀内忠淳 (忠亮、 適斎)。素堂の子。

第一一七号文書 杉田成卿書状 堀内忠亮宛

以二手紙一路上仕候、薄寒之節御座候処、愈御清健被」成一御座一

重之内申付候間、乍11粗末1進上仕候、以上 奉」賀候、然は来月二日亡父寿泉院七回忌相当仕候付、 十月廿九日

志之

寿泉院=杉田立卿=寿泉院得誉無匱楽道居士。天明六年(一 十九日付書状なり。 歿六十歳。したがつて、本状は嘉永四年(一八五一)十月二 七六九)十一月十五日生、弘化二年(一八四五)十一月二日

第 一一八号文書 杉田成卿書状 堀内忠亮宛

存候、万拝晤御礼可11申上1貴報于11草々1頓首 御芳情難」有奉:感佩」候、驟冷之節、折角御自嗇御座候樣奉」 日ハ御参詣も可」被」下思召之処、御痔痛ニ而御出兼と成候趣、 芳茗一匣御恵被」下、千万難」有、早速相備候事二御座候、今 候処、御叮寧御謝舞被二仰下」、殊二仏前へ供候様ト御座候而、 拝賀1候、然は亡父七回忌ニ付、過日は簏末之重之内呈上仕 如」教零雨万索御座候、 愈御健宇被」成11御座1奉11

十一月二日

亡父=杉田立卿。第一一七号文書の註参照。よって、本状は 嘉永四年(一八五一)十一月二日、七回忌当日の書状なり。

第一一九号文書 杉田成卿書状 堀内忠亮宛

「堀内忠亮様

有早速拝味、此節之厳寒を凌申候事感荷不」鮮奉」存候、尚拝 華帖拝読仕候、厳寒之節倍御康宇被」成「御座」候、奉「拝賀 晤御礼可11申上1拝答于11草畧1如1此御座候、頓首 候、然は御国産之肥鴨一折時下為1御尋1 家1御恵投1千万難」 杉田成卿

十二月十六日

幸奉」存候、以上 御移里薩産燻草乍11少々1換紙申候、 御笑留被」下候ハハ、至

第一三二号文書 川本幸民書状 堀内忠亮宛

堀内忠亮様

先ハ請書如」此御座候、以上 奉」存候、早々拝見可」仕候、 拝読仕候、益御清穆奉」賀候、 其内升堂可」有御診可以申上了、 然ハ幼々精義御願被」下難」有

三月六日

註

幼々精義=堀内忠亮(素堂)の主訳書。

74)

第 四六号文書 多紀楽真院書状 堀内忠亮宛

第一二九号文書

川本幸民書状

堀内忠龍宛

堀内忠亮様

(封ノ上書)

御答

為「御聞」可」被」下候、先は用事のミ、草々頓首

四月十八日

益子無言沙汰」仕候、

有」之升堂仕筈候間、御待不」被」下候樣御断申上候、此段忠 益御清適被」成「御座」大慶奉「拝賀」候、然ハ今日ハ無」拠用事

様子如何御聞被」成候ハハ、

乍i和面倒

多紀楽真院

吾殿へ伺候も相願可」被」申候、宜敷御含置可」被」下候 刻日願候自序伝之事も委細被」仰下」、曩又奉」謝候、近日源

註

・忠益子=大木忠益。のちの坪井為春・芳洲。

・多紀楽真院=元堅、通称安叔、字は亦柔、茞庭と号す。元簡 安政四年二月歿。 、桂山)の第二子。 天保六年内班にあげられ、医学館教授。

第一四七号文書 桑田立斎書状 堀内忠龍宛

堀内忠龍様

桑田立斎

由 今日ハ見合、只今煎剤ハ復胃開達剤、丸薬ハ升汞アルエンカ 候処、昨日ハ少々悪寒之気味有」之可」申候上、食味甚タ不」 來雲拝誦仕候、時下暑気罷成候処、倍御安康之旨、明肝之至 ンフル之剤ヲ差上置申候、アルム発泡も差上候処、 宜様御申聞ニ付、陛与い愈瘡薬」之処為カト被」存、 御高按至極御尤奉」存候間、即、 石灰水中孟汞ヲ研和し相用 奉」存候、陳は此度南波氏御患症、縷々被言仰下」委曲承知仕、 エンノ丸ヲ日々差上度事ニ奉」存候、 「三付、一先ツワスサルフヲ用へ申候、此上シビリマートア 尚御高按奉」何度奉」 不」得」已 御劇痛之

五月四日

存候、縷冗貴答迄、匆々頓首

尚々口中腐乱ヲ被」恐、 兎角十分ニ汞剤ヲ用兼申候、 何分尚

先生ゟ御解示奉」冀候、頓首

要略解』『愛育茶譚』などの著訳あり。明治元年(一八六八) 桑田立斎=名は和、字は好爵。越後の人。十八歳で江戸に出 七月二十七日歿。五十八歳。浅草橋場の法源寺内に葬る。 官命を帯びて蝦夷地に赴き、種痘に励む。『牛痘発蒙』『弘痘 医モーニッケの齎した牛痘苗を得て接種に尽力。安政四年、 万年橋畔に開業。養父玄真より種痘法を学ぶ。嘉永二年、 て坪井信道に学ぶ。後江戸の人桑田玄真の養嗣となり、

- 愈瘡=Guajak 愈瘡木 guajak。
- カンフル=kamfer 樟脳。
- ・アルム=arm 腕。
- ワスサルフ=was zalf 蠟軟膏。
- シビリマート=sublimaat 昇汞。

第一四九号文書 山崎元脩書状 堀内宛

見ヲ送候間、 計、兎も角も鎮嘔剤ヲ用候外有」之間敷、 不」仕、一月月経不正ノ処ヨリ考フレハ、 当患者一診候処、或ハ姙娠ナラント被」考候へ共判然 宜敷御願上候、 或ハ子宮症かも難り 右ニ付、左之通稗

臭剝 稀塩酸 - 0 単舎 苦味丁幾 三·〇 ·

.0

右六四分服

メントール 蓚酸セリウム 〇· 〇五 〇 五 ビスミツト 〇・五 コカイン

右為四包每六時可」申候

胃部芥子泥ヲ一同一回帖スルコ グリスリン三〇・〇微温湯ニ移シ

以上ノ水薬二日相用効得候時ハ、沃土丁幾一氏、蒸溜水五〇・ 一回灌腸ノ后牛乳ニ鶏卵一箇

右宜敷奉:頭上:候 〇右一日六回分服、且ツ座浴ョ一回行つて、

山崎元脩

註

堀内様

の翻訳)あり。 明治八年より十一年の間に刊行。他に『朱産婆論』八巻 いて行つた講義を筆記・翻訳して『医科全書』四十九巻とし ルレル Müller、シュルツェ Schultze 等が、東京医学校にお 山崎元脩=越後の人、明治九年、東京医学校卒。雇教師ミュ (ドイツ人産婦人科医 Bernhard Sigmund Schultze の著書

単舎=シロップ。

第一五〇号文書 大木忠益書状 堀内忠亮

、封ノ上書

「堀内忠亮様

大木忠益

箱附上

之由、 産鱲子一包呈上仕候、御笑味被」成下」度候、差急キ大略申上 御互ニ呉越相隔リ御事、紙上ニ難」述歎息之至奉」存候、薩州 候、尚又後鴻申上度候、恐惶謹言 造御頼申上、每々御督促被」下候由難」有奉」謝候 被」下、何寄之御品御恵被/成下/厚御礼申上候、貌僂屈帯製 無異勤居候間、 行違不」得川拝顔」遺憾不」過」之候、日比ハ留主宅御尋 寒中御座候得共、愈御清福奉二恭彦」、拙生事 乍」憚御省念被11成下1度候、当年東都御勤番

十一月廿八日

堀内忠廸様

・大木忠益=文政七年生。米沢藩士であつた。堀内忠亮(素堂) と結婚し、坪井為春と称した。号は芳洲。鹿児島藩医員。明 の門に入り、さらに坪井信道の門に転じた。信道の三女イク 撰方鑑』四冊、明治八年刊、などがある。 治十九年歿、六十三歳。『医療新書』四冊、 慶応二年刊、『新

貌僂屈帯=ヘルニア帯。

第一六四号文書 佐野博洋書状 堀内忠龍宛

堀内忠龍様 口上

佐野博洋

為」可」得川貴意」、草々如」此御座候、以上 御苦労」拙宅迄御出被」下候ハハ、 障有」之由、昨夕断リ来リ申候、夫ニ付少々相転シ申候、乍に 快晴益御佳適珍重奉」存候、然は、今日会、森本花戸ハ少し故 七日廿四日 御案内可!!申上1候、 此段

・佐野博洋=享和元年生まれ。号鶴溪。豊後杵築藩医。帆足万 蘭学を学び、二十七歳から二ケ年半長崎に遊学、シーボルト 死去。『三熱論』『医学原旨』『鶴溪方府』がある。 に師事。藩医となつて中年を過し、伊東玄朴らと交わる。弘 里に漢学を学ぶ。文政八年二十五歳で江戸に出て青池林宗に (四十六歳)帰郷。明治十年七月二十七日七十七歳で

(端裏)

堀内忠良様

拝見御遣し被」成候御病人様、

竹内玄同

申度奉」存候、先は右愚案申上度貴答迄、草々頓首 成候上ニて、功も見へ不」申候ハハ、右辺之所も手当致し見 之インスランを帯候趣も有」之哉ニ被」存候間、右御手当被」 候、然し折々ハ見あたり候事も御座候、瀉血致し清凉剤を用 候而功あり候様奉」存候、乍」去、此御病人様もホイドシーキ 十月十日 拙診仕候所、 如」仰奇症二御座

尚々塩谷は如川尊案」、前方御適用可」然奉」存候、以上

註

竹内玄同=寛政七年(一七九五)生れ。名は幹、号を西坡。 せられ、渭川院と称す。西洋医学所取締兼帯。明治十三年十 戸塚静海についで将軍家定の侍医となる。法眼より法印に叙 町・築地木挽町等におり、のち麹町三丁目に移る。天保十三 字玄同を通称とす。大聖寺の人。藤林普山、のちシーボルト に師事。天保四年、丸岡侯侍医。まもなく江戸に出て芝露月 一月十二日歿、七十六歳。 幕府の蘭書翻訳手伝を命ぜられ、安政五年、伊東玄朴・

ホイドシーキ之インスラン=huidsiek 之 inslaan=皮膚病の

気味

の著ちり。 ・ 保改革に参画。幕府儒官となる。『宕陰存稿』『昭代記』などはその号。別に甲蔵、九里香園などと号した。水野忠邦の天はその号。別に甲蔵、九里香園などと号した。水野忠邦の天は谷=宕陰(一八○九−六七)。名は世弘、字は毅侯、宕陰

第一八四号文書 竹內玄同書狀 堀內忠良(忠亮)宛

(端裏)

堀内忠良様

竹内玄同

_

第一八七号文書 竹內玄同書状 堀内忠良(忠亮)宛

今日は又々雪ニ而余寒難」凌奉」存候、益御清福奉品敬賀「候、今日は又々雪ニ而余寒難」凌奉」存候、益御清福奉品敬賀「候、参かけニー寸御案内申上候心得ニ御座候用、参かけニー寸御案内申上候心得ニ御座候は、参かけニー寸御案内申上候心得ニ御座候間、左様思召可」ないで候、章がけニー寸御案内申上候心得ニ御座候間、左様思召可」ないでは、章々頓首

廿八日

註

・ ヲーストスコヲンゾヲン=oost schoon zoon か。

第一九三号文書 箕作秋坪書状 堀内忠亮宛

(封ノ上書)

堀内忠亮第

箕作秋坪

奉復

尚々御改禰之義奉二拝承一候

御教育被」下候由、嘸々厄介之義と奉」謝、尚拝趨万々可;1申按申上候間、得と相しらへ可;1申上;候、土井侯藩人不;1相異;候、其後ハ意外御無音仕恐入候、地名之義被;仰下;、別紙愚拝見仕候、如」論残炎去兼候処、 益御清安被」為」入奉;拝祝;拝見仕候、如」論残炎去兼候処、 益御清安被」為」入奉;拝祝;

註

土井侯藩人=古河藩土井侯の家臣、 朝倉琴弥・各務伊三郎を指す。 第一九四号文書にみえる

一九四号文書 箕作秋坪書状 堀内忠廸宛

侍史

堀内忠廸様 (封ノ上書)

忠廸様

は当人罷出候間、何分宜敷奉」願候、呉々も御面倒之義と奉」 奉1.拝祝1候、扨過日は途中先談仕候、其節一寸相願候レール 時下不順之気候二御座候処、先以益御清安被」為」入欣慰之至 其後拝趨御願可」申候処、 彼是紛雑御無音仕候、今日 侍史

レール相願人姓名

相願候段、甚畧義之至御用捨可」被」降奉」希候、先は右相願

御日取等之義も委曲直し御申継可」被」降候、以言中に

如」斯御座候、草々不已

古河藩

朝倉 **琴**弥

> 九五号文書 手塚艮斎書状 堀内忠廸宛

(封ノ上書)

箕作秋坪

秋坪

堀内忠廸様

奉復

手塚艮斎

右御受迄早々如」此二御座候、以上 場所と違ひ少々之雨天は不」苦、若大雨なれバ無」拠仕合廿八 なれハ極都合宜敷御座候、此節二丁目ハ大入と申事ニ付、外 仰下1痛入候、明日御出向被」下候趣奉1待上1候、小生も明日 心得二御座候処、御門留御外出被」成兼御延引之段、態々被 玉章拝誦仕候、漸々時候之趣 |二送リ可」申候、大概之義なれが明日御出向奉11待上1候、 五月廿五日 然ハ兼而御約束申上候一条ニ付、今日御出向被」下候御 (御) 座候処、 益御勇猛奉」賀

註

各務伊三郎=古河藩土井侯臣。 朝倉葵弥=古河藩土井侯臣。

(封ノ上書)

奉復イペー訳書添

奉」恐入」候、何れ参上たし可」申候、 り、赤面之至り御思召之様奉」恐縮」候、返上も可」申上」筈之 願候転多帯地之義御心配被」成候、御所持之品之旨 ニ而 頂戴 日ニハ参度御待上をり候間、不」少御出馬奉」仰候、扨鳥渡相 免きニ付、夕飯も差上不」申恐入候、兼而御約束之通り、三 草ニ而一杯相催し、ふらふら散歩、五ツ時頃帰宅仕候、 堂相成兼、却而御使ニ預リ奉;恐縮,候、御離れ後信友君と浅 可」被上下候、早速二右御申訳旁々参堂可」仕候処、今日 被「仰付」、実に以恐入候、右ニ而ハ御ねだり申上候筋ニ相当 玉章拝誦仕候、 却而省命御ニ付、先ツ頂戴仕置候、呉々も御配慮之段(候々) 昨日は大失敬、 実以申訳無」之、平二御仁免 ハ参

候間、 遣ひ可」被」下候、外ワートルも二部有」之、内外方叢も有」之 可」被」下候、以上 イペー薬性論御入用旨、 若御引合ニ御入用も御座候ハハ、無二御遠慮」被二仰越 則差上申候、却而御心配なく緩々御

五月廿七日

信友=坪井信友。

内外方叢=緒方洪庵・青木周弼・伊東南洋の共訳書。 三年刊、あり。

第一九七号文書 手塚艮斎書状 堀内忠廸宛

(封ノ上書

堀内忠廸様

手塚艮斎

書ニ相成候ハハ、何卒拝借仕度、若未タ御出来ニも相成不」 御推読可」被」下候、 盆後ハ早々相催し申度奉」存候、 夕刻ゟ御凉みながら近日之中御尊来可」被」下候、例え会合も 申候ハハ、御出来次第拝借奉」望候、且御閑暇も御座候ハハ、 此節病客多、日々奔走罷在候、然は先日中之フルタール御清 大暑中益御勇猛被」為」渡奉二大賀一候、其後ハ御不音申候て、 右は少々中暑平臥中、乱筆

註

六月十四日

フルタール = vertaal 翻訳。

・イペー薬性論=青地林宗訳『依百乙薬性論』六巻、文政六年

・ワートル=蘭医 van der Walter。 ここではワートルの

薬物

と考えられる。

書を指す。林洞海訳『窊篤児薬性論』天保十一年訳稿、安政

・転多帯地=「博多帯地」の誤記か。

第一九九号文書 手塚艮斎書状 堀内忠廸宛

一九八号文書 手塚艮斎書状 堀内忠亮宛

(封ノ上書

「堀内忠亮様

奉復

手塚艮斎

御繰合御光来可」被」下候、右御受書、早々、不備 立兼申候間、其様覚可」被」下候、右両日之内なれバ都合宜敷 日朝斗、来月ハ三日御昼後に御出席仕候、其後之段はしかと 当廿三日ハ御差支ニ付、此後御出席ニ相成候趣、当月ハ廿六 拝読仕候、大暑之候ニ存候処、益々機嫌さん奉」賀候、過日 ハ不斗御光来被」成下」、久振ニ而得」「拝顔」大慶ニ奉」存候、 六月廿二日

候、以上 り置申候、此後御出向之節差上候様申仕候、左様覚可」被」下 ローセ人身究理壱部、御入用之よし、代料百疋、御使ゟ御預

kunde van der Mensch, Amsterdam. 1845 (蘭訳本)。 ローセ人身究理 = Dr. T. G. A. Roose: Handboek der Natuur-

> 堀内様 (封ノ上書)

奉復

堀内君

手塚艮斎

手塚

賀候、然ハヱペー薬性篇御返却、慥ニ落手仕候、御入用之節 ハ何時なり共被」仰聞」可」被」下候、 朶雲拝読仕候、大ニ冷気相催候処、益々御安詳被」為」渡奉」 奉復

透も御座候ハハ、御見舞被」下度奉前伏望」候、 タ心痛仕候、昨日も俊斎林洞海両人同伴見舞申候、 ブルージンク有」之候、痰中エツトルアフチへ之物相見、甚 ノツペルセーリへ之物と奉」存候、何分心配仕候、 松岡氏も御見舞被」下難」有奉」存候、一昨々日一昨日共少々 又々御手 ロンクコ

此段御含置可」被」下候、右取込中御報迄如」此御座候、以上 盆後と御待可」被」下候、盆後ハ廿日比ゟ例之集会も始メ申度、 七月十日

一此節実ニ多忙、何分御訳も拝見相成兼をり申候、何れニも

Materies Medica,によって訳出した『依百乙薬性論』六巻、 ユペー薬性篇=青地林宗が Adolphus Ypey: Handboek der

文政六年刊、と考えられる。

- ブルージンク=bloeding 出血。
- エットルアフチへ之物=etterachitig の物=膿状の物。
- 俊斎=大槻俊斎。
- ロンクコノツペルセーリへ之物=long knobbelzelig 肺結核状

第二00号文書 手塚艮斎書状 堀内忠廸宛

堀内忠廸様 (封ノ上書)

手塚艮斎

例会之相談有」之、依て其節委細相談仕置候間、同氏ゟ御承 拙宅江御入来被」成下 | 度奉1 待上 | 候、委細は拝顔万々可11申 知被」下候義と奉」存候、弥明廿八ゟ相催し申度、何卒午後ゟ 上,候、右之段申上度、如,此二御座候、以上 ん奉」賀候、尔来ハ御不音申上候、然ハ過日坪井氏入来ニ而、 以言紙一啓上仕候、鬼角不順之気候ニ御座候処、益御機嫌さ

Œ

Œ	誤	
文書番号	誤	E
書第九七号文	坪 井 無· 春	坪井為春
文書 臼四号	して信道の養子となり 信道の三女イクと結婚	信道の三女イクと結婚
	坪井為春と称した。	た。
文書〇五号	堀内忠亮(素堂)宛	堀内忠亮(忠淳)宛
文書 書	Kokken	Pokken

七月廿七日

・坪井氏=坪井信友と考えられる。第一九六号文書参照。

堀内文書研究文献目録

新野辰三郎編『米沢医界のあゆみ』昭和三十八年、米沢市医師

岡村千曳『紅毛文化史話』昭和二十八年、創元社。 横山昭男『上杉鷹山』昭和四十三年、吉川弘文館。

mmm.

高橋由一筆 川本幸民像



このほど東京国立文化財研究所の陰里鉄即氏から東京芸術大学芸術資料館所蔵の高橋由一(一八二八一九四、洋画家)の写生帖の一つに貼り込まれたので、それを紹介しておきたい。紙本墨画で、九・七m×八・四mという小型である。画像の右に偕書で「幸民川本先生肖像」、左に「辛未冬十二月中浣纂」とある。辛未は明治四年であるから、この模写は明治四年十二月中旬に完成したことになる。ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二ところが、幸民はこの年の六月一日に六十二とできたわけである。

これまでよく知られている川本幸民の画像とれまでよく知られている、別様は伝わつていないが、絹本であることがわかる。芸術大学本と非常によく似ているが、細部に相異がある。羽織の色、ヒモのとがわかた、着物の柄などがそれである。顔むすびかた、着物の柄などがそれである。をは芸大本の方が自然で、写実的に見える。そは芸大本の方が自然で、写実的に見える。それてデッサン風である。とれにたいし、学士してデッサン風である。とれにたいし、学士のるように、成画である。しかしこれには落かるように、成画である。しかしこれには落かるように、成画である。

款がない。

なお、川本幸民の写真原版が川本家から学士院に寄贈されてあ料に供するため、ここに芸大本を紹介する次第である。料に供するため、ここに芸大本を紹介する次第である。その資おり、また両者の関係についても研究すべきことが多い。その資おり、また両者の関係については、それぞれに疑問がのこつて

は無関係のものである。

(一九七一年九月 緒方富雄

抄録

A. E. Best: Pourfour du Petit's Experiments on the origin of sympathetic nerve

Medical History, Vol. 13 No. 2, 1969 p. 154-174

躍した。その頃、出版したものに既に神経系についての記載があし、以前は脳神経からでると信じられていた。また、その走行から肋間神経と Themas willis によつて命名された。交感神経がら肋間神経とであった。それにもかかわらず交感神経は脊髄から出ることを実験で初めて証明したのは Poufor du Petit (1664—1741) であつた。彼は比較的自由な雰囲気の中で教育を受け、モンベリェ大学で医学や一般科学を学んだ。その後、軍医として活ンベリェ大学で医学や一般科学を学んだ。その後、軍医として活ンペリュ大学で医学や一般科学を学んだ。その後、軍医として活いた。

討するのは十九世紀半ばまで待たねばならなかつた。 た実験は一七二七年の論文に示されたが、この問題を本格的に検 ることを示した。こうして、交感神経が脳からでないことを示し 変化が生ずることを観察し、脊髄から上行する神経線維が関係す は瞳孔や眼球の症状に注目し、頸部で迷走神経を結紮すると眼に 測から指摘して、そこから出ることを否定した。また眼科医の彼 外転神経が交感神経を出した後、その太さが逆にふえることを計 布するという考え方にとらわれた為であつた。プチはまず第 逆に考えたのだつた。これは当時、神経液流動説の立場から脳だ 頸動脈叢を作つて頭蓋に入り、そこから脳神経に枝を出しすのを 神経と外転神経からでた枝が交感神経となるとしていた。つまり、 けで動物精気 を受けた彼は既成概念にとらわれず、交感神経が脳神経からでる ことに疑問を持つた。それまでは、三叉神経の第一枝、つまり眼 る。それから後、眼科医として名声を馳せた。比較的自由な教育 (生命の源)が作られ、それが神経を通り末梢に分 12

日本医史学会例会記事

於順天堂大学医学部九号館三番教室六月例会 六月二十六日(土)

一 ヘイステル内科書のなかのヒポクラテス 緒方 富雄

次号に掲載予定。

一日本における甘草の歴史

大塚 恭男

日本における甘草の歴史は既述した中国におけるそれと不可分の本草学者によりさまざまに議論された。

るというものであり、和とは一方中に寒剤と熱剤というように相烈な作用を有する薬物に甘草を配合した時にその効果をやわらげ例を、「類証弁異全九集」によって説明した。すなわち、甘草の強を、「類証弁異全九集」によって説明した。すなわち、甘草の用めたと云われる。道三に代表されるといわゆる後世派の甘草の用めたと云われる。道三に代表されるといわゆる後世派の甘草の用めたみをはじ日本医学は田代三喜、曲直瀬道三以降、漸く独自の歩みをはじ

援解する」との説を述べて、東洞説を支持した。 反する薬剤が含まれる時、甘草がよくその調和をはかるというも の異常反応と、薬物以外の何らかの原因によって惹起される生体 の異常反応と、薬物以外の何らかの原因によって若とされる生体 の異常反応と、薬物以外の何らかの原因によって若とされる生体 の異常反応と、薬物以外の何らかの原因によって若起される生体 の異常な反応——つまり東洞のいう急迫——とをひとしく甘草が と順節の急病を急に

の歴史、(■)」として発表した。
ほかに香川修徳の「一本堂薬選」に、生甘草(実は乾甘草)として発表した。
の歴史、(■)」として発表した。

―豊倉教授への追加として― 三輪 卓 上下肢反射に関連した文化史的並びに生物学的象徴性

(-)

ものがある。その他、鳥羽絵・浮世絵から、明治以後最近までのれて、 に認められ、西欧中世・ルネッサンス以後のデロ本(飛鳥以降)に認められ、西欧中世・ルネッサンス以後のデロ本(飛鳥以降)に認められ、西欧中世・ルネッサンス以後のデェーラー・レンブラント・ルーベンス・アネ・ルノワール・ゴッコーラー・レンブラント・ルーベンス・アネ・ルノワール・ゴッコーラー・レンブラント・ルーベンス・アネ・ルノワール・ゴッコーラー・レンブラント・ルーベンス・アネ・ルノワール・ゴッコーラー・レンド(対して、大学では、 足ゆびがバビンスキー位(以下B位と略す)を示す美術作品は、

商業写真・映画スチール・舞踏・スポーツなどの視覚資料を例示 (戦時中の国定教科書や少年雑誌を含む)・風俗写真・

児的など)、それと宗教の象徴的身体表現(合掌・坐位・手印・ む、類杖など)でのインパルス発生接続状況の特徴や、こうした うな資料の人体姿位を見ると興味深い。また一個体の身体部位同 てみた。 持物)や美術の人体姿位(ロダン「考える人」など)を関連させ 姿位の一般性格を考察し(思惟的・防御的・耽溺的・女性的・小 志の接触による「回路形成」姿位(Jendrassik 操作、脚や腕を組 反肘検査自体やその各種補助操作の機構を念頭において右のよ

長類のB位を示す若干の視覚資料を供覧した。 現象は一一・五―一二週で発現する。個体発生に付随させて、霊 反対側の逃避反応として発現)の中で、足ゆび蹠屈は一一週、B 最近の文献によると、胎生期の反射発達(七・五週以降、まず

のがある。ただし手と足が分化したヒトでも、その互換性の残存 ボリズム(指折=数える、 社会の場での手の働らき、上肢による、とくに手指によるシン ジャンケン、宗教の指等)は種々のも

暗やみで毒蛇をふんだ、熔岩の地熱にふれた、伏敵を察知した、 前方に踏みこむとき、 足ゆびは蹠曲して姿勢を安定させるが、

なお、坐礼は霊長類の presentation にあい通ずる humble さ

などのとき、足・下肢・全個体の後退のさきがけとなる「宿命」 を、前端に分化発達した足のおやゆびは負っている、それがB現 (背屈)のもつ生物学的意味であろう。

spasm は manipulation の際に多いという。 霊長類の grooming 能であろう。 れるが、「個体発生的・系統発生的な溯行過程」と見ることも可 を含む下肢の不随意運動に至る性行為は、よく「死」にたとえら はない。ちなみに米国研究者の観察では、性反応の carpo-pedal 仁王像・ゴリラの leg kickingのB位は、バラバラの生体現象で の類似性には、神経生理学的な裏付けを見出せるようで、orgasm・ はむしろ蹠曲が多い。「性反応」と「怒り」の syndrome として (毛づくろい) に関聯した foreplay (上肢の随意運動) からB位 浮世絵の性描写のB位は内外に周知だが、乏しい嘱目の印象で

stication を伴った動作・行動として、 意志的に自由に可能にな 位につながる反射形態への復帰が見れるものと解される。 情動・本能的行動で反応せざるをえないときに、より古い中枢部 ってゆく過程が、身体表現についての学習・訓練の主部分であろ 達とともに、表現としては modification, variation ないし sophi-動・神経器官の構造や統合機構に根ざした現象だが、新皮質の発 四肢反射は姿勢反射・逃避反射に属するものを含めて個 しかし新皮質の関与統合する範囲をこえて、緊急時や強烈な

と解釈できるかもしれぬ。 く形の胎生期の反射複合 内股に歩くなどの作法も、 も考察に値するのではなかろうか。 の表現とも見られようし、 (漫画の驚いたときの姿勢参照) 反射行動と social mores 急な刺激に対してロ・上肢・下肢を開 かっての口を小さく手を当てて笑う、 の関係など の否定

(三和銀行東京診療所・東京女子医大)

七月例会 七月十七日 於日本学士院 王

川本幸民歿後百年記念 蘭学資料研究会共催

川本幸民の理化学書―二、三の書誌学的考察 宗田

説が一致しているが、終了年については安政三年説(1)と五年説 本書の刊行開始年については、 「気海観潤広義」の初版本 嘉永四年(一八五一)と諸家の

を提示すれば次表の如くである いま、封面・奥付をもとに諸本を比較し、初版と思われるもの (註:数字は巻数を示す)。

とがある。

1	
嘉永四年辛	封
一支初夏新彫	面
3	
嘉永四	奥
辛亥年夏刻	付
	年辛亥初夏新彫 ③ 嘉永四辛

7 安政三年丙辰暮景新彫

10

安政四年丁己仲春新彫 安政五年戊午初冬新彫

- 9 安政三丙辰年刻成
- (15) (12)
- 市 E E

共用されているのもある(合冊本に多い)。 るのや、第三編以下の奥付が第二編から、あるいは全編に亘って ものであろう。もっとも、 五編共用のためと考えられ、安政三年終了説はこの奥付によった るという当時の刊本の慣習によっているが、 致しないのがあるのは、奥付が初編、 これによってみれば、全編を五編に分け、 初編の奥付が第五編まで共用されてい 第二編供用、 封面と奥付の年月の 各編三冊宛刊行され

統一されているのに、第二編の三冊のみが双周で、さらに封面の 和泉屋半兵衛 雲寺文治郎(京都三条道舛屋町)の住所が三条通堺町と記され、 吉兵衛(江戸芝神明前)がずっとそのままで、安政三年以降、 静修堂が静脩堂と変わっているのも他編と異なっている。 二丁目)に変わっている。また、本書の題簽が単周でおおむね 奥付の出版元は、河内屋茂兵衛(大阪心斎橋通博町)と和泉屋 (江戸日本橋榑正町) が山城屋佐兵衛 (江戸日本橋

えられる。 関係とあわせ考えて、この名のあるものが真の初版本であると考 刻と刻師の名のあるものとないものとがあり、封面・奥付の前記 ところで、この第二編中第六巻の図版の末尾の欄外に竹口貞斎

年の封面をもつにかかわらず、奥付に三都書林として、京都 因みに、本書は明治に入ってからも重版されたことは、安政二 (柳原、石田)、東京(北畠、小林、佐久間、牧野、太

のあったことが窺われる。田、稲田)とあるのでも窺われ、板元の数からみてもひろく需要

一「化学読本」と「化学新書」

本書の原書はオランダの化学者 J. W. Gunning の Leerboek der Scheikunde の第二版(一八六四―一八六五)であることは、その序文(陸軍少佐木村信卿)から明らかである。ところで、本書の序文(陸軍少佐木村信卿)から明らかである。ところで、本書の原書はオランダの化学者 J. W. Gunning の Leerboek der 本ぎとかいわれている(4)。

字新書」も「化学読本」とは別の原書によったものである。 学新書」も「化学読本」とは別の原書によって、ドイツの J. A. Stöckhardt: Die Schule der Chemie を J. W. Gunning が liger rijk, 1850 が原書で、幸民は文久元年(一八六一)にと の書の第三版(一八五五)を得て前年に訳了したものを増訳し、 それを欄外に書き加えたものであることがわかる。 だから、「化学新書」も「化学読本」とは別の原書によったものである。

蔵版となり、幸民の歿後明治七年から刊行されたのであった。録から知れる。これも Gunning の書を原書とし、初版を訳し第二版を補訳挿入したものという。これが「化学読本」の増訂前のもので、この「化学書」を幸民とその子の清一が無機篇を、従兄もの坪井信良が有機篇を増訂して全二一冊の大冊として陸軍文庫を成の別の書に「化学書」というものがあったことが、著述目幸民の別の書に「化学書」というものがあったことが、著述目

化学の呼称の問題

ところが、幸民の「兵家須読舎密直源?」は安政三年(一八五六)の訳本だが、凡例に「舎密はセミーと読むへし離合の義なり故に分合術と訳するも亦可なり和蘭とれをシケイキュンデという、分離術の義にして合の義を欠く此書全篇みな舎密と書するは近来の通称に従う者なり」とあって、舎密を分合術としたいが、近来の通称に従う者なり」とあって、舎密を分合術としたいが、近来の通称に従う者なり」とあって、舎密を分合術としたいが、近来の通称に従うの訳本だが、凡例に「舎密はセミーと読むへし離合の義なのらしく、この時点で化学の呼称を知っていたなら、こういう書のらしく、この時点で化学の呼称を知っていたなら、こういう書を方はしなかったはずである。

ことは無理ではなかろうか。別としても、万延元年(一八六○)がその前年あたり以上に遡るだから、幸民の「万有化学」が化学の文字使用の最初か否かは

中国での化学使用は、英人 Alexander Wylie が一八五七年(成単七年) 一月から翌二月まで上海で発行していた月刊雑誌「六合叢談」(原名 Shanghai Serial)にみえるのが最初で、これがいち早くわが国に伝わり官版として翻刻されている(8)ことを考えれば、幸民や凌海が相前後して"化学"の呼称を採用したことが理が、幸民や凌海が相前後して"化学"の呼称を採用したことが理が、中国での化学使用は、英人 Alexander Wylie が一八五七年(成中国であるう。

盆

- 史」**p・**一六五。 史」**p・**一六五。
- (2) 三枝博音「日本科学古典全書」第六巻 p·六三。
- (3) 富成喜馬平「日本科学史要」p・一五五、矢島祐利「蘭
- (4) 志頼富士男「科学史研究」No・二。
- (5) 同一
- (6) 川本祐司・中谷一正「川本幸民伝」p・一二七一八。
- (7) 未刊号本現存「明治前物理化学史」p·三四八参照。
- (8) 坂出祥伸「科学史研究」■九、七〇、p·三八。

日本学士院所蔵 川本幸民関係資料―語学関係

片桐

男

I

所本家から帝国学士院に寄贈された蘭学者川本幸民(文化七年川本家から帝国学士院に寄贈された「田田、川本家から帝国学士院に寄贈された「田田、川本幸民、「田和一四年刊」にもそのまま引用掲載されている。「日録は朝出帝貞一博士の『和蘭の涙とボロニ点を数えている。同目録は朝出奈貞一博士の『和蘭の涙とボロニ点を数えている。同目録は朝出奈貞一博士の『和蘭の涙とボロニ点を数えている。同目録は朝出奈貞一博士の『和蘭の涙とボロニー八六点の資料はそのまま現在日本学士院に保存されている。川本幸民に関する現存資料としては一番まとまった資料群ということができる。ただし、この資料には幸民の子息、川本清一の関係資料がかなり含まれている。

(89)

T

用する)。 関係資料が認められる(上記目録番号をもって引 含まれている場合が多い。当然のことである。川本幸民の関係資 との中に語学関係の資料が

31. Medicyn-Namen

Latijnsche, hollandsche en chinesche, Japansche Namen der geneesmiddelen, verzameld door de Leerlingen in toeboi,

254

en herziend door W. Zinsai, arts van toejama, te edo, tempo jaar 5. (羅・蘭・漢・和病名字典) 写本 一冊八二丁医学・薬学関係の名詞をラテン語・オランダ語・シナ語・日医学・薬学関係の名詞を得たものであって、天保五年(一八し、宇田川榛斎の校閲を得たものであって、天保五年(一八し、宇田川榛斎の校閲を得たものであって、天保五年(一八三四)に出来たものの写本である。

C分けにしてある。語の配列はオランダ語を基準にしてABいうことができる。語の配列はオランダ語を基準にしてAB

44. 砲術家言物名字引 一綴一五丁

筆か鑑定を要する。 筆の名BC分けにしてある。ただし、厳密には幸民筆か清一集でABC分けにしてある。ただし、厳密には幸民筆か清一

66. 終刑諸厄利亜語集成 草稿 一綴 墨付二三丁

集校成スルモノ也ト云フ

天保十年戌端午前模写

養英軒主人識

できる。幸民の筆写は、蘭方医で、学塾象先堂を経営して多数のたり、蟄居中に学んだ幸民の語学、蘭学資料の一つということが名を記している。天保一〇年(一八三九)は丁度その期間中に当保七―一二年)に使用した名であり、他に『雑記』などにもそのとある。筆写の主、養英軒主人とは川本幸民が浦賀蟄居時代(天とある。筆写の主、養英軒主人とは川本幸民が浦賀蟄居時代(天

の成立と転写の経路は明瞭である。郎が纂集校成せるものであったことが明記されている。もってそ郎が纂集校成せるものであったことが明記されている。もってその成立と転写の経路は明瞭である。

内容構成は次のとおりである。

応接問答例

必用単語

申諭書例

一三一項六七項

_

一一三語

の要点を列挙すれば次のとおりである。
との内容についてはすでに詳述したこともあるが(1)、いまそ

二 その会話例は、阿蘭陀通詞馬場佐十郎が何回か応接した方的会話の例であること。 異国船応接の現地に臨んで、通訳官にまず要求される基本

法の実地に即応した内容と順序であることから、馬場の纂集校成

になるものと記す奥書の記載は内容的に適正であること。

の捕鯨船に与えた論書であって、これらは『通航一覧』第六巻四の捕鯨船に与えた論書と同文である。すなわち五例の文とも実例の文であって、馬場佐十郎が最初に纂集した応接の会話よりも後日追加されたものとみなされる。馬場佐十郎が文政元年、五年に浦賀へ出張した際に作った文に加えて、ことによっては、大津浜へ出張した足立左内、吉雄忠次郎らが作って文例を筆写したものへ出張した足立左内、吉雄忠次郎らが作って文例を筆写したものの捕鯨船に与えた論書であって、これらは『通航一覧』第六巻四の捕鯨船に与えた論書であって、これらは『通航一覧』第六巻四

四「問答語句」や「必要単語」などの中には異国船から要求とのと判断される。

要求される状況の中で、幕府に出仕する蘭学者もこの種の事務に 意すべき必要があったわけである。 いた蘭学者川本幸民にも筆写せしめて、 東玄朴が写体し、 も容易に理解される。 風説書の翻訳をはじめ、 きあとの天文台、あるいは年代はやや降って藩書調所の教授連が 徴用されるところがあった模様である。このことは馬場佐十郎な たのであるが、各地に異国船の出没頻度が増し、 る異国船応接実務の中からきわめて実用的な応接会話例を纂集し 五. 天文台詰の馬場佐十郎が彼に課された重要職務の一つであ 蟄居の身ではあっても、 このような必要時であったからこそ幕医伊 外交事務を兼担させられていることから L その実力が注目されて かるべき時のために用 応接要員の多数

必携会話書の内容を検するとき、そこには、語学面においてその六 異国船の応接をめぐって、阿蘭陀通詞・蘭学者の転写した

の推移・趨勢を読み取ることができる。というよりは、むしろ洋学と呼ばれることがよりふさわしい時代必要がオランダ語から英語その他の欧語への移行、さらには蘭学

7. 五音発微 完 写本一綴四一丁

五段に分けているところから五音といったものと考えられる。のであって、A(曷)・E(悦)・I(逸)・O(屋)・U(由)ののであって、A(曷)・E(悦)・I(逸)・O(屋)・U(由)の

eeb 野歩 bag 抜古

b 以歩 big 鼻古

oob 窩步 bog 薄古

90. 訂正蘭語九品集 写本一冊五二丁

dun

猶步

bug

皮休古

文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を有する。柳園中野(志文化一一年(一八一四)九月の「緒言」を

II

次の諸点を指摘することができると思う。語学書から幸民の語学内容とその意義をもとめるならば、およそおずかな点数の資料からではあるが、川本幸民資料中にみえる

川本幸民のオランダ語の基礎学力にはもちろん師坪井信道

いということがきよう。響としては、阿蘭陀通詞馬場佐十郎の業績に負っている点が大きから受けた要素を見逃すことはできないが、大系的成書からの影

二 馬場佐十郎の語学力・語学書の影響が川本幸民において顕著にみられることは、かって杉田玄白がその最晩年に馬場佐十郎 おろしたのであったが、まさにその言に相違はなかったことがこ とでも立証されよう。

に知ることができて意義深いものがある。 学習に努めた様子を知り、その学問系統が密接であることを如実 なかでも、宇田川塾・坪井塾・川本塾と師弟相継いで蘭学

江戸帰省後の発展が実現したことを理解せねばならないかと思う。の貴重な期間であったということもできよう。この基礎のうえにの貴重な期間であったということもできよう。この基礎のうえに四 川本幸民の浦賀蟄居時代は生活上は苦しい期間であったで四

註

(1) 片桐「幕末における異国船応接と阿蘭陀通詞馬場佐十郎」

(2) 杉田玄白「蘭学事始」。

三 川本幸民歿後百年におもうこと

井上 悌雄

ルソンと秀吉

千利休は自らの木像を彫らせて寺院楼上に置かせたことが秀吉、ソンと矛吉

の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。堺の港は日本で唯の逆鱗に触れ、自ら死の途を選んだのである。

東成功が南京攻略の挫折から、当時オランダがその目的を達成しつつあった台湾に矛先を転じ、生母田川と自らの生地平戸を経しつつあった台湾に矛先を転じ、生母田川と自らの生地平戸を経しい鎖国中にもかかわらず援助をすべきかどうかを慎重協議を重しい鎖国中にもかかわらず援助をすべきかどうかを慎重協議を重しい鎖国中にもかかわらず援助をすべきかどうかを慎重協議を重しい鎖国中にもかかわらず援助をすべきかどうかを慎重協議を重して秀れていることは勿論であるが、あの「国姓爺合戦」が関いたの目的を達成していることと考えられる。

秀吉がルソンの国に入貢を命じたりなどした事実から見ても薩の島津で途中に蟠踞しておらなければ物資豊かな南方を指向し摩の島津で途中に蟠踞しておらなければ物資豊かな南方を指向し

二八代薩摩の藩主として襲封したのは島津斎彬が四三才の時である。三六一七才の頃一一二度薩摩の土地を踏むまでは、ずっと江戸薩摩藩邸で生れ育ったのであって、祖父重豪の強い影響を受けて生育した人物である。西欧の文物に異常な関心を持ち、オランダを中心に舶来した、絵画、家具、楽器等を自らの部屋を飾り、自らのオランダ語を学び「君が代」を鑑行文字で書き綴ったものなども保存されており、長崎入港のオランダ軍艦に自ら乗り込んで見学した人として知られる。先々代の重年の時代に暮命による濃尾の河川の治水工事に消耗した藩の財政の窮乏に加えて、豪放落磊の祖父重豪の放漫な支出等の累積は大きな重圧として斉彬の上にのしかかっていた。

火山灰地鹿児島

鹿児島県は全県下火山灰地帯である。シラス、ボラ、コラなど と呼ばれる大小の火山灰で覆わるやせ地で生産される作物、小麦、 たばこ、芋、なたね、サトウキビなどの貧弱な農産物であって表 面七七万石と称せられる石高などでは到底あの雄藩を維持出来る ものではなかった。斉彬は異母弟久光との間に継嗣の問題(お由 良くづれ)などの激しい摩擦の渦中を、親しい間柄の阿部直弘な とと提携し、この問題処理の中心人物である調所笑左衛門の先づ とと提携し、この問題処理の中心人物である調所にしてはじめ などいう荒療治的藩財政の再建は茶坊主上りの調所にしてはじめ て為し得るところであった。

後になって調所は兎角の悪評を蒙ったが、久光擁立の中心は矢

薬史) 価の一○倍前後の値段で売られたと推定している。」(現代日本糖 た白砂糖が、日本で一〇一二〇割の利益をあげ、 だ商品目録)にもとづいて、一七世紀初頭ごろ、マカオで購入し 館所蔵の史料 はじまった。彼らも、また日本への有利な輸入品として砂糖に着 う。徳川時代初期になると、オランダ、スペインとの通商も開か り、その仕出地は、マニラ、交趾、カンボジアなどであったとい 貿易を通じてはいってくるものも加わった。これらの輸入砂糖の れた黒砂糖専売制が唯一最大の藩の財源である。(「中国やポルト 帯からの生産物では到底との大藩を支え切れるものではないこと 張り調所を中心として現地派であったので、斉彬は調所を密貿易 目したであろう。ちなみに小葉田淳は、スペインのセビリヤ文書 いては、砂糖は生糸、絹織物、絹織物などに次ぐ主要輸入品であ 数量・品種・価格など知らせる史料はないのだが、朱印貿易にお ガルの商人たちがもたらす砂糖のほかに、秀吉のはじめた朱印船 は明らかである。琉球を仲継として密貿易と黒糖奴隷とまで称さ 処理した。しかし、もともと前記の様に貧弱な地力のない火山地 発覚ということを表面の理由として阿部直弘との間でこの事件を やはり東南アジアの貿易基地を背景にした両国商人の活動が (ポルトガル商人が広東、 マカオから日本へはこん また黒砂糖は原

白砂糖と斉彬

ベシトノ御見拓ニテ白糖又ハ氷糖ノ製法ヲ習練スベシ」と襲封早貴カラズ、且ツ世ノ開ルニ従テ黒糖ノ要用ハ減ジ必ズ白糖ニ帰ス斉彬は「砂糖ハ御国産ノ最ナル者ナレドモ、其粗悪ニシテ価モ

本命じている。川本幸民が蘭書から得た知識を生かして斉彬の知るにいえるべく努力したのであった。斉彬は蘭学者としては戸塚親しくて、蘭書から得た新知識を殖産興業の上に活用することに親しくて、蘭書から得た新知識を殖産興業の上に活用することにいる。川本幸民が蘭書から得た知識を生かして斉彬の知るところとなり、間宮の才能と経験摩に潜行捕えられて斉彬の知るところとなり、間宮の才能と経験を活用し藩にとどまって子弟教育のことをすすめたというエピットドもある程である。

「化学新書」は幸民によって訳出された彼の代用的訳述書である。

四川本幸民と蘭学者たち

緒方 富雄

川本幸民(一八一〇一七一)にかかわる文書をみていると、幸

な役割をつとめていることに気づく。 民の蘭学者たちとの接触がはなはだひろく、その間にあって重要

坪井信良の "裕軒川本先生小伝"に "先生為人廉潔剛直、言必信、行必果、敢テ人ヲ容レズ、故ニ門ニ入ルモノ甚多カラズ、又信、行必果、敢テ人ヲ容レズ、故ニ門ニ入ルモノ甚多カラズ、又たニ行ハレズ、然レドモ一回交ヲ結ブ者ハ、接遇温厚以テ能ク久シー一八四八)の養子となり、幸民をもっともよく知る人の一人であったから、そのことばは、真実に触れているのであろう。わたくしには、最後の "一回交ヲ結ブ者ハ、接遇温厚以テ能ク久シーということばに同感できるのである。このことを証する文献はすということばに同感できるのである。このことを証する文献はすくなくないであろうが、わたくしの手もとの資料から、その例をあげてみたい。

_

江戸所在住蘭学者としてつぎの五八名をのせている。大槻如電の新撰洋学年表の安政二年のところに、勝海舟手記の

大島惣左衛門、小山杉溪、藤田圭甫、芦田米太郎、大槻俊斎、島 浪銀次郎、神田孝平、曽田勇次、片田哲郎、下間龍助、高松譲庵 高畠五郎、高須松亭、武田斐三郎(成章)、杉純道(享二)、八木 間宮繁之進、 木弘安、池田洞雲、坪井信友、大鳥圭甫 杉田成卿、 柴田収蔵、石川完見、 林洞海、箕作阮甫、 中山洞春、 川本幸民、杉田玄端、 金森賢作、 西川洋作、矢田部慶雲、鈴木玄昌、 石川中益(坪井芳春、為春)、市川斎 平紀一、手塚律蔵、坪井信良、 宇田川興斎、木村軍太郎、松 (圭介)、本間軍兵衛、

田辺順甫、竹內玄同、田口俊平、都甲斧太郎小関高彦、原田敬作、布野雲平、津田真一郎(真道)、川島元成、玄甫、安田雷州、伊藤(東)貫斎、牧穆中、箕作秋坪、東条英庵

交際という以上に、接遇温厚能ク久シの部類に入るのである。み、文書のなかに、半数以上の人の名が出ている。それが単なるみ、文書のなかに、半数以上の人の名が出ている。それにしても幸民のてがもとよりこのほかに、重要な蘭学者がある。たとえば伊東玄朴、

平野元敬、 片山秀淳、 篠田元順、 小菅純盛 松本良甫 中玄英、桑田立斎、 玄昌、益木良斎、足立梅栄、小島俊貞、津田良春、石川桜州、野 汀、手塚良斎、 道 三宅艮斎、 箕作阮甫、竹内玄同、高須松亭、永田宗見、林洞海、 (信友)、川本幸民、戸塚静海、伊東玄朴、 坪井信良、 美濃部浩庵、 石井宗謙、 **菅野道順、牧山修卿、** 杉田杏斎、 岡田元琳 伊東玄晁、 鈴木玄岱、太田拙斎、 島村鼎甫、 岩名昌山、 添田玄春、入沢貞意、 織田研斎 呉黄石、 伊東南洋、山本長安、大野松斎、安藤 (伊東貫斎)、 三沢良益、 坪井信 奥山玄仲、 中村静濤 村坂玄龍 伊東玄民、 杉田玄端、赤城良伯、 藤井方策、 河島宗端、 吉田淳庵、 西川玄泰、 程田玄悦、 手塚良庵、 吉田収庵 田村泰造 菊池海準 桂川甫周 渡辺栄仙 大槻俊斎 渡辺春

> 甲斐田孝斎 柳見 岩井元敬、 池田多仲、 仙、 上坂良庵、 榊原玄辰、 綾部善達、 岡部同直、 益坂良甫、 高橋順益、 三浦有恒、 小林玄同、 大槻玄俊、 太田東海、 乃木文迪、 河島元成 溝口 大熊良達

=

私ともに幸民と密接な人々であったと考えられる。このほか、 内静安、入沢貞意、織田研斎、半井仲庵、箕作秋坪、高畠 良、宇田川興斎、 これを欠かさなかったから、ここにかかげた人々は、いわゆる公 市川斎宮、津田真一郎、西 生玄昌、 良斎、村上英俊、大野松斎、杉田成卿、桑田立斎、箸作阮甫、 舞の控帳によると、つぎの蘭学者たちが見舞品をとどけている。 人一同とか蕃書調所の職員一同とかの見舞ははぶいた。 むかしの火事見舞は義理がたいもので、平生交際のある人は、 大槻俊斎、金森建策、手塚良仙、伊東玄晁、美濃部浩庵、 安政五年二月一日幸民の家は類焼をうけた。そのときの火事見 高 鋭一、林洞海、坪井信道 堀内素堂 (新築祝)、 周助、渡辺春汀、木村軍 (信友)、坪井芳州、坪井信 広瀬元恭、

原田敬策、 五郎、 手塚

さきの五八名の名簿と性格がちがうか、ここ前後数年の江戸在住に出たくる名も多い。これは寄付者名簿であるから、おのずからさきの五八名とくらべると、重復しているものもあるが、あらた

(広い意味で)の大体が察せられよう。

方医たちが拠金したときの八二名の名が記録にのこっている。

安政五年(一八五八)江戸に種痘所設立のために、江戸在住の

0

蘭学者

匹

は師弟であり、義兄弟の間柄にある。幸民は青地林宗(一七七五―一八三三)の三女秀子をめとったから、信道と幸民と幸民の師信道は林宗の長女久米子をめとった。

とかもしれない。
とかもしれない。
を民と洪庵との交際に特別のもののあったことは、自然のこら、幸民と洪庵との交際に特別のもののあったことは、自然のことかもしれない。

民が洪庵に信道の病状をくわしく知られた。

子交々相集り摂生を厳重ニ申上候ニ付、 病状を申上候義ハ信良子へ御秘し置可被下候。昨日も病状等ハ委 第二御座候故先夜コウドベハッテン(koud bevatten 風をひく) 信良子帰省ニ而内外被相輔候へハ大ニ宜敷可有之被存候。右之次 右ニ付伊東諸子信良子之帰省を再三相進候ニ付、愈此度為致可申 てハ宿痾之事故全治ハ無之とも此度不起之症とハ不被存候得とも、 陰ニ而ハ坪井之病気此度ハ不治と申居候由ニ御座候、小生見上候 は少しは止ミ被成候へ共、常にロープ(loop 下痢) 験御座無、 生事宿痾兎角不宜。去月伊豆之熱湯へ御遊被成候へとも、格別良 小生同様不大之上懶惰甚敷御座候。何分宜敷御願申上候。坪井先 御苦労相成罷在候事と存候。宜敷御鞭正可被下伏而奉希候。是又 兎角執筆を厭い無申訳、 拝祝候。小生不相替碌々送光乍憚御省念被下度候。扨御存之懶性 細不申送候様こと被仰候。 有之悪寒発熱甚敷へ。ペルスロープ状之症ニ相成、一日ハ大ニ心 相究り候。尤も御存之通り御気性故内外之心配過度に御座候間 頑固ナル病ニ而如此勤慎之鉄腸をして口腹之影を制スル能ハサ 寒冷之節御座候所、高堂被為揃益々御壮健成御座、 ル事嗟嘆之至ニ 尚一日も相治リ不申ハたまらぬと御申位ニ御座候。右御 却而筋力脱候故乎、疲瘦加被成候。御帰府後伊東及諸 御無音罷過候平に御海容被下候。文治義 只々深ク驚サル様御申聞可被下候。誠 ブラーク (braak 嘔吐) 有之伊東も 珍重御義奉

右ハ時下御勤静相同度且右之御容体ニ御座候間、何カ良方も御座

候得共、此上如何相成候事哉被案申候。

如此御座候書外重信可申尽候候ハハ相伺度書候草々。

草々頓首

川本 幸民

九月廿九日

尚信良子帰府候ハハ御地之光沢承知可仕相楽候緒方洪庵様

以

上

ことのよしみも背景にあることがうかがえる。第一に、幸民が蘭学医の立場で、信道の病状を洪庵に医学的に報じていること、第二に洪庵塾にある信良の帰省(江戸への)を望む事情をたちい第二に洪庵塾にある信良の帰省(江戸への)を望む事情をたちいました。

五.

を致し、困入候事に御座候。蘭書取調の義は至極結構の義に御座以御免許無之、甚心配罷在候、最も御差留の義は有之間敷御座候以御免許無之、甚心配罷在候、最も御差留の義は有之間敷御座候へ共、いつ迄も被引留候様の事には無之候抔と被存候。然処既に御聞及大厄歳。八九月より伺出置候書今出来奉感入候。然処既に御聞及大厄歳。八九月より伺出置候書今出来奉感入候。然処既に御聞及大厄歳。八九月より伺出置候書今出来奉感入候事に御座候事の

したあとと川本幸民がいたわけである。 せていた。江戸におけること事情を大阪の洪庵に伝えたのは、ほがていた。江戸におけること事情を大阪の洪庵に伝えたのは、ほかならぬ坪井信道であるが、そのほか伊東玄朴があり、信道の歿かならぬ坪井信道であるが、そのほか伊東玄朴があり、信道の歿かならぬ坪井信道であるが、そのほか伊東玄朴があり、信道の歿されている。

六

その後多紀氏の勢力がおとろえ、蘭学医の勢力が強くなり、洪 をの扶氏経験遺訓は、安政四年(一八五七)のころから、出版の といっしょに幸民あてのてがみを托した。そのうち洪庵から秋坪にあてたただしい数のてがみが往復した。そのうち洪庵から秋坪にあてたただしい数のでがみが往復した。そのうち洪庵から秋坪にあてたただしい数のでがみが往復した。そのなかに、秋坪あてのてがみといっしょに幸民あてのてがみを托したものがいくつかある。 安政五年(一八五八)五月ごろ第二編ができたときの秋坪あてのてがみに、その贈呈先について、洪庵はつぎのように書いている。

(五月一〇日付)

本等オモダチタル大家ハ勿論之事に候へ共、初編之通り不残と申ず弐編配り之義は、伊東、竹内、坪井、戸塚、大槻、杉田、川

ここに八名の"オモダチタル大家"の名をあげており、幸民がスニモ及ヒ申間敷乎、御考合せ可然宜敷ク御頼申上候。

七

それに加わっているのは当然ながら、

洪庵の評価が示されている。

う一節がある。 ら一節がある。そのほかで、洪庵の小児(長男整之輔)の病気を見舞みがある。そのほかで、洪庵の小児(長男整之輔)の病気を見舞

存シ罷在候、

でもないようなことが、幸民と信道に伝えたのである。このなんううわさをきいて、そのことを信道に伝えたのである。このなんううわさをきいて、そのことを信道と洪庵のなみなみでないつながりを語っている。洪庵の子整之輔は、それよりずっとまえの六がりを語っている。洪庵の子整之輔は、それよりずっとまえの六がりを語っている。洪庵の子整之輔は、それよりずっとまえの六が立をにがらさいた。とのなんううわさをきいて、本民は、洪庵のこどもが急病だといる。本民は、洪庵のこどもが急病だといる。本民は、洪庵のこどもが急病だといる。本民は、洪庵のこどもが急病だといる。本民は、洪庵のこどもが急病だといる。

説にても無之、折角如何やと御案申上候事に御座候。御悲歎之程達而御病気之事ハ外より風に伝聞仕候得共、是も鳥度いたしたる(六月中のまちがい)急症にて御死去之由、扨と驚入奉存候。先』本月二日村田生へ御托し之貴書拝見。扨と御男児御事七月中

杯と違ひ未た御壮之事に候へは、又々幾等も御出来可成候、深察候。拙子も昨年に覚へ御座候へハ、重而落涙仕候。併し拙子

を報じている。 信道が『昨年に覚へ』といっているのは、二男亀也をなくした。 を報じている。まことに心のこもったてがみである。信道のこのているのは、二男亀也をなくした。

1

幸民ははじめ江戸で足立長雋(一七七六―一八三六)の門に入り(文政一二年九月九日、一八二九)、のち天保元年一○月(一八三三)に学成って三田に帰った。 幸民の「養英軒雑記」に、この帰郷にあたって友人たちのつく 幸民の「養英軒雑記」に、この帰郷にあたって友人たちのつく った詩や和歌がのっている。

次山鳴氏之員

静探吟腸過夜半 隣街木桁報更遅 閑窓独坐不心移 幽味転加微雨時

祖席伝抔懇相約 其達屋後日桜期新晴二月暖可肌 好去行程限此時

請君若憐燕雀意 心無後再会之期 梅桃杏子継開時 鴻雁何為独北飛 村方三平

来るつばめ 見すてて帰る 雁金は

いづれの里の春か尋ぬる

山鳴剛造は洪庵と同国で、信道に学んで、のち天保九年(一八一山鳴剛造は洪庵と同国で、信道に学んで、のち天保九年(一八一山鳴剛造は洪庵と同国で、信道に学んで、のち天保九年(一八一世鳴剛造は洪庵と同国で、信道に学んで、の古書に表古のといえる。幸民はよほど頭角をあらわしていたのであろう。こどものとき三田藩校造士館で漢籍を学び、夜は夜でまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって句読を受け、春秋の試業ごとに甲科にのでまた長老の家にいって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというから(坪井信良撰 裕軒川いといって、軽侮もしなかったというない。

ナ

職並、あるいは教授職手伝の地位についた。多くの蘭学者がこれにくわわり、あるいは教授職、あるいは教授を政三年二月(一八五六)翻訳局が蕃書調所になった。江戸の

が、そのなかの川本幸民の項にはつぎの記載である。『御支配明細帳』は蕃書調所の職員録台帳のようなものである『御支配明細帳』は蕃書調所の職員録台帳のようなものである。を民もその一人で、安政三年四月(一八五六)に教授職手伝、

紋所口 極

三拾人扶持

生国摂津 蕃書調所出役教授職

松平修理太夫家来

本幸民 辰歲四十七

曽我若狭守組浦上弥五左衛門 木挽町五丁目橋通御書院

年十一月二十五日出役教授職並被仰付 同未年四月二日出 安政三辰年四月四日蕃書調所出役教授職手伝被仰付 役教授職被仰付候 同日

関係したが、それはかれらの語学の力によるもので、別に安政五 年(一八五八)創立の種痘所から、西洋医学所、医学所と発展し 友がさらにひろくなったであろう。藩書調所には多くの蘭学医が た医学教育機関とはおのづからその性格がことなっていた。 ここは、多くの蘭学者があつまる機関であったから、幸民の交

ることができる。 ことなどが書かれてある。ここでも幸民の当時の交友その他を知 あり、その下欄に幸民の病状のほか、来訪者、来診者、見舞品の いて、毎日午前午後の温度計と気圧計の計測値が刻明に記入して ている。 "裕軒先生病中寒暖晴雨器照験日記" という題がついて きの三月から五月までの幸民の病床日記とでもいうものが現存し 幸民は明治四年六月一日(一八七一)六二才で歿した。そのと

のである。ここにそのおもな源をかかげておく。 この報告の内容は、これまでにほとんど全部公表されているも

- 1 小沢清躬:蘭学者川本幸民 昭和二三年七月
- (2) 川本裕司、中谷一正:川本幸民伝、共立出版 年六月 昭和四六
- (3) 井上悌雄:川本幸民と交渉のあった人々―幸民から洪庵 の手紙を中心に一蘭研究報告、一七七号、一九六六年一月
- 4 川本裕司:川本幸民の修業時代、蘭研研究報告、二〇四
- 号、一九六八年一月

5

川本裕司:蘭学者川本幸民伝記論考

- その一 蘭研医学報告、一七三号、一九六五年九月 その二同 一七七号、一九六六年一月
- (6) 井上悌雄:川本とその足跡―わが国に初めて製糖理論を 導入したことについて、蘭研研究報告、一六六号、一九六五 年一月
- (7) 緒方富雄:蘭学のころ、弘文社、昭和一九年一〇月
- (8) 緒方富雄:蘭学者の生活素描―緒方洪庵伝補遺(未完) 科学思潮二(一一八)昭和一八年一一八月

尚、当日は別室にて川本幸民の関係資料の展示が行われた。

される方は学会事務所宛お申込み下さい。 として慶応大学と順天堂大学で交代で行っています。例会の通知 は関東地方在住の希望者に発送しています。尚、例会通知を希望 日本医史学会東京地方例会は毎月第四土曜日、午後二時から主

日本医史学会関西支部例会記事

夏期大会 六月五 日 於三田市民会館

三田市教育委員会・三田市郷土先哲顕彰会

午前

正午 懇親

午後 講演等

化学世界 川本先生と洋学

蛋白質の話

日本医史学会理事 元阪大理学部長

俊介

四郎

元阪大総長

た。 当日別室で幸民遺品、伝記資料の写真類などの展示が行われ

ては左記へ問合せて下さい。 究会関西支部との共催で行われることになりました。詳細につい 来る十一月十四日、京都にて科学史学会京都支部と蘭学資料研

大阪市阿倍野区暗明通六—一八 中野操方 日本医史会関西支部

****** 新刊紹介

日本思想大系63「近世科学思想下」

日本思想大系55 橋本左内 「渡辺崋山、高野長英、佐久間象山、 横井小

氏の担当した医学に限って述べる。 執筆で、近世前期の天文暦学と医学を扱っている。ここでは大塚 「近代科学思想下」は広瀬秀雄、中山 茂、 大塚敬節氏の分担

手掛りを得ることができたことは大変ありがたい。 することの必要を感じながらも、手をつけていなかった。今回、 れなかった我々にとっては難解な理論に敬遠し、それを明らかに 知である。しかし、東洞の説の難解さや西洋流の学問しか教育さ 時代であった。つまり日本的脱皮は曲直瀬道三によって始められ 読み下し文と、詳細な校注を付して掲載された。ここに具体的な この本に東洞の「薬徴」「医事或問」、後藤艮山の「師弟筆記」 パ医学を受容する下地として極めて重要なものであったことは周 古医方の発生、その完成にふれている。古医方は日本がヨーロッ 吉益東洞で完成したという。この本は解説でそれを証明しながら この頃、医学は中国医学から、日本独自の医学に脱皮してきた が

て活躍した者の中に多くの医者がいた事実は興味深いことである いる。そとで幕末の思想史としての興味もさることながら、採用 医者であった。ここではかれらの思想の特質をとらえ、検討して あげられた人々は幕末の代表的な開明思想家であり、その多くが 佐藤昌介、植手通有、山口宗之氏の分担執筆である。ことにとり の西説医原枢要は我々の興味をひく。また、幕末から明治にかけ した資料から、西洋の学問の受けとめ方がわかる。特に高野長英 渡辺崋山、高野長英、佐久間象山、横井小楠、 橋本左内」は

千五百円)(岩波書店発行。「近世科学思想下」・千三百円、「渡辺崋山他」・が、この本にそれを解明する手掛りが得られるかもしれない。

この本は明治前日本科学史の一環として出版されたものである。といっては明治前日本科学史の一環として出版されたものである。著者はこの本の完成を見ず、にわかに長逝せられての本である。著者はこの本の完成を見ず、にわかに長逝せられている。また写真、図も多く、アイヌの風俗習慣を知るのに必須でいる。また写真、図も多く、アイヌの風俗習慣を知るのに必須でいる。また写真、図も多く、アイヌの風俗習慣を知るのに必須でいる。また写真、図も多く、アイヌの風俗習慣を知るのに必須でいる。また写真、図も多く、アイヌの風俗習慣を知るのに必須に対して出版されたものである。とは本当に悔まれる。

^{充行} 定価三九○○円) (日本学士院内明治前日本科学史刊行会編纂 日本学術振興会

内田守著「光田健輔

で、潜在患者教は相当なものであったであろう。このような状態で、潜在患者教は相当なものであったであろう。このような状態とで、潜在患者がは一つもなく、わずか外人や宗教家によるものが二、の隔離施設は一つもなく、わずか外人や宗教家によるものが二、接した明治二十年頃は、世間ではライは遺伝病と考えられ、公立接した明治二十年頃は、世間ではライは遺伝病と考えられ、公立といれた。 世を去ってからもう七年の歳月がたった。彼が初めてライ患者に世を去ってからもう七年の歳月がたった。彼が初めてライ患者に世を去ってからもうという。

からライの治療、予防にあたった人々が、計り知れない苦労があったことは容易に推察される。この本は、歌人であり、光田と同じようにライの治療にたずさわった著者が光田健輔をとおして、ライの治療史を綴ったものである。今もある東村山の全生園の前ライという特異な病気のために起る社会問題、ライの認識不足から生ずる悲劇、隔離した社会を統制していく苦労、それらを如何にして対処してきたかを語るこの本は、光田健輔の伝記というよりも社会慈善事業史として貴重な文献となろう。

(人物叢書、吉川弘文館発行、六〇〇円)

松井喜三編集・解説 レオナルド・ダ・ヴィンチ解剖図集

知るのにこの上ない本となっている。

地、各器官の機能についての学説にも触れ、十五世紀の解剖学をある。また、この本はレオナルドの生涯を解剖学的な仕事とからみる。また、この本はレオナルドの生涯を解剖学的な仕事とからみる。また、この本はレオナルドの生涯を解剖学的な仕事とからみる。また、この本はレオナルドの生涯を解剖学的な仕事とからみる。

め、この本の価値は一層、高いものとなった。 若者は東京教育大学で教鞭をとる動物学者であり、長年、レオ

(A4版 発行所みすず書房、定価二千二百円)

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

本会は医史を研究しその普及をはかることを目的

とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行 なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発

行し、これを会員にわかつ。

随時、地方会、例会を開き、研究発表、 展観

などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体

との連絡協力をはかる。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようと 五 その他の事業。

となることができる。

するものは、

理事または評議員の紹介を経て会員

第五条 会員は会費として年額二○○○円を前納する。た だし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加すること

ができる。

本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者 者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は 本会に名誉会員と賛助 とし評議員会の議をへて推せんする。 できる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した (維持) 会員をおくことが

第六条本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代

表する。

会終了の日までとする。 三、会長は年一回の総会を主催し、 その任期は総

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂 会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せん

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、 により理事長が委嘱する。

幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。(た

だし会長を除く

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は

役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内

(東京都文京区本郷二の一の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回(三月、六月、九月、十二月)末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書き

のとと。

う。また編集の都合により加除補正するととも原稿の取捨選択、掲 載 順 序は編集委員が行な

ある。

原稿枚数 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で五

ージまでを無料とする。図表の製版代は実費を負担とする。但し欧文原著においては三印刷ペでは無料とし、それを越えた分は実費を著者の印刷ページ(四百字原稿用紙で大体十二枚)ま

徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。別 投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別

会

順天堂大学医学部医史学研究室内

日本医史学

編集委員大島蘭三郎(委員長)

大塚恭男 酒井シヅ 沢井貫太郎

石原

明

杉田暉道

金原出版(株)創業百年を迎えて

劃期的記念事業

医学文化保存事業部」を開設

なりました。 年を迎えるに当り、この度、記念事業として「医学文化保存事業 部」を開設し、日本の文化財の保存と普及に微力をつくすことに 金原出版株式会社では、昭和五十年三月十八日をもって創業百

失われています。これをこのまま放置するときは遂には遺された 学文献や、各種の医学資料(医学書、絵画、器材)が、天災や戦 貴重な日本の文化財も全く散逸するおそれすらあります。 争、あるいは学園紛争などの社会的混乱により、その多くが既に に流布されていますが、現代の日本医学の基礎となった既往の医 最近の情報産業の発達に伴ない、現代医学に関する情報は広汎

ど協力をお願い申上げます。 の事業を行なうことになっておりますので、なにとぞ、ご支援、 よって、「医学文化保存事業部」では永く後世に伝えるため次

一、医学古書目録の作成

二、医学古書・医学文献および各種資料の収集と展示、ならび に講演会の開催

医学に関係ある絵画・写真・図譜 ・図録の刊行

四 医学古書・医学文献の複刻・再版

五 定期刊行物医学博物館仮称の刊行 著名医人の書画その他の複製および頒布

七、その他

医学古書目録 を刊行

古書所蔵の先生方へお願

す。 行年月日、版数、巻数、頁数、体裁について、ご連絡くださりま 援、ご協力を俟たなければならないことは申すまでもありません。 蔵の場合は、拝借して転写させていただきたく存じます。 だされば、記入カードをお届けいたします。また古書目録をご所 学書がありましたら、その書名、編・著・撰述者名、発行所、 年)より、明治年間(一九一二年)までに発刊された、日本の医 とより独力でこれを刊行することは容易ではなく、各方面のご支 として「医学古書目録」を刊行することを企画いたしました。も 長い間その刊行が待望されておりますが、この度記念事業の一つ すようお願いします。もし書籍が多数の場合は、その旨ご一報く なにとぞ、本事業にご支援、ご協力を賜りますようお願いしま ど協力に対しましては、応分の謝礼をさせていただきます。 つきましては、先生方のど蔵書の中に、平安時代初頭(七九四 わが国にはまだ総合的な医学古書目録の、 みるべきものがなく、 金原出版株式会社

で連絡先 東京都文京区湯島二―三一―一四

担当 内山良一宛

金原出版株式会社「医学文化保存事業部

(〒一三一九一) 電話 〇三 (八一一) 七一六一(代)

The History of Epidemics and Scurvy in Hokkaido before the Meiji Era. Part II

Akitomo MATSUKI

The paper is a chronology of the important epidemics, outbreaks of scurvy and famines that occurred in Hokkaido from 1470 to 1862. Small pox had been prevalent since 1624. Scurvy was first recorded in 1808.

(Department of Anesthegiology, University of Hirosaki)

269 (4)

of once every two or three years. And also, it turned out that the TENNO ("Emperor") at the top of the regime, when he became ill, was given Kibyō ("prayer for curing a disease") by priests. Formerly Dr. Yū Fujikawa in his essay gave the name SOI ("medical priest") to the priests who, at that time, did such tasks. But in the Ritsuryō ("statute"), which was the law of the day, such a term was not seen. Consequently, it may be supposed that the name SOI was coined by scholars in later ages. On the contrary, we read the name of Kanbyōsō ("nursing priest") in the literature of that time. And we can find that some historically famous priests in Japan (e.g. "Ganjin, "Ryōben, "Dōkyō, etc.) were in attendance to the Tennō (the Emperor) and in charge of the Iryō ("medical treatment") or the Kibyō ("prayer for curing a disease"). We must, furthermore, pay attention to the fact that Buddhism medicine equaled the best medical treatment of the time.

(The Kokugakuin University, Graduate School, Course of Japanese History)

Human Anatomical Dissections in Hokkaido—Supplements—

Akitomo MATSUKI

This paper reports on the first record of human anatomical dissection in Hokkaido which was written by C. Pemberton Hodgson, the first English consul in Hakodate. He wrote "When the poor man was asphyxiated at Hakodate for the incendiarism, Dr. Albrecht, a Russian gentleman attached to the Consulate, begged the Governor to give him the body. It was sent to him, and before all the learned doctors of the place, the dissection took place. This was a change in the annals of Japanese history and habits, but the students were all highly and, I trust, painfully interested and instructed."

Medical Treatment as Works of the Priests in the Nara Period

Seitaro HIGUCHI

In the Nara period, or in the 8th Century of Japan, Buddhist priests successively engaged in various types of technology and enterprise; that is, as makers of reservoirs, as builders of roads and bridges, as developers of mines, and so on. But above all they performed medical treatments, which because of their rather close contact with the life of the masses, extended their accomplishments. The people, in the Nara period, believed, that when they were seized with serious disease, it must be punishment given by SHINBUTSU ("God and Buddha"), because of their bad OKONAI ("behaviour") in their previous or present lives and so naturally they would rely not so much on medicine as on JOBYO ("the elimination of a disease") by KITO ("prayer") of the priest.

Under the regime at that time, the priests could be divided into two groups; one was the priests, who were recognized officially as such by the TENNO SEIFU ("the Emperor's government") and the other was the priests, who were in defiance of it and acquired JUTSU ("skill or technique for the sake of arms") by training themselves in the mountains. The "UBASOKU", which I have already mentioned in my former paper, might assuredly belong to the latter, and almost all of them were symbolic of the mystery of the JOBYO done by KITO.

On the other hand, Zenshi ("Zen priest") might belong to the category of the former; however, their performance was not so different from that of the avove-mentioned "UBASOKU".

Though the medical activity of the priests was nominally prohibited under the regime of that period, it seems that the government could not but permit tacitly their performance, because pestilence, during the eighty years or so of the Nara period, had broken out at the rate

History of Variolation in Europe, Especially the Introduction of the Turkish Method in the West

Akira FURUKAWA

- 1) Turkish variolation was introduced to the West at first by medical studies of two Greek doctors, Pilarino and Timoni, but became well-known through the efforts of Lady Mary Wortley Montagu, wife of the British ambassador in Turkey.
- 2) Pilarino published an excellent monograph on variolation in 1715, and Timoni reported the results of his study on variolation to the Royal Society of London in 1713. Usually it is mentioned in the books of medical history, that the first introduction of Turkish variolation to the West occurred in 1721, the year when the daughter of Montagu was inoculated, after the ambassador and his wife returned to England.
- 3) The Turkish Republic determined the first day of April as the national anniversary day for the small-pox vaccination. It was on that day, when Lady Montagu wrote a letter to her friend in London, reporting on the Turkish method of variolation. The republic issued a special stamp in 1967, commemorating the 250 th anniversary of the Western introduction of Turkish variolation.
- 4) For the practice and spreading of variolation, the efforts of the follwing physicians were especially noted: Tronchin, Dimsdale, Ingenhousz, Boylston, etc. It was commonly performed until the discovery of Jenner's vaccination.
- 5) In Japan, the Chinese method of variolation was introduced at Nagasaki in 1744, and then, the European method was at first introduced about 1790.

(Shinohara Hospital, Asagaya, Tokyo)

日 本医史学会役員氏名 (五十音順)

常任理 会 理 会計監事 事 事 石原 山形 宗田 JII 敞 明 大鳥 蘭

郎

戸苅 矢数 今田 宗 田 西 近太郎 靖三郎 道明 為人 敬節 見信 金芳 竹内 内山 吉岡 鈴木 蒲原 大矢 知 正夫 全節 孝 Ŧ. 薫兵 郎 鈴木 緒方 津崎 佐藤 和 大久保利謙 石 光昭 美実 富雄 正系 勝

幹 杉田 大塚 事 恭男 暉道 谷津 酒井 三雄 3 11/ 沢井 貫 太郎

日 本医史学会評議員氏名 Ŧ. + 音 順

王丸 勇 今石赤田田松 岡 西 見憲信吾 金芳 岩治 片桐 金城 石川 安芸 大矢 基雄 全節 敬節 川緒大内島方塚山 今市 久志 III 知 波五 平常孝 富恭期 孝 正義

> 服部 衛天 進三 大海 大水 医大路 医中山 光 选三 人 大 选 三 夫 选 员 沃 选 员 山谷津 三丸木山 明 良 山 三 松 形 廼 木 福島 長門谷 中沢 戸苅近· 田 高鈴杉 中 木木 洋治 太郎 助一 明 義 藤中中中津高鈴杉野野西泉崎山木田 五恒三郎 祖三郎操 啓 豊彦 行 孝 正 道 暉

日本医史学雑誌に文部省の 金の交付決定 刊行補 助

交付 であ させ、 が、 術定期刊行物への補助金を本学会はこの 昭 和46年度文部省科学研究費補 これを機会に本誌の内容を る。 が決定した。 申 一請 日 本の してきた。 医史学界の発展を期するも 補助金額は十万円である 本年度、 ようやくその 層、 助 金 0 充実

文部 省科学研究費補助

昨 年にひきつづき、 昭 和 46 年度の科学研究費の本学会関係は 総合研究Aで本学会の

悠紀

郎

< 0 交付されることが決定した。 蘭 医史学雑誌に発表しているように、 III 今後の 学界の事情を知る上で貴重な資料が多 理 事長を班長とした堀内文書研 研 究成果の 発表が期待される。 既にこれまで 究 幕末 班 10

編 後 記

H 伝記を逐次掲載していく予定である。 た。 投稿をお待ちしています。 本号に、 ここには、 新し 1) 小伝の 試みとして評伝の 程度でまとまっ 欄を設 た

昭昭 和和 十五 日 日 発行 即 刷

日 本医史学雑 第十七

発 印 発 編集者代表 行 者 日 大 日 Ŧī. 代表 小 協 鳥 印 刷 蘭 史 有 III 限 会 社三 会 郎

便 東京 番 号 五二五〇 研究室内 三 番番

順天堂大学医学部医史学 東京都文京区本郷

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the Japanese Society of Medical History

Vol. 17. No. 3

Original Articles

Sept. 1971

CONTENTS

History of Variolation in Europe, especially the
Introduction of Turkish Method in the
West······Akira FURUKAWA···(1)
Medical Treatment as Works of the Priests in the
Nara Period······Seitaro HIGUCHI···(16)
Remarks on the Isai-Iko, Poems by SUGITA
GEMPAKU·····Ransaburo OHTORI···(26)
The History of Epidemics and Scurvy in Hokkaido
before the Meiji Era Part 11
······Akitomo MATSUKI···(42)
Human Anatomical Dissections in Hokkaido
—Supplements—······Akitomo MATSUKI···(49)
Biography
ITO GENBOKU and his friendsTomio OGATA(52)
Materials (69)
$\textbf{Notes from Monthly Meetings} \\ \cdots \\ (85)$
Miscellaneous (100)

The Japanese Society of Medical History

Department of Medical History

Juntendo University, School of Medicine

Hongo 2~1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.